ISSN0918－1946

調 査 年 報 24

平 成 23 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調 査 年 報 24

平 成 23 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵１

北斗市　押上１遺跡　調査状況

木古内町　木古内 2 遺跡　調査状況

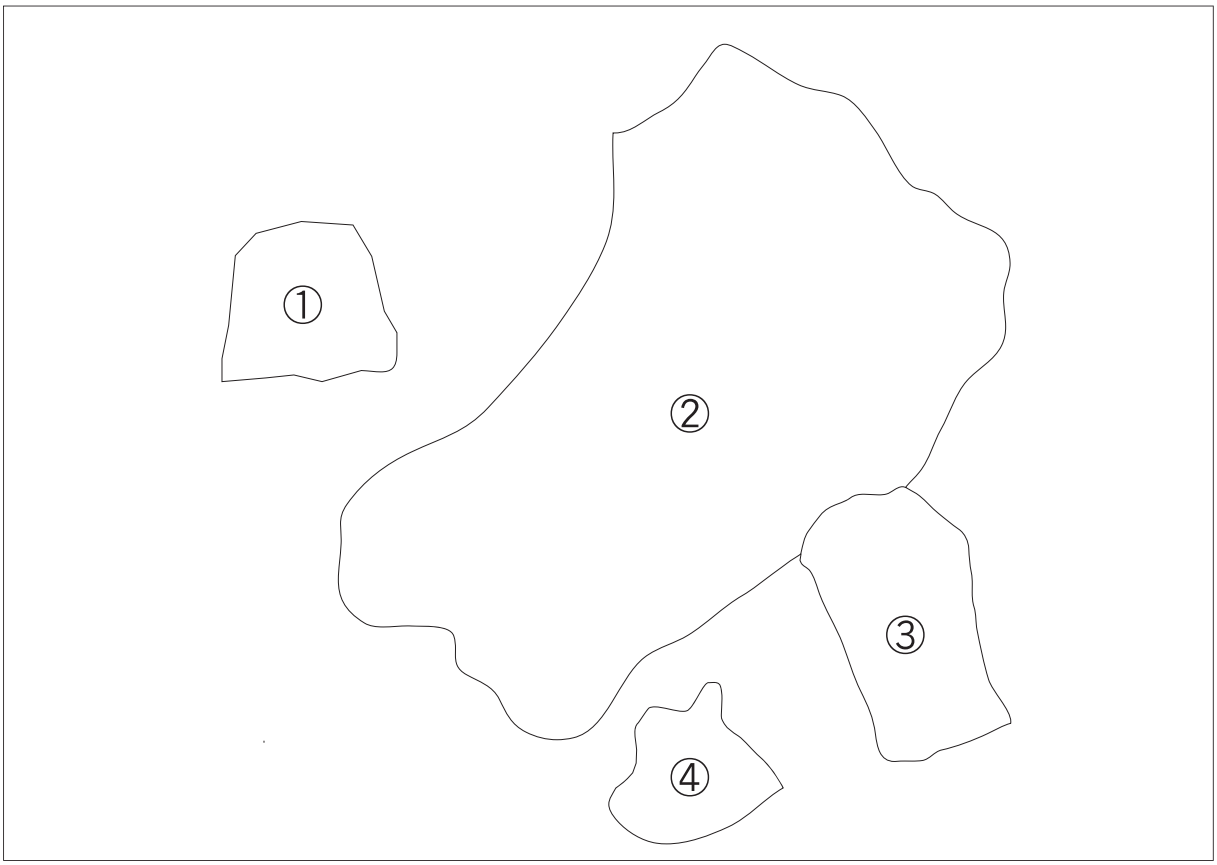
福島町　館崎遺跡　調査状況

木古内町　札苅 5 遺跡出土　旧石器時代の遺物

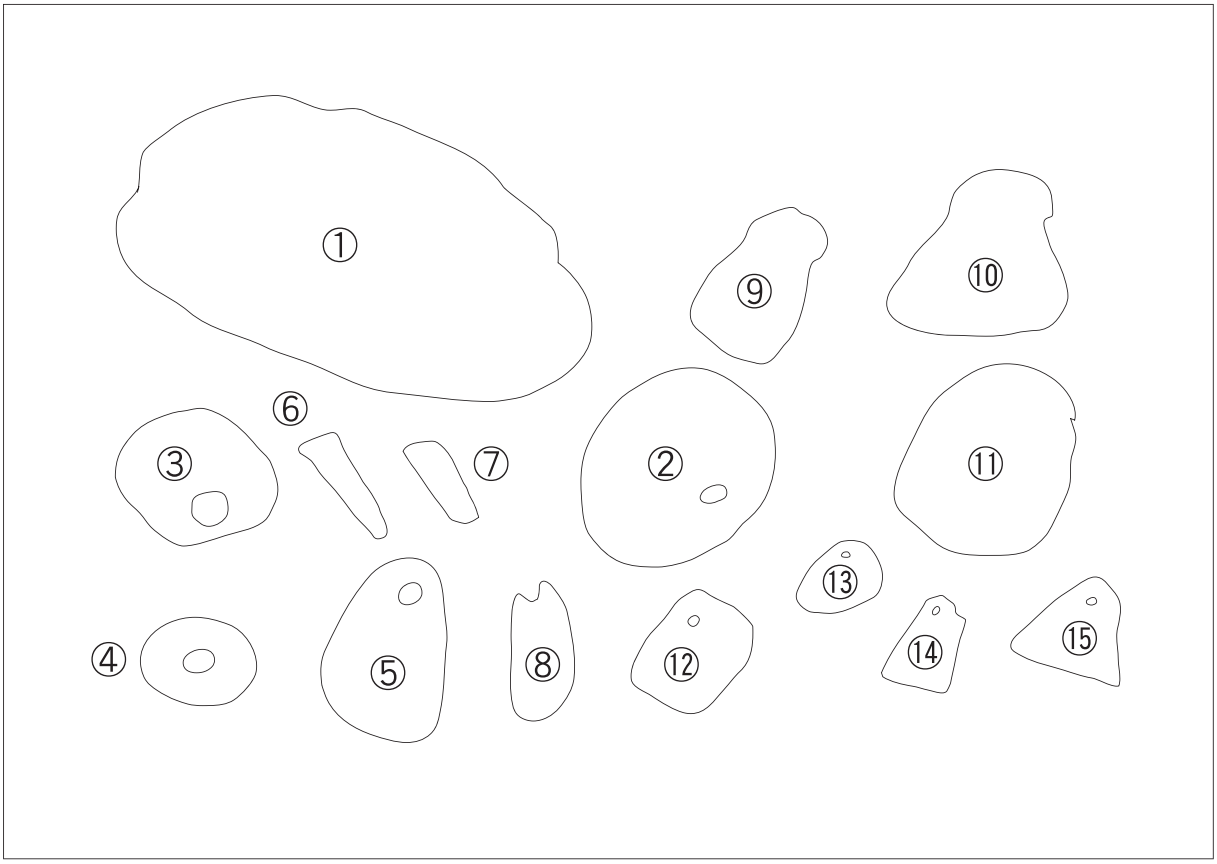
根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群出土　縄文時代前期の土器

土偶類

石製品類



①・②　福島町　館崎遺跡出土、　③・④　木古内町　札苅６遺跡出土



①・②　木古内町　札苅６遺跡出土、　③・④　福島町　館崎遺跡出土
⑤　北斗市　押上遺跡出土、　⑥～⑮　木古内町　大平遺跡出土

口絵 5

福島町　館崎遺跡出土　縄文時代前期後半の岩偶

目　　次

口絵
目次
北海道史略年表
平成23年度の調査
1　調査の概要 …… 1
2　調査遺跡 …… 4
江別市　対雁２遺跡 …… 4
長沼町　南六号川左岸遺跡 …… 8
長沼町　幌内Ｄ遺跡 …… 10
北斗市　押上１遺跡 …… 12
北斗市　当別川左岸遺跡 …… 16
木古内町　釜谷８遺跡 …… 18
木古内町　札苅５遺跡 …… 20
木古内町　札苅６遺跡 …… 24
木古内町　大平遺跡 …… 28
木古内町　蛇内２遺跡 …… 34
木古内町　木古内遺跡 …… 36
木古内町　木古内２遺跡 …… 40
福島町　館崎遺跡 …… 42
富良野市　中五区１遺跡・中五区２遺跡・中五区３遺跡 …… 48
下川町　北町Ｊ遺跡 …… 52
更別村　香川遺跡 …… 54
遠軽町　金山６遺跡 …… 56
遠軽町　白滝遺跡群（整理） …… 60
根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群 …… 62
3　現地研修会の記録 …… 68
4　協力活動および研修 …… 70
5　平成23年度刊行報告書 …… 74
6　組織・機構 …… 75
7　職員 …… 76

北海道史略年表

本州の時代区分		年代（西暦）	北海道の時代区分		平成23年度調査遺跡の主な時期
明治～平成			（近 代･現 代）		
江戸時代		A.D.1900	近世	アイヌ文化期	トーサムポロ湖周辺竪穴群
室町時代			中世		
鎌倉時代		A.D.1200	擦文文化期		
平安時代					大平
奈良時代		A.D.800		オホーツク文化期	トーサムポロ湖周辺竪穴群
古墳時代		A.D.400	続縄文時代		幌内Ｄ
弥生時代		B.C.300			対雁２
縄文時代	晩 期		縄文時代	晩 期	対雁２ 大平･中五区１･中五区２･中五区３ 南六号川左岸
	後 期	B.C.1000		後 期	南六号川左岸･札苅６･釜谷８･当別川左岸･押上１･金山６
	中 期	B.C.2000		中 期	南六号川左岸･釜谷８･押上１･金山６ 札苅６･当別川左岸 館崎･北町Ｊ
	前 期	B.C.3000		前 期	札苅５･館崎･木古内１･木古内２･大平･蛇内２ トーサムポロ湖周辺竪穴群
	早 期	B.C.4000		早 期	釜谷８
	草創期	B.C.7000		草創期	
		B.C.12000	旧石器時代		香川
旧石器時代		B.C.20000			札苅５
		B.C.30000			

平成23年度の調査

1　調査の概要

今年度は、道内10市町村に所在する20遺跡で発掘調査を実施した。このうち10遺跡は前年からの継続調査である。前年まで発掘調査を終えて整理作業のみを行ったのは12遺跡で、松前町の１遺跡を除き継続の整理作業である。発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発局の各開発建設部が実施する工事に伴う調査が８市町村13遺跡で、道路工事・ダム建設・河川改修に伴うものである。北海道新幹線建設に伴うものは３市町６遺跡である。北海道（総合振興局建設管理部）が行う道路工事に伴うものは根室市の１遺跡である。

以下、調査成果を時期順に略述する。各遺跡の特徴的な事項を示すようにし、時期の重複する遺構は最古の時期を目安に記述する。なお、遺構などの（　）数字は員数である。

旧石器時代　札苅５遺跡で美利河型細石刃核を含む石器群が、香川遺跡で忍路子型細石刃核を含む石器群が出土している。

縄文時代　早期　トーサムポロ湖周辺竪穴群Ａ地区の竪穴住居跡(1)は、浦幌式・東釧路Ⅱ式土器などの石刃鏃石器群の時期である。釜谷８遺跡ではノダップⅠ式土器を含む貝殻文土器が出土している。札苅５遺跡では物見台式土器が少量発見されている。

前期　トーサムポロ湖周辺竪穴群では押型文尖底土器の時期の遺構群を調査し、Ａ地区で竪穴住居跡(1)、Ｂ地区で竪穴住居跡(9)、土坑(17)、集石などが検出された。

木古内遺跡では円筒土器下層ｂ式の時期の竪穴住居跡(6)や、早期後半から前期後半にかけてのフラスコ状を含む土坑(17)が検出された。大平遺跡や当別川左岸遺跡では円筒土器下層ｃ・ｄ式が出土しており、大平遺跡では当該期の竪穴住居跡(30)、フラスコ状を含む土坑(82)、柱穴様ピット(106)、焼土(34)なども検出されている。これら遺構は前年と同様に、入れ子状であったり切り合うなど複雑に絡み合って検出された。前年から継続調査した盛土遺構は円筒土器下層ａ・ｃ・ｄ式から中期初頭円筒土器上層ａ式の時期で、膨大な量の土器・石器のほか再生土製円盤・耳栓などの土製品や玦状耳飾(17)・垂飾などの玉類、異形石器・線刻礫・北海道式石冠に似る小型の軽石製品などの石製品が出土している。木古内２遺跡や札苅５遺跡からは円筒土器下層ｄ式の時期の遺物が出土しており、札苅５遺跡では当該期の竪穴住居跡(9)、柱穴様ピット(126)、焼土(6)も検出されている。

館崎遺跡では大型廃棄土坑(3)、土坑(3)、集石(3)、焼土(15)が検出され、円筒土器下層ｄ式の時期の盛土遺構廃棄層からは、膨大な量の土器・石器のほか板状土偶や岩偶（現存長37㎝日本最大級）、玦状耳飾(15)・大型の玉、線刻礫などが出土している。

中期　北町Ｊ遺跡では昨年に続き少量だが押型文・押引文土器が出土している。石器製作に係わる遺跡で珪化岩の大型石材が８割弱を占め、残りは黒曜石の小型石材である。金山６遺跡も黒曜石製石器とフレイク・チップしか出土していないが、遺物の形状等から中期後半から後期前葉と推定される。

当別川左岸遺跡では円筒土器上層ｂ式の時期の土坑(3)が、釜谷８遺跡では末葉煉瓦台式土器から後期前葉の天祐寺式～涌元式土器の時期の土坑(4)、焼土(6)、Ｔピット(2) が検出されている。札苅５遺跡でも中期前後とみられるＴピット(6) が検出され、うち４基が弧状にならぶ。札苅６遺跡ではサイベ沢Ⅶ式～見晴町式土器の時期の竪穴住居跡(6)や土坑、焼土が検出されており、土偶片、三角形石製品、大珠も出土している。館崎遺跡には円筒土器上層ａ・ｂ・ｃ式～サイベ沢Ⅶ式土器の時期の盛土遺構廃棄層がある。南六号川左岸遺跡で北筒式土器の時期の竪穴住居跡(1)が検出された。

後期　押上１遺跡の東側では中期末～後期前葉の集落と盛土遺構が調査され、竪穴住居跡(34)、フラスコ状を含む土坑(22)、小ピット(342)などを検出した。盛土遺構廃棄層からは、膨大な量の土器・石器のほか土偶や青竜刀形石器、ヒスイ製の玉などが出土している。集落の後にはＴピット(3)が掘られている。同遺跡西側からも同時期の竪穴住居跡(11)、フラスコ状を含む土坑(9)、小ピット(99)などを検出している。当別川左岸遺跡では涌元２式・トリサキ式の土器が出土し、土坑(4)も検出されている。札苅６遺跡ではトリサキ式～大津式土器の時期の竪穴住居跡(7)や土坑、焼土が検出されている。館崎遺跡の盛土遺構には竪穴住居跡(2)があり、十腰内系赤彩壺形土器などが見られた。

晩期　中五区１・２・３遺跡でタンネトウＬ式土器が出土している。中五区１・３遺跡では同時期の土坑(1・2)も検出されている。南六号川左岸遺跡は前葉の土器が主体で、土坑、焼土などが検出されている。対雁２遺跡では後葉から続縄文時代にかけての土坑(95)、焼土(171)、集石(4)、石斧集中(4)などが検出されている。土器も豊富で深鉢・浅鉢形が多く、入れ子状の倒立状態で出土するものも見られた。大平遺跡からは大洞Ａ式併行の土器が出土している。

続縄文時代　幌内Ｄ遺跡で、北大ⅠおよびⅡ式土器の時期の土坑(19)が検出された。すべて墓坑とみられ、円形で礫が充填されたもの(4)のうち１基に人骨がわずかに遺存していた。

オホーツク文化期　トーサムポロ湖周辺竪穴群Ａ地区で貼付文土器の時期の竪穴住居跡(4)、土坑墓(5)、土坑(136)、石組炉、骨片集中などを調査した。土坑墓は配石を伴い、うち２基には人骨の痕跡が見られた。土器が倒立・横倒状態で検出され、石鏃や鉄製品も副葬されていた。土坑の多くは掘り方を有する柱穴で、竪穴との重複はなく、掘立柱建物が建立されていた可能性がある。貼付文土器や礫石器、鉄製品のほか、同心円文を施した骨角製装身具（クックルケシ状製品）１点が出土している。

擦文文化期　大平遺跡で前年につづき、９世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居跡(1)を検出した。北壁に造られたカマドはトンネル式の煙道をもつ。木古内遺跡では、板塀跡とみられる溝跡(1)を確認した。上面には10世紀降下のＢ-Ｔｍ（白頭山－苫小牧火山灰）が堆積していた。

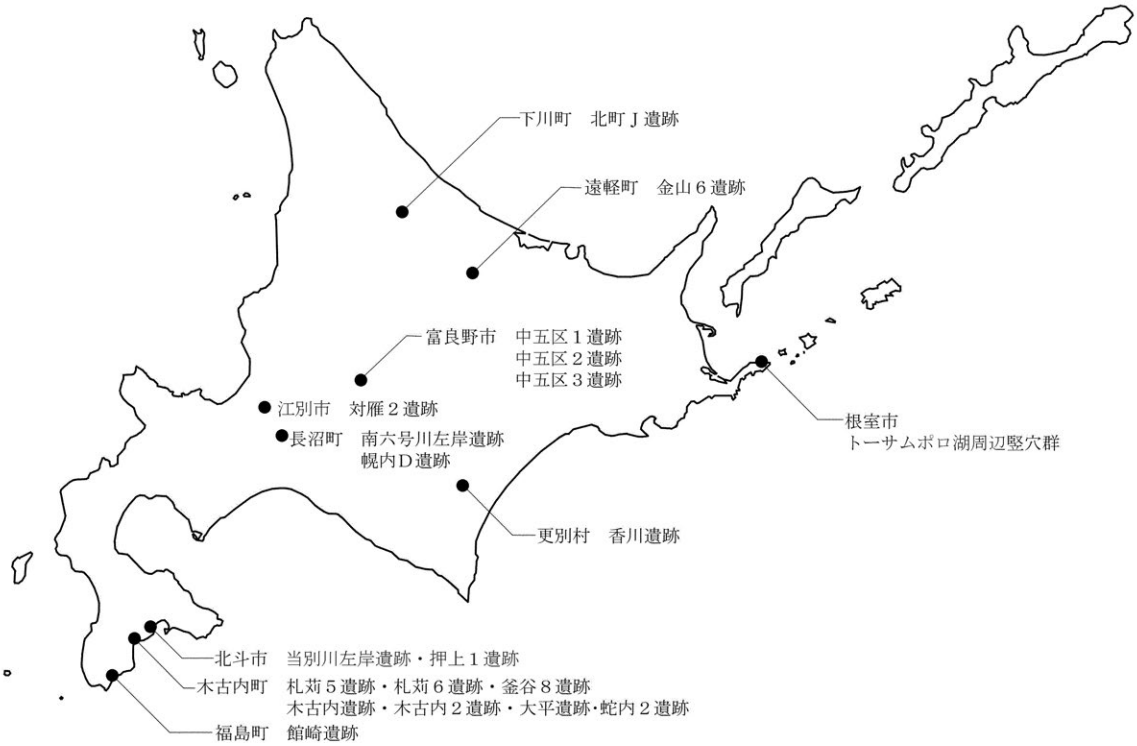
アイヌ文化期　トーサムポロ湖周辺竪穴群Ａ地区で前年につづき、18世紀中葉以降の集落跡を調査した。貝塚(5)、柱穴・杭穴(165)や焼土が検出されており、火打石、錘石、金属製品や貝殻・獣骨・魚骨などが出土している。

整理作業・報告書作成　平成15～21年度に調査したキウス５遺跡は第Ⅰ黒色土層の、祝梅川小野遺跡・梅川１遺跡は第Ⅱ黒色土層の整理がそれぞれまとまり、報告書を刊行した。残りの層や祝梅川上田遺跡・梅川４遺跡についても整理作業を進めている。

白滝遺跡群では、ホロカ型彫器を含む石器群の大型石刃剥離技術が明らかになった旧白滝15遺跡の報告書を刊行。旧白滝３・５遺跡の整理作業も進展している。

北斗市館野地区の遺跡の整理作業では、館野遺跡と館野２遺跡Ａ・Ｂ地区の報告書を刊行。館野２遺跡Ｃ地区、館野６遺跡の整理作業も展開している。

平成19・21年度に調査した下幌呂１遺跡、平成22年度に調査した大平４遺跡、蛇内２遺跡も報告書を刊行。同12月まで調査した福山城下町遺跡も整理作業や木製品・金属製品等の保存処理作業を終え報告書を刊行した。



平成23年度　発掘調査遺跡位置図

平成23年度　事業別発掘調査・整理作業遺跡一覧

事業委託者		原因工事	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	現地調査年
国土交通省北海道開発局	札幌開発建設部	道央圏連絡道路 泉郷道路工事	キウス５ほか	千歳市	整理作業	平成15、16、18~21年調査
			南六号川左岸	長沼町	2,300	新規
			幌内Ｄ	長沼町	1,400	新規
		石狩川改修工事の内対雁築堤工事	対雁２	江別市	2,196	平成11～19年調査
	函館開発建設部	高規格幹線道路函館 江差自動車道建設工事	館野２ほか	北斗市	整理作業	平成16～21年調査
			当別川左岸	北斗市	1,816	新規
			釜谷８	木古内町	786	新規
			札苅５	木古内町	3,393	新規
			札苅６	木古内町	2,758	新規
	旭川開発建設部	天塩川サンルダム建設事業	北町Ｊ	下川町	2,750	平成21、22年から継続
		旭川十勝道路富良野市 富良野道路建設工事	中五区１	富良野市	97	新規
			中五区２	富良野市	64	平成22年から継続
			中五区３	富良野市	180	平成22年から継続
	網走開発建設部	旭川紋別自動車道建設工事	白滝遺跡群	遠軽町	整理作業	平成7~15、18~20年調査
			金山６	遠軽町	520	新規
	帯広開発建設部	帯広広尾自動車道中札内大樹道路工事	香川	更別村	600	新規
鉄道運輸機構	鉄道建設本部北海道新幹線建設本部	北海道新幹線建設事業	館崎	福島町	438	平成21年から継続
			木古内	木古内町	4,304	平成22年から継続
			木古内２	木古内町	330	平成22年から継続
			大平	木古内町	2,230	平成21年から継続
			蛇内２	木古内町	77	平成21年から継続
			押上１	北斗市	2,008	平成22年から継続
北海道	渡島総合振興局（函館建設管理部）	町道朝日豊岡線代行事業	福山城下町	松前町	整理作業	平成22年調査
	釧路総合振興局（釧路建設管理部）	釧路鶴居弟子屈線（A交－57）交付金工事	下幌呂１	鶴居村	整理作業	平成19、21年調査
		根室半島線（B改－637）交付金工事	トーサムポロ湖周辺竪穴群	根室市	2,364	平成21年から継続
合計					30,611	

2　調査遺跡

江別市　対雁 2 遺跡（A-02-110）

事 業 名：石狩川改修工事の内対雁築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：江別市工栄町28番地地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：2,196㎡

調査期間：平成23年５月10日～10月31日

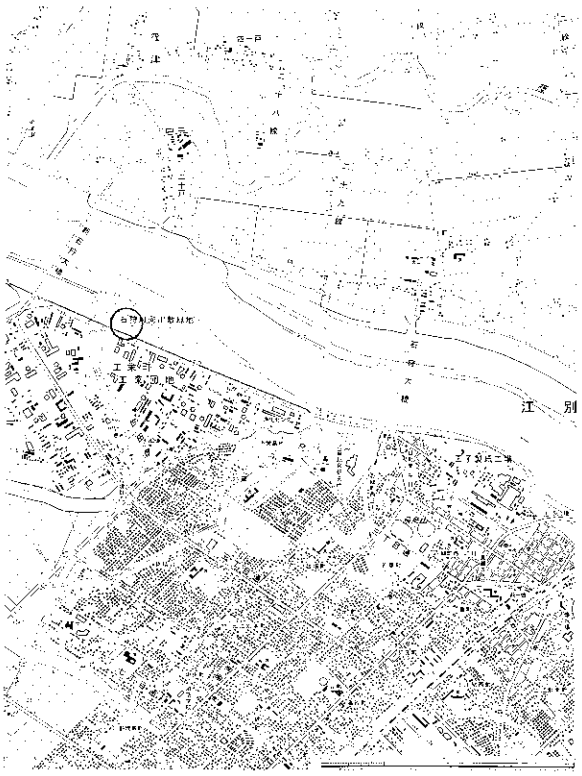
調 査 員：笠原　興、佐川俊一、谷島由貴、越田雅司、吉田裕吏洋

調査の概要

対雁２遺跡はＪＲ江別駅の北西約４㎞の石狩川左岸に位置する縄文時代晩期～続縄文時代の遺跡である。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の河川敷緑地内、標高約６～８ｍの微高地に立地している。

これまで石狩川河川改修工事のための調査が当センターにより平成11～19年まで継続して行われた。平成19年までの調査で検出された遺構は土坑226基、焼土1,640か所、集石37か所、土器集中２か所などである。特徴的な土坑としては、焼けた礫が多数検出されたもの、多量のオニグルミを内部で燃やしたものなどがある。焼土はほぼ全域から検出され、全体の約８割が現地性のもので炭化クルミや微細な魚骨片などが含まれる。土器集中は２か所で検出され晩期後葉の土器が493個体復元された。これまでに出土した遺物は土器約168,000点、石器等118,000点、合計約286,000点である。

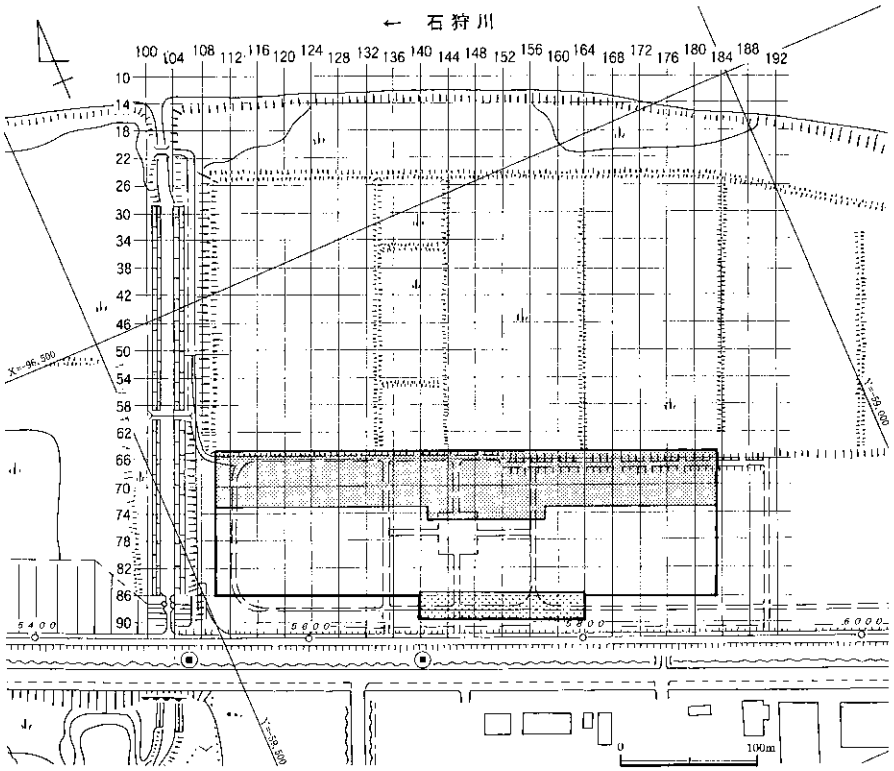
今年度は築堤拡幅工事のための調査を実施した。調査範囲はこれまでよりも築堤側に近く、グリッド名称で南北85～89区間、東西139～163区間である。調査の結果、遺構・遺物は147～155線間と158～160線間の２か所にまとまりがみられた。調査は現地表面から約２ｍの深さまで行っており、遺物の出土した最も低い標高は約6.3ｍである。遺構・遺物の時期はこれまでの調査と同様に縄文時代晩期後葉が主体だが、続縄文時代のものが西側からわずかに出土した。



遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１地形図「江別」を使用）

遺構と遺物

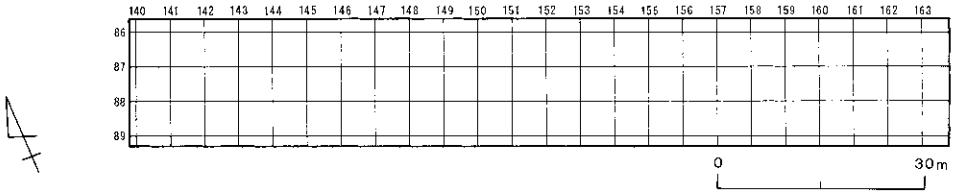
検出した遺構は土坑95基、焼土171か所、集石８か所である。土坑はほぼ円形で径１ｍ以下の小～中型のものである。土坑の覆土は自然堆積で埋まるものがほとんどである。特徴的な土坑としては焼けた礫が多数検出されたもの、底面全体に炭化物が分布するものなどがある。焼土は現地性のものが多く、これまでと同様に炭化物や微細な焼骨片を含んでいる。集石は８か所のうち石斧集中が４か所ある。各石斧集中では石斧が２～７点まとめて置かれ、また砥石とセットで出土したものがある。この他に石製品として勾玉２点などが出土している。出土遺物点数は土器、石器等合わせて約７万点である。

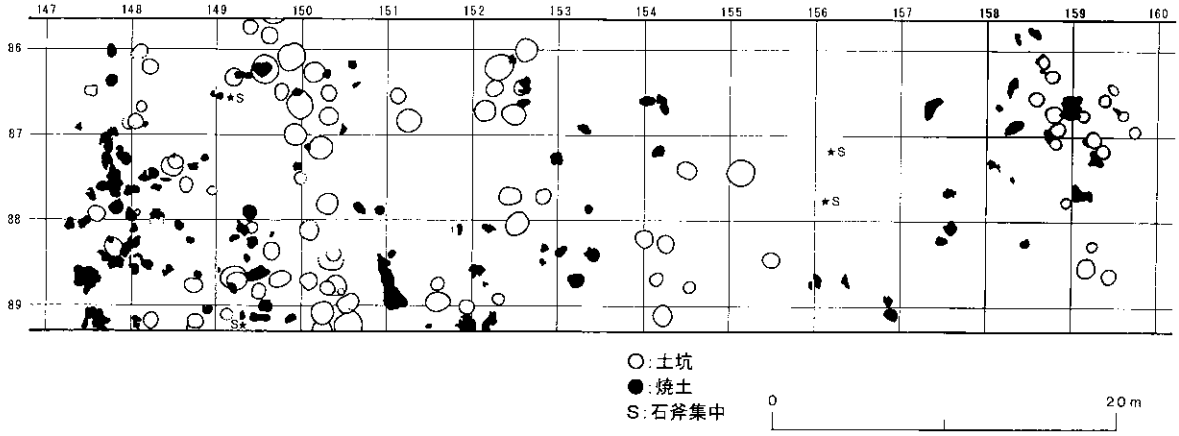


今年度調査範囲

調査終了範囲

調査未了範囲





調査範囲図（上・中）と遺構位置図（下）

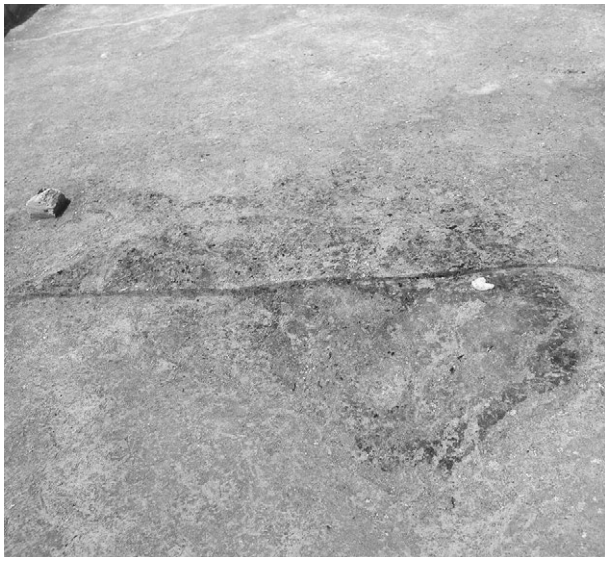
調査状況

土坑・焼土群検出状況

調査状況

土坑の土層断面

土坑の遺物出土状況



焼土検出状況

石斧集中出土状況

石製品

長沼町　南六号川左岸遺跡（Ｅ-17-58）

事 業 名：道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：夕張郡長沼町883-27ほか

調査面積：2,300㎡

調査期間：平成23年８月１日～11月11日

調 査 員：鈴木宏行、末光正卓

調査の概要

南六号川左岸・幌内Ｄ遺跡のある長沼町は空知支庁の南西端、石狩低地帯のほぼ中央東側に位置する。町域は地形的に西に広がる石狩低地帯と東に連なる馬追丘陵に大別される。町内にはタンネトウＬ式、堂林式の標式遺跡である幌内タンネトウ遺跡、幌内堂林遺跡など著名な遺跡を含め、58か所の遺跡が登録され、その多くがそれらの地形の境界付近に立地している。

南六号川左岸遺跡は長沼町市街地から南に７㎞、国道274号線と国道337号線が交差する南東側に位置し、標高18m前後の低位段丘上に立地する。調査区の西・北側は道路などにより削平され、遺跡はその両側にも広がっていたと推定される。

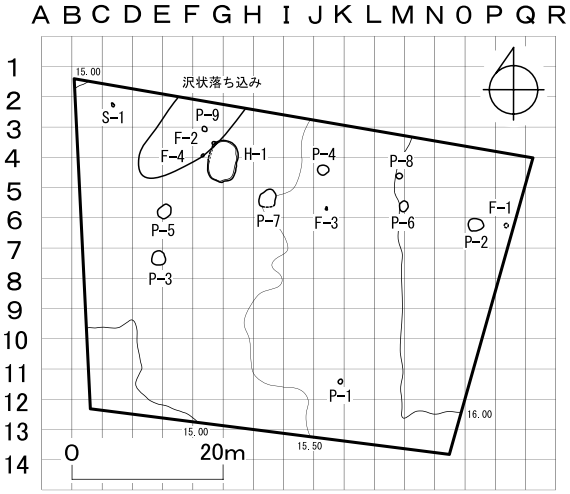
基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：褐色土、Ⅳ層：黄褐色土である。Ⅰ層は耕作土で、樽前ａ軽石が混じり、樽前ａ軽石は風倒木痕の落ち込みで検出されている。また、樽前ｃ軽石は肉眼的に確認できなかった。主な遺物包含層はⅡ層で、一部Ⅲ層からも遺物は出土している。Ⅱ・Ⅲ層の層界は平坦ではなく、堆積後の擾乱が認められる。Ⅳ層には風化した恵庭ａ軽石が混じる。

遺構と遺物

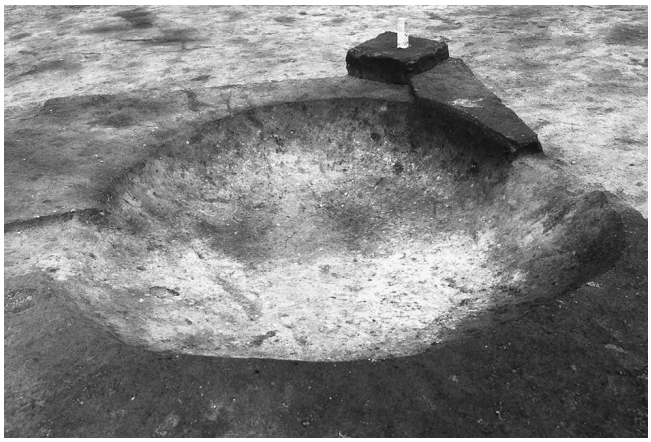
遺構は竪穴住居跡１軒、土坑９基、焼土４か所、集石１か所、土器集中５か所、フレイク集中７か所が検出され、北西部で沢状の落ち込みが確認された。これらは、調査区北側に偏在している。

竪穴住居跡は縄文時代中期後半期と考えられ、６×４ｍ程の隅丸長方形を呈する。床面の長軸上には３か所の焼土が検出された。土坑は直径２ｍ程の円形で、底面が皿状、覆土が黒色土主体のものが多い。

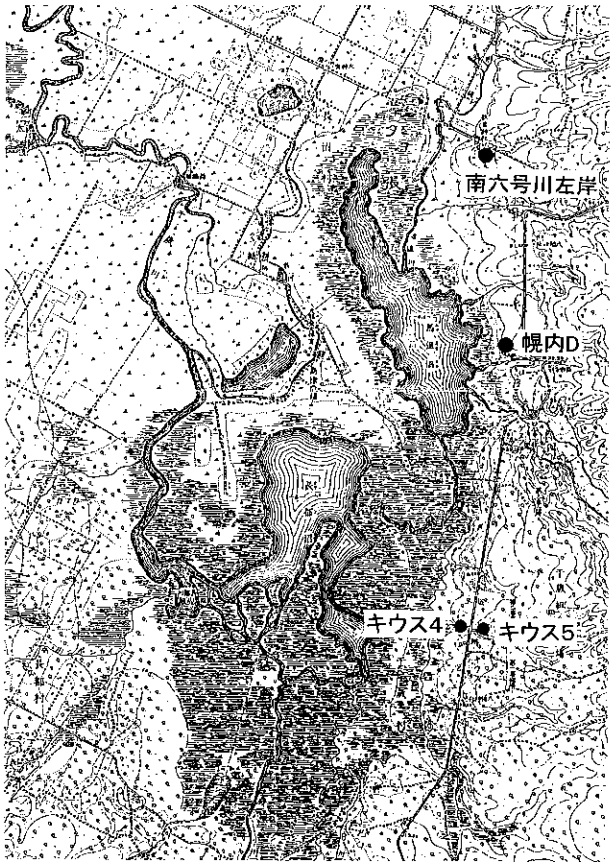
遺物は土器、石器等が約３万点出土した。土器は縄文時代晩期前葉が主体で、中期前・後半、後期前・中葉、擦文文化期のものが少量含まれる。石器類は剥片石器のほとんどが赤井川産とみられる黒曜石製で、緑色泥岩や片岩などの剥片類を含む石斧関連資料が比較的多く見られる。その他、寛永通宝が１枚出土した。



遺構位置図



Ｐ－３



＊国土地理院５万分の１地形図「恵庭」を40%に縮小して使用

遺跡位置図（左：平成13年、右：明治42年）

H－1　遺物出土状況

長沼町（ながぬま）　幌内（ほろない）Ｄ遺跡（Ｅ-17-4）

事 業 名：道央圏連絡道路泉郷道路工事埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：夕張郡長沼町字幌内2032-1ほか

調査面積：1,400㎡

調査期間：平成23年10月18日～11月11日

調 査 員：鈴木宏行、末光正卓

調査の概要

幌内Ｄ遺跡は長沼町と千歳市の境界から南長沼用水に沿って350ｍほど北側の標高18ｍ前後の低位段丘上に立地している。これまで続縄文時代・擦文文化期の土器片、黒曜石製石器などが東西50ｍ、南北80ｍにわたって分布していることが知られていた。平成19年には遺跡西側の隣接地で国営かんがい排水事業道央用水（三期）地区道央注水工に伴う南長沼用水西側地点の調査が行われ、続縄文時代後半～擦文文化期前半の遺物が出土し、段丘崖下の沖積地（ちゅうせきち）にも遺跡範囲が及んでいることが確認されている。

調査区はそのほとんどが耕作によって地表から40㎝程攪乱を受けており、遺物包含層は段丘の西側から南側の縁辺部のみに残存していた。耕作範囲については遺構確認調査を、包含層残存範囲については通常発掘調査を行ったが、包含層残存範囲や遺構数の増加により今年度の調査面積は当初予定範囲の４割程度にとどまった。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：褐色土、Ⅳ層：黄褐色土である。耕作による攪乱のない段丘縁辺部にはⅠ層中に樽前ａ軽石が厚く堆積している。主な遺物包含層はⅡ層で、一部Ⅲ層からも遺物は出土している。遺構確認範囲ではⅣ層を掘り込む土坑を検出したが、表土除去の際に耕作土中から遺構に伴うとみられる集石があったことから地表下40㎝より浅い土坑の存在も想定される。

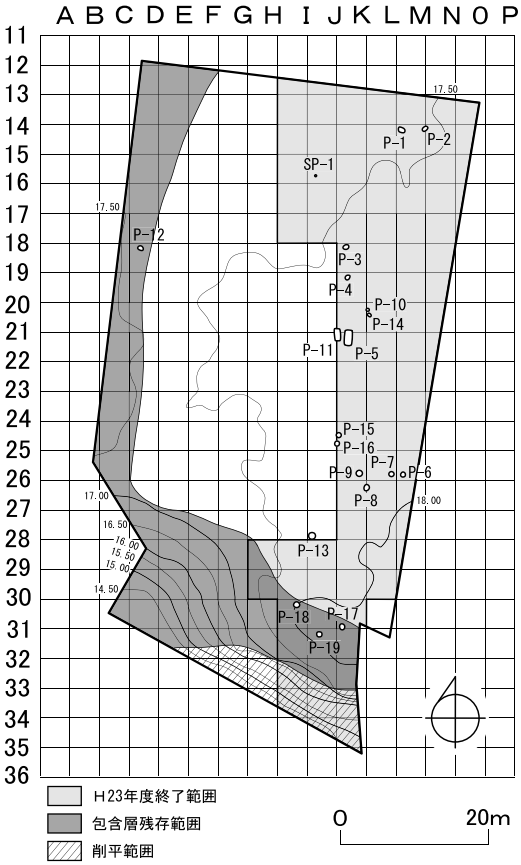
遺構と遺物

今回調査できなかった調査区西側をあわせると、100基程の土坑が検出された。今年度はそのうち土坑19基、小ピット１基の調査を行った。

調査した土坑は円形と長方形のものがあり、長方形の２基は並んだ状態で検出された（Ｐ-5・11）。

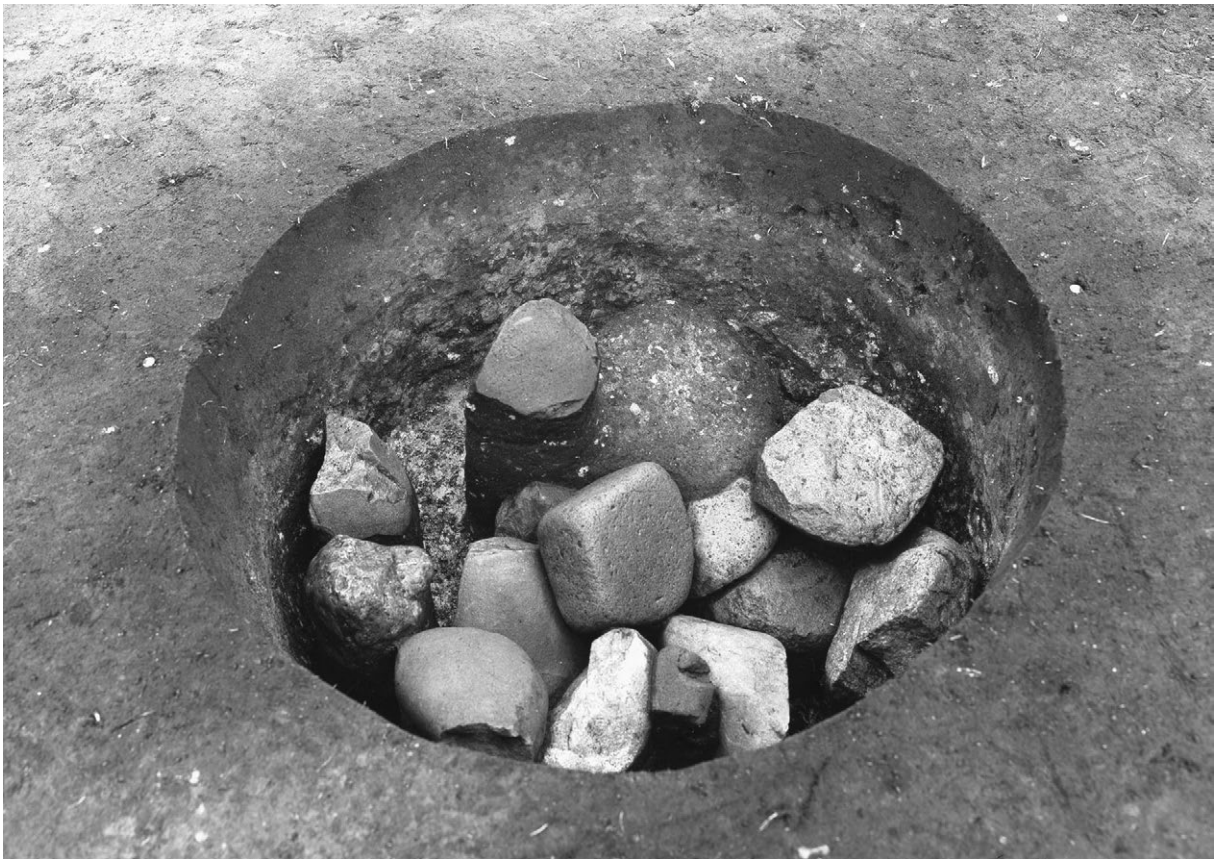
円形のものは直径80㎝程で礫が充填されるものが７基あり、礫の数が10個以上のものが３基、そのうち１基（Ｐ-19）からは土壌化した人骨とみられるものが検出された。また、Ｐ-19の坑底付近からは北大Ⅰ式土器が出土している。

包含層から出土している土器も北大Ⅰ・Ⅱ式が大部分を占めることから、未調査の遺構の時期もほぼ同様の時期と考えられる。



遺構位置図

P－5（右）・P－11（左）



P－19

北斗市　押上１遺跡（Ｂ-06-73）

事 業 名：北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：北斗市大工川176-26ほか

調査面積：2,008㎡

調査期間：平成23年５月９日～平成23年９月９日

調 査 員：立田　理、福井淳一、吉田裕吏洋

調査の概要

押上１遺跡は、海岸から約２km内陸の低位段丘ないし扇状地扇端に立地する（標高約15～20m）。

過去には、函館江差自動車道建設にともなう発掘調査が上磯町（現北斗市）教育委員会により実施されている。平成14～17年度の４か年度で19,355㎡が調査され、竪穴住居跡14軒、フラスコ状土坑21基、土坑30基、Ｔピット31基、焼土２か所が検出された。遺構・遺物は、縄文時代中期末～後期前葉の時期のものが主体である。

今回の調査範囲は、この上磯町教育委員会の調査地点より約200m北西に位置する。調査範囲は、畑の区画により便宜的にＡ～Ｈ地区に分けた。昨年度はＣ～Ｇ地区の調査を行い、竪穴住居跡９軒、フラスコ状のものを含む土坑７基、Ｔピット１基、小ピット54基を確認した。今年度はＡ・ＢおよびＨ地区の調査を行った。

基本土層は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：黒色土層（部分的に上部に白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ-Ｔｍ）が堆積)、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：ローム層、Ⅴ層：砂礫層(扇状地堆積物)。主な遺物包含層はⅡ層で、Ａ・Ｂ地区では盛土遺構を挟む。

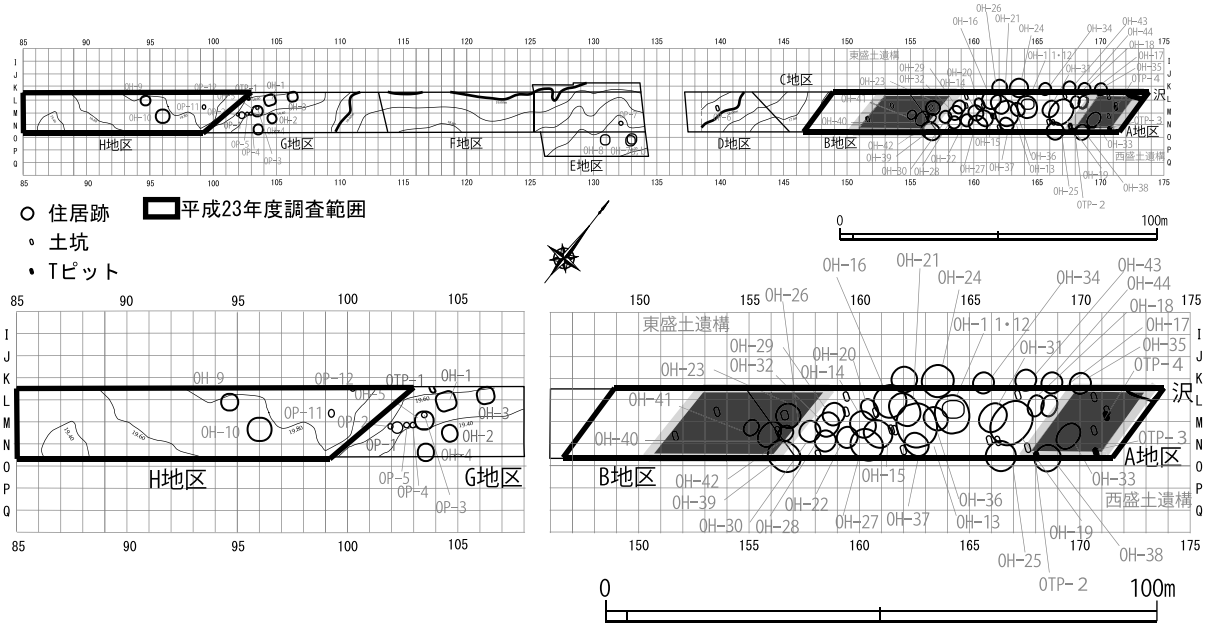
遺構と遺物

Ａ・Ｂ地区から検出された遺構は、縄文時代中期末～後期前葉の盛土遺構２か所、竪穴住居跡34軒、フラスコ状のものを含む土坑22基、Ｔピット３基、小ピット342基、焼土８か所、集石１か所である。調査区全域が耕作による影響を受けていたが、Ａ・Ｂ地区は比較的耕作深度が浅く、盛土遺構も辛うじて残存していた。盛土遺構は竪穴住居跡、土坑、小ピットなど遺構が集中する範囲を挟むように東西２か所確認され、調査区外に延びている。現状では畑に色調の明るい土壌が帯状に見え、遺物が濃密に散布している。厚さは最大30cmほど。竪穴住居跡は、掘り込みが浅く平面形が捉えがたいものと掘り込みが明瞭なものとがあり、重複が著しかった。ほとんどの住居跡から石組炉が確認された。石組炉は、方形を呈するものと、円形を呈するものがあり、礫が二重に配されるものもあった。土坑は、フラスコ状のものが３基含まれる。Ｔピットは、Ａ地区東側でひょうたん形を呈するものが検出された。盛土遺構により埋められた住居が存在し、Ｔピットが住居、盛土遺構を切ることから、集落形成→盛土遺構形成＋集落継続→集落廃絶→狩り場という遺跡形成過程を復元できそうである。

Ｈ地区から検出された遺構は、縄文時代中期末～後期前葉の竪穴住居跡２軒、土坑２基、小ピット45基。Ｈ地区は耕作深度が深く、Ⅲ・Ⅳ層での遺構確認調査となった。昨年度調査したＧ地区を含めて集落が形成されていたとみられる。

遺物は土器・石器等合わせコンテナにして431箱、推計点数12万８千点出土している。土器は縄文時代中期末葉～後期前葉のものがほとんどで、盛土遺構や住居覆土から一個体が潰れた状態や半完形で出土することもあった。石器には石鏃、つまみ付きナイフ、磨製石斧などがある。剥片石器はほとんどが頁岩製である。なお、石鏃の基部にアスファルトが付着しているものもある。この他に、土偶が東盛土遺構、青竜刀形石器、ヒスイ製玉（長さ49㎜）が西盛土遺構から出土している。

遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１地形図「函館」「七飯」「茂辺地」を使用）

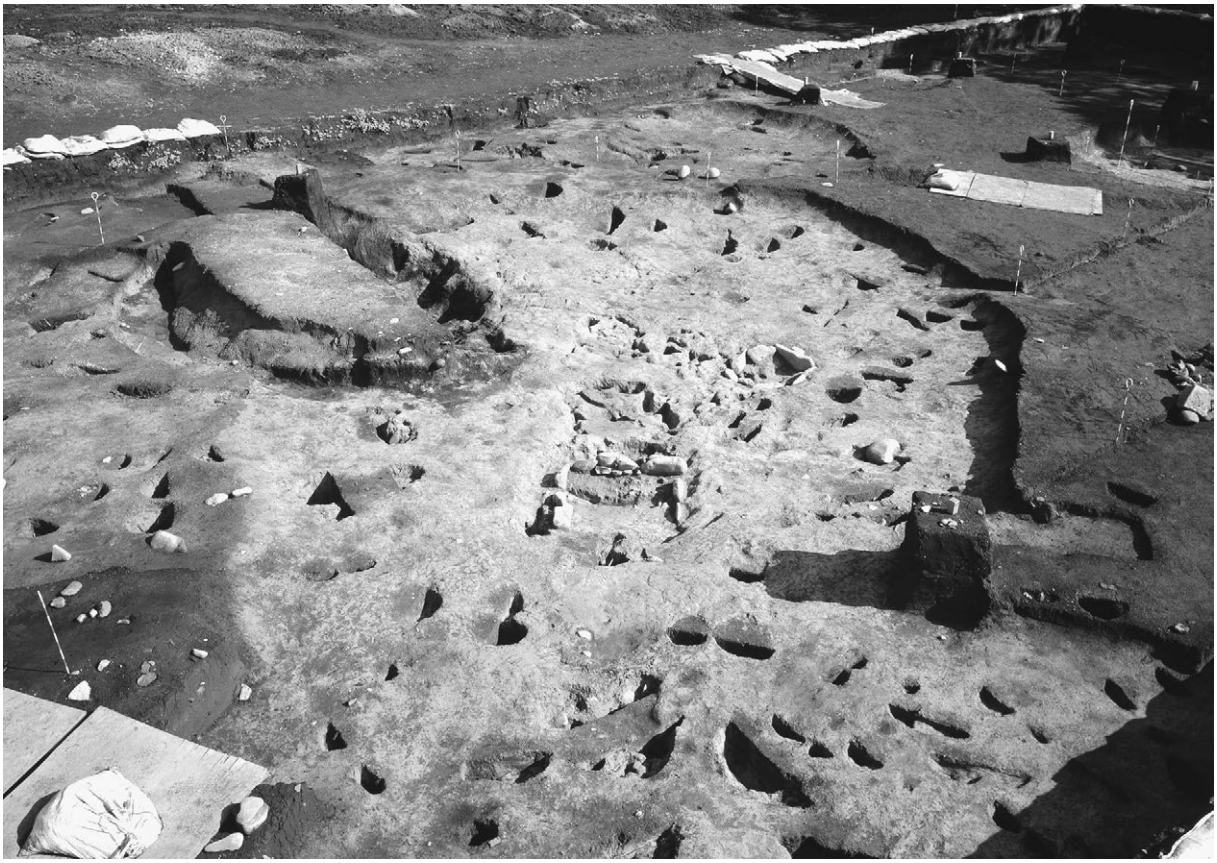


遺構位置図（上段は調査区全域、下段はＨ地区、Ａ・Ｂ地区の部分拡大図）

Ａ地区調査状況

青竜刀形石器出土状況

掘り込みの浅い竪穴住居跡



掘り込みの明瞭な竪穴住居跡

北斗市　当別川左岸遺跡（Ｂ-06-42）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道札苅５遺跡外道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：北斗市当別552-3～553-19

調査面積：1,816㎡

調査期間：平成23年８月１日～９月９日

調 査 員：立川トマス、芝田直人、佐藤和雄

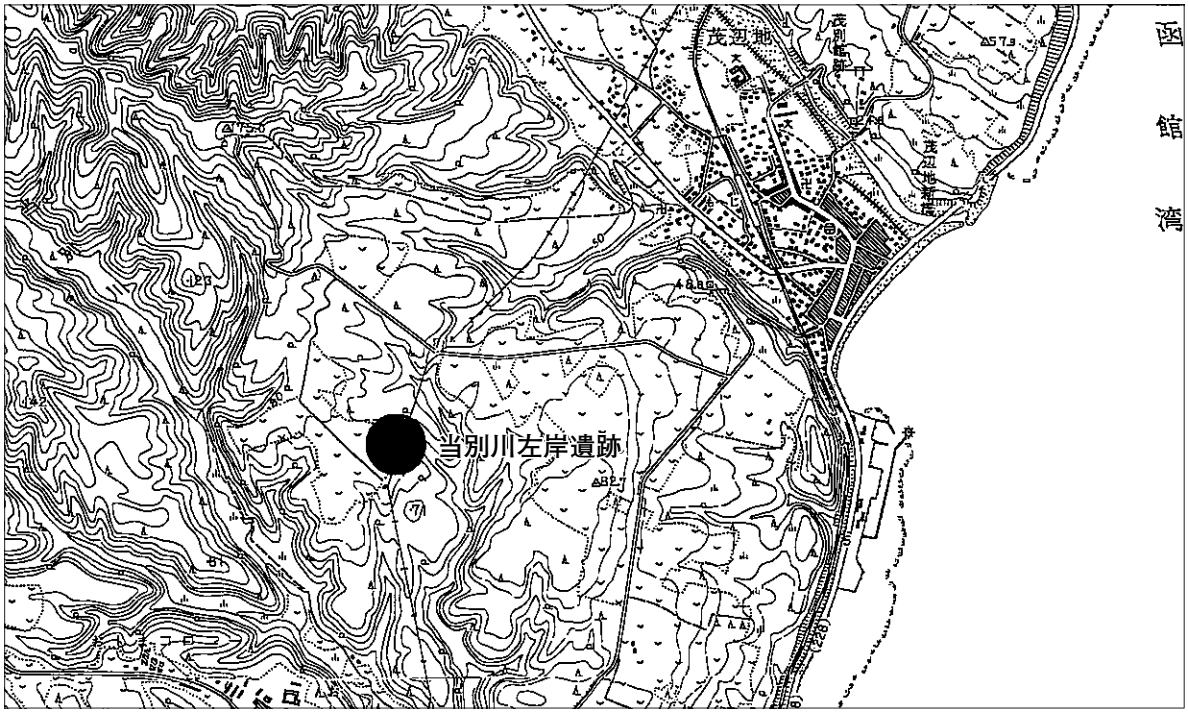
調査の概要

当別川左岸遺跡は、ＪＲ渡島当別駅から北東へ約2.5km、茂辺地川と当別川に挟まれた海岸段丘上に立地している。地形は調査区中央部に位置する沢に向かって緩やかに傾斜する。標高は75～76ｍである。調査範囲は３か所に分かれ、発掘不要範囲を挟み西側に１か所（Ａ地区）、東側に遺構確認調査区を含み２か所（Ｂ・Ｃ地区）がある。今年度は調査区中央部に施設されている工事用道路の北側、山側と呼称されている部分を調査した。

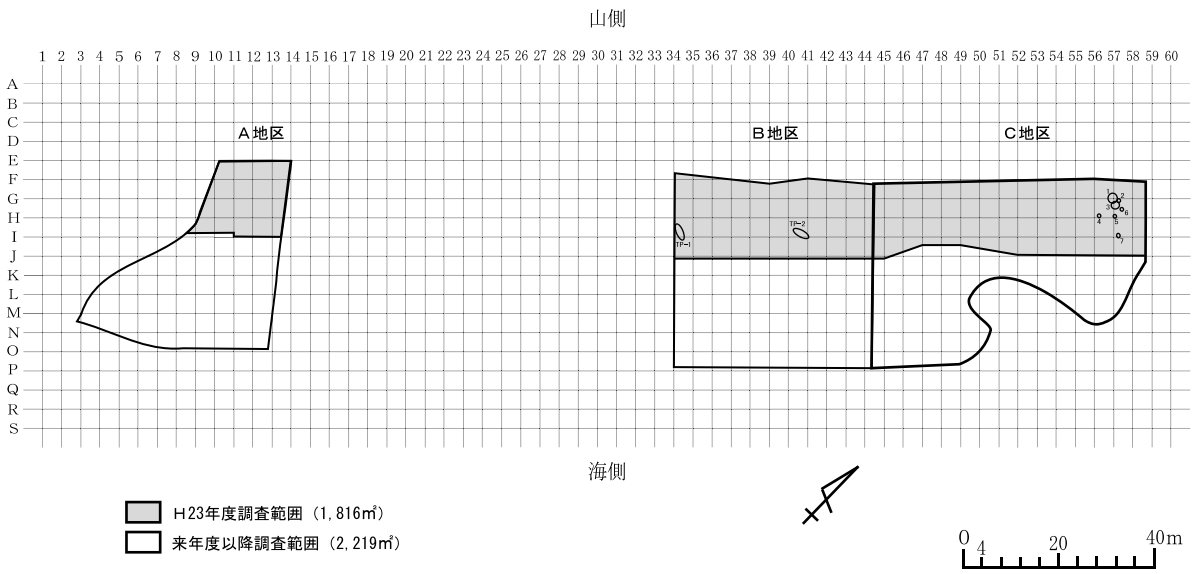
基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土（Ｂ-Ｔｍを含む）、Ⅲ層：暗褐色土、Ⅳ層：黒褐色土、Ⅴ層：褐色土（漸移層）、Ⅵ層：黄褐色土（ローム）である。Ⅱ層・Ⅲ層が主な遺物包含層である。

遺構と遺物

調査では、縄文時代前期、同中期、同後期の遺構と遺物を検出した。遺構は、土坑７基（縄文時代中期３基・同後期４基）・Ｔピット２基を検出した。土器は、縄文時代前期後半(円筒土器下層ｃ・ｄ式)、同中期前半（円筒土器上層ｂ式)、同後期前葉（涌元２・トリサキ式）が出土している。石器等は、剥片石器では頁岩製がほとんどを占め、石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー等が、礫石器ではたたき石・すり石・台石等が出土している。



遺跡位置図　（国土地理院２万５千分の１地形図「茂辺地」を使用）



調査範囲と遺構位置図

山側部分調査状況

木古内町　釜谷８遺跡（Ｂ-05-51）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道札苅５遺跡外道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡木古内町字釜谷260-4～260-34ほか

調査面積：786㎡

調査期間：平成23年９月５日～平成23年11月11日

調 査 員：立田　理、福井淳一

調査の概要

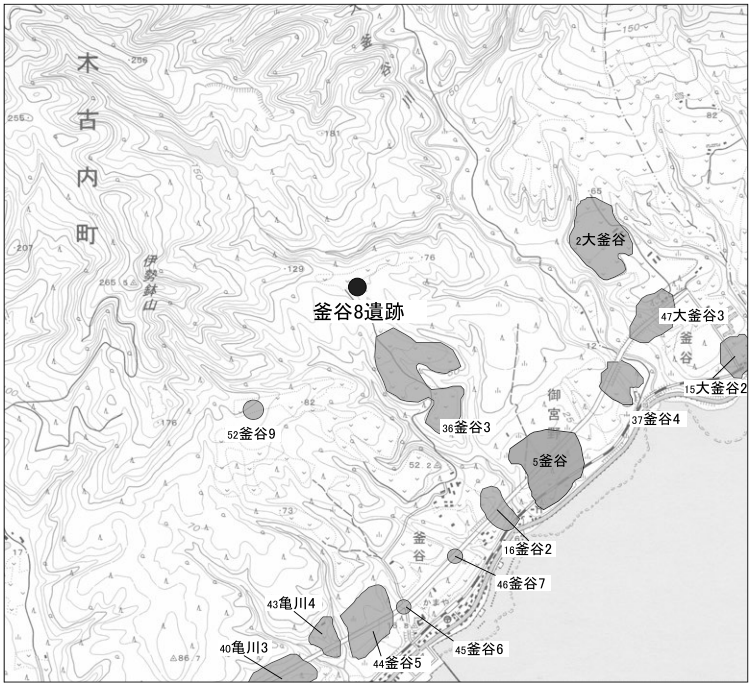
遺跡は、ＪＲ釜谷駅の北方1.5㎞、津軽海峡に面する海岸線から１㎞程内陸に位置する。標高は81～85ｍであり、松前半島東部に発達する三段の海成段丘のうち、最も高位のものに立地しているとみられる。遺跡の北側には、頁岩を産する大釜谷川の支流、大坪沢川が流れており、遺跡はその右岸にあたる。

遺跡の基本土層は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：黒色～暗褐色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土である。Ⅱ層は調査区内で厚さにばらつきがあり、風倒木のくぼみなどに顕著に残っている。厚い部分では上部に白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ-Ｔｍ）の可能性がある火山灰が認められる。これらのうちⅡ層、Ⅲ層が主な遺物包含層である。

当初は7,622㎡について遺構確認調査を行う計画であった。調査を進めるうちⅡ層とⅣ層の間の包含層ではないと判断していた漸移層から貝殻文土器など縄文時代早期の遺物が出土することが明らかとなった。このことから、計画を変更して早期の遺物の広がりを確認するためトレンチを主体とする調査を行った。結果、予定面積の約10%、786㎡について調査を終了した。次年度以降この結果を元に調査を継続する予定である。

遺構と遺物

遺構は、土坑４基、Ｔピット２基、柱穴状ピット２基、焼土６か所を検出した。調査区南端にやや集中する傾向がある。



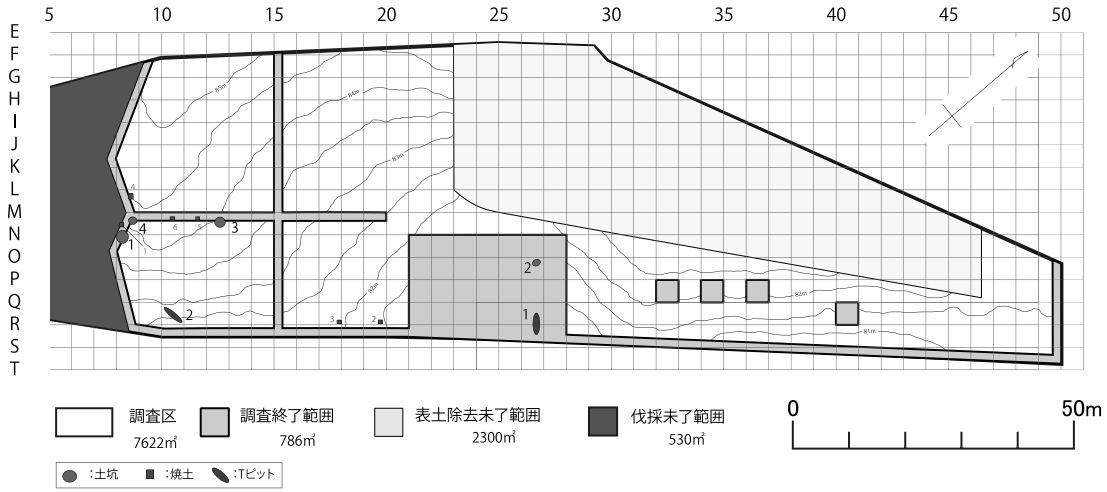
遺跡位置図

（この図は国土地理院２万５千分の１地形図「当別」に加筆したものである）

遺物は2,550点出土した。内訳は土器が1,258点、石器等が1,292点である。

土器には縄文時代早期前葉の貝殻文土器が25点あり、これには口縁部に爪形文が施されるノダップⅠ式も含まれている。最も多いのは縄文時代中期末葉の煉瓦台式から後期前葉の天祐寺～涌元式にかけてのものであり、合計1,124点である。このほか縄文時代早期後半、中期前葉の円筒土器上層式、晩期のものも少量出土している。

出土石器等には石槍４点、石鏃３点、スクレイパー12点のほか、断面が三角形のすり石11点などがある。点数が多いものはフレイク1,105点であり、他に頁岩原石46点、石核30点もある。



調査範囲および遺構位置図（等高線は表土除去後のもの）

調査風景（調査区奥は丸山）

土坑（ＫＰ−４）土層断面

Ｔピット（ＫＴＰ−２）全景

木古内町　札苅５遺跡（Ｂ-05-48）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道札苅５遺跡外道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡木古内町字札苅636-2ほか

調査面積：3,393㎡

調査期間：平成23年５月９日～10月28日

調 査 員：土肥研晶、阿部明義、佐藤　剛、冨永勝也

調査の概要

遺跡は木古内町の北東側にあるＪＲ札苅駅から北側に直線距離で約1.1㎞に位置する。標高15～20ｍの海岸段丘の最奥部に立地し、幸連川の支流の右岸に面する。

基本土層はⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲ層：暗赤褐色土、Ⅳ層：暗褐色土、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：黄褐色土である。本遺跡では、Ⅲ層は不連続な堆積として確認した。風倒木痕では駒ヶ岳ｄ降下火山灰（Ｋｏ－ｄ：1640年降下）や白頭山－苫小牧降下火山灰（Ｂ－Ｔｍ：10世紀前半降下）がみられるものがあった。本遺跡は今年度以降も隣接する地区の調査が予定されている。

遺構と遺物

遺構は竪穴住居跡９軒、Ｔピット６基、小ピット126基、焼土跡６か所、フレイク集中２か所を検出した。これらはすべて縄文時代の遺構である。

竪穴住居跡はすべて縄文時代前期後半の時期である。住居跡は幸連川の支流に面する調査区の東側に偏在しており、調査区外の東側の林道の下にも分布は広がることがわかった。また住居跡同士は狭い範囲での切り合い関係が確認できるものがあることから、調査区外の東側では密に分布する可能性がある。

住居跡は一部のみを検出したものが多く、平面形は不明なものがほとんどである。平面形がわかるものでは円形（Ｈ－１）・隅丸方形（Ｈ－６）がある。付属の施設では、炉跡・柱穴・出入り口を確認しているものがある。また炉跡の周辺の床面が周囲より一段低くなり、壁際に沿ってベンチ状になるものがある。炉跡はほぼ中央に位置し、地床炉で、掘り込みがあるものとないものがある。竪穴住居跡の覆土中には焼土跡がみられるものがある。

住居跡Ｈ－１では、炉跡及びその周辺から土器がまとまって出土した。

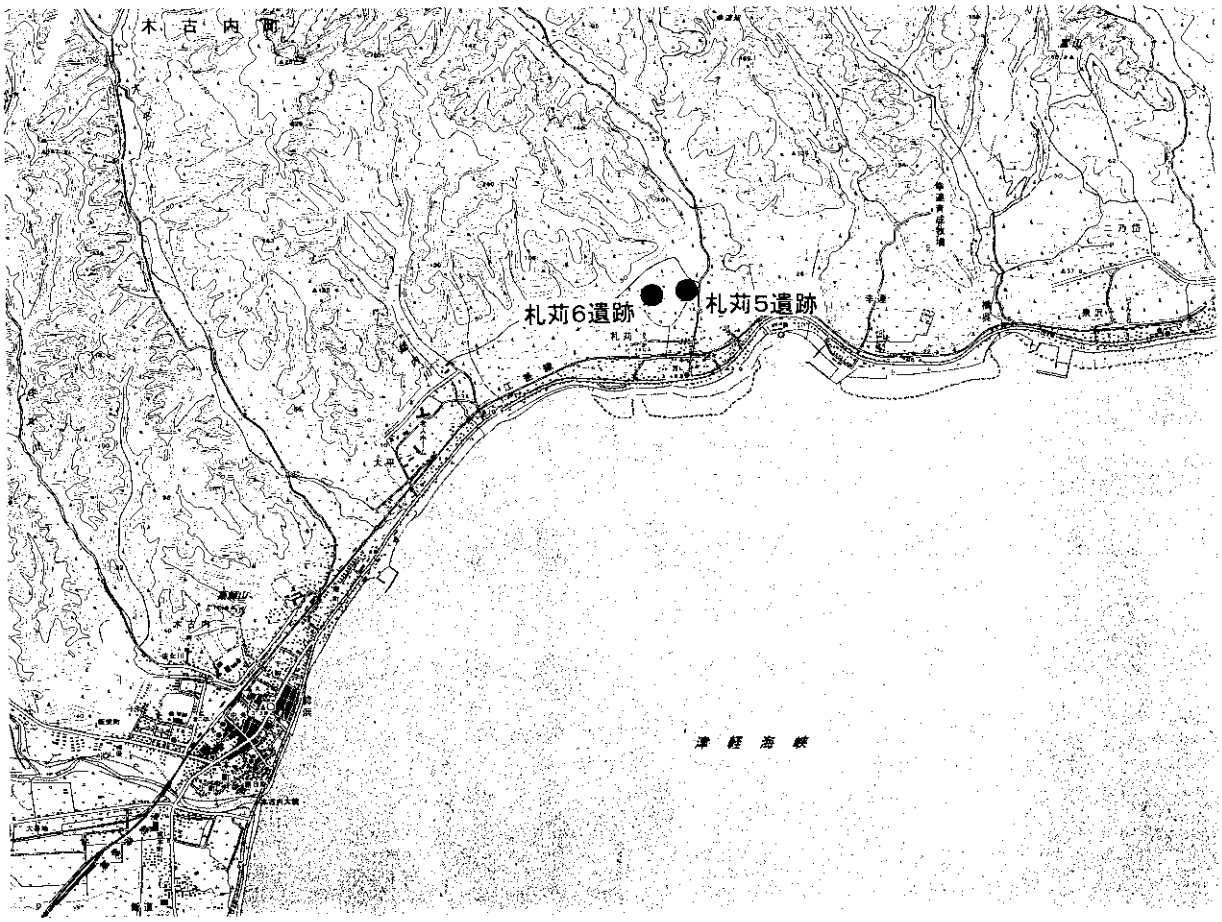
Ｔピットは縄文時代前期後半から後期前葉の可能性があり、ほぼ弧状に並ぶことから同一時期の可能性が高い。

小ピット・焼土跡・フレイク集中は縄文時代前期後半のものが多い。小ピットは柱穴様のもので、竪穴住居跡の南側に分布する。

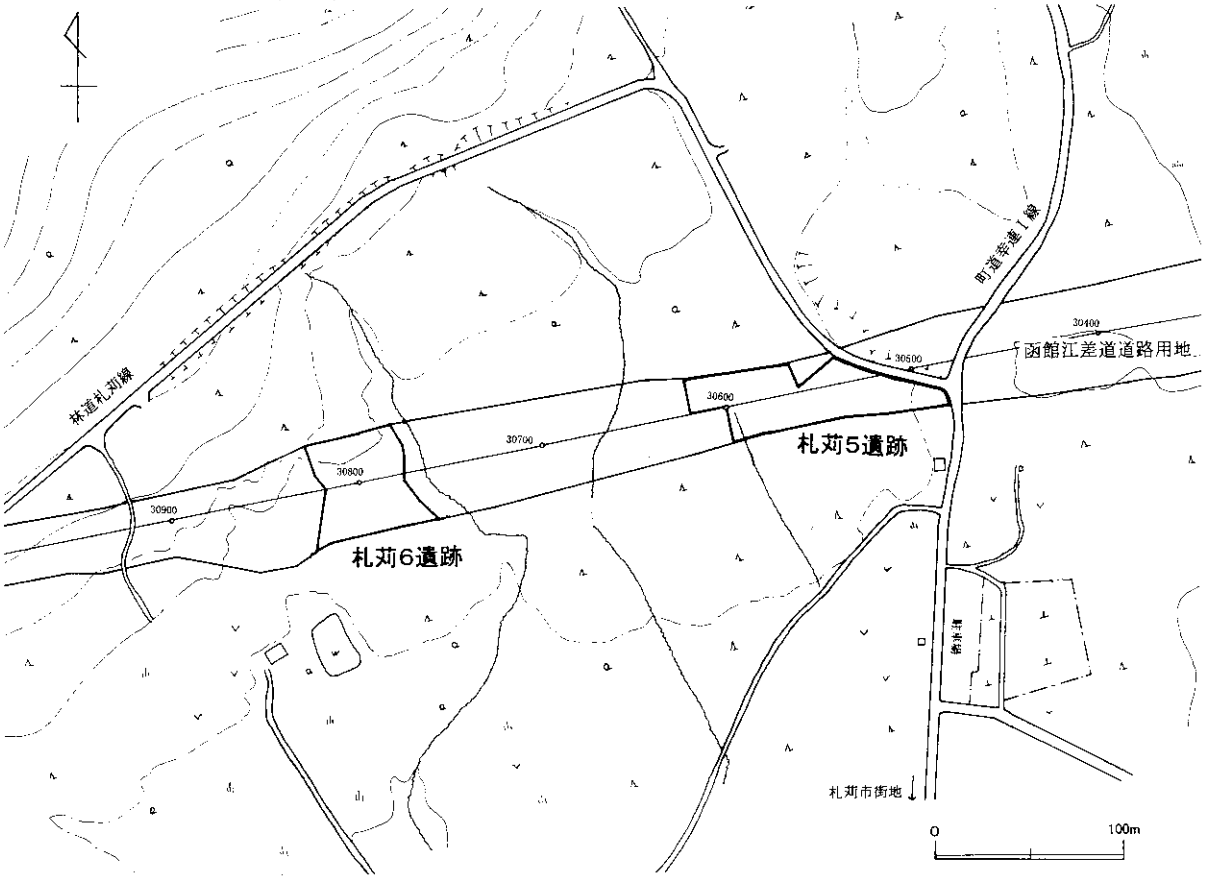
遺物は包含層からは土器約1,000点、石器等約11,000点が出土した。

土器は縄文時代前期後半の円筒土器下層式・後期前葉の土器が多い。また早期前半の物見台式土器が調査区の東側でわずかに出土した。

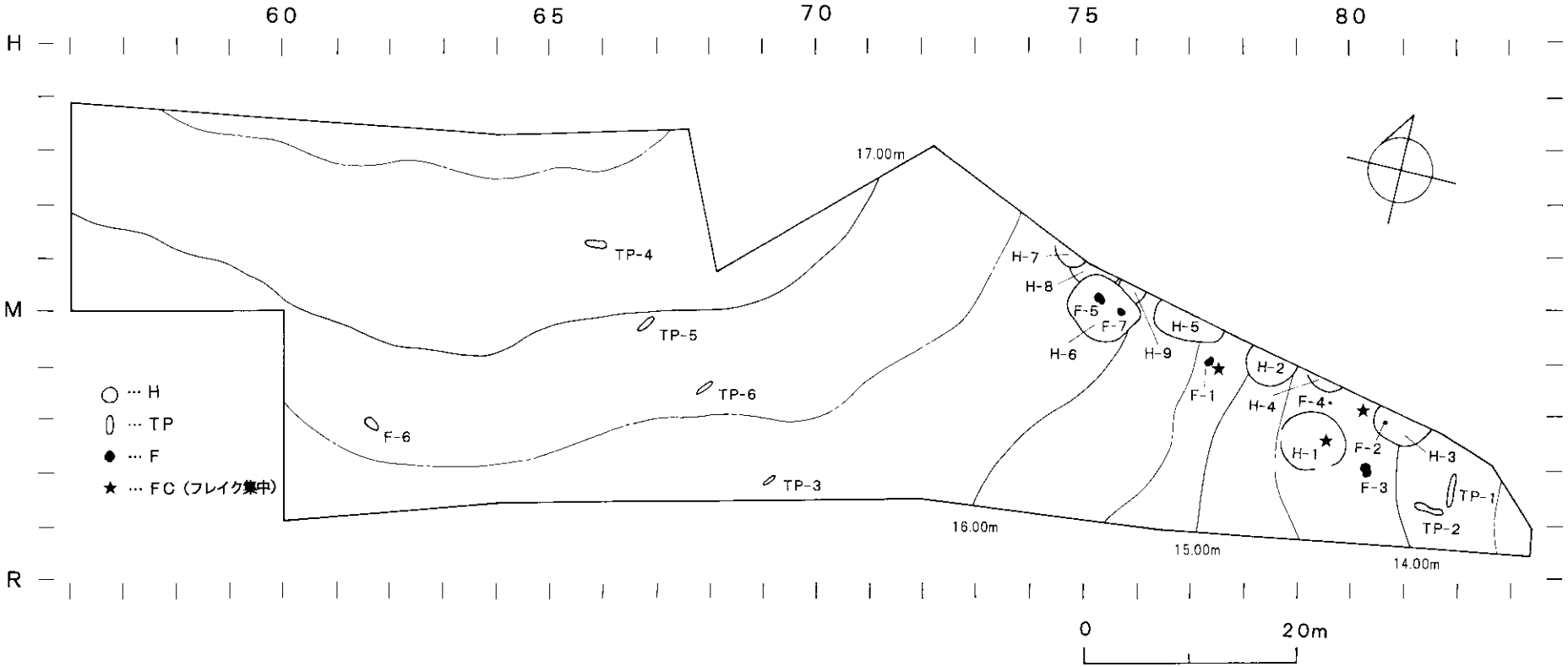
石器は縄文時代の剥片石器ではスクレイパーが多く、礫石器類ではたたき石・すり石・台石・石皿が比較的多くみられた。また旧石器時代では包含層や竪穴住居跡の覆土中から、美利河型細石刃核を含む石器群が出土した。



遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１地形図「木古内」を使用）



遺跡周辺の地形と調査範囲


60
65
70
75
80
H
M
R
17.00m
16.00m
15.00m
14.00m
TP-4
TP-5
TP-6
TP-3
F-6
H-7
H-8
F-5
F-7
H-6
H-9
H-5
F-1
H-2
H-4
F-4
H-1
F-2
F-3
H-3
TP-1
TP-2
○ … H
▯ … TP
● … F
★ … FC（フレイク集中）
0
20m

遺構位置図

竪穴住居跡調査状況

縄文時代前期後半竪穴住居跡（H−１）

木古内町　札苅６遺跡（Ｂ-05-49）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道札苅５遺跡外道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡木古内町字札苅577-2ほか

調査面積：2,758㎡

調査期間：平成23年５月９日～10月28日

調 査 員：土肥研晶、阿部明義、佐藤　剛、冨永勝也

調査の概要

遺跡は木古内町市街地の北東にあるＪＲ札苅駅から北に約500ｍに位置し、前掲の札苅５遺跡の西約300ｍにあたる。また縄文時代晩期の土坑墓群を含む集落跡で著名な札苅遺跡は、当遺跡の南西約700ｍにある。遺跡の南部～中央部～東部は標高約17～20ｍの海岸段丘上の南向き緩斜面、北西部は標高20～24ｍの丘陵斜面で崖錐地形になっている。遺跡の東西には丘陵の湧水点から流れる小沢があり、西側の沢はやや深い。調査区東部には縄文時代晩期以降の地震によるものとみられる断層がある。

基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：暗赤褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：黄褐色土（ローム）で、遺構構築面および遺物包含層はⅡ～Ⅳ層である。Ⅲ層は赤色～暗褐色に色調が漸遷し、焼土および焼土の二次堆積土壌を含むものとみられる。調査区の大部分に分布し、特に南東側が約20㎝と厚い。また竪穴住居跡や木痕などの窪みでは、Ⅱ層中に駒ヶ岳ｄ降下火山灰（Ｋｏ-ｄ）、Ⅲ層上面に白頭山－苫小牧火山灰（Ｂ-Ｔｍ）が薄く堆積している。

調査の結果、縄文時代中期半ばと後期前葉の集落跡であることを確認した。

遺構と遺物

遺構は調査区西側を主体に、北西部の斜面にも分布する。竪穴住居跡13軒・土坑71基・焼土20か所・埋設土器３か所・遺物集中５か所・フレイクチップ集中３か所が検出された。

竪穴住居跡は、縄文時代中期半ばのものは長径２～３ｍの楕円形（あるいは隅丸方形）で掘り込みが深く、後期前葉のものは径４～５ｍの円形で掘り込みが浅い、という特徴がある。前者は壁面が明瞭で、覆土に厚い焼土を伴うものが多い。後者は床面がロームにようやく達するもので、覆土が周囲の包含層と同様で壁面が不明瞭なものが多い。総じて地床炉は確認できるが、柱穴は不明確である。また覆土には、後世の縄文時代後期～晩期の遺物が数多く流れ込んでいる。

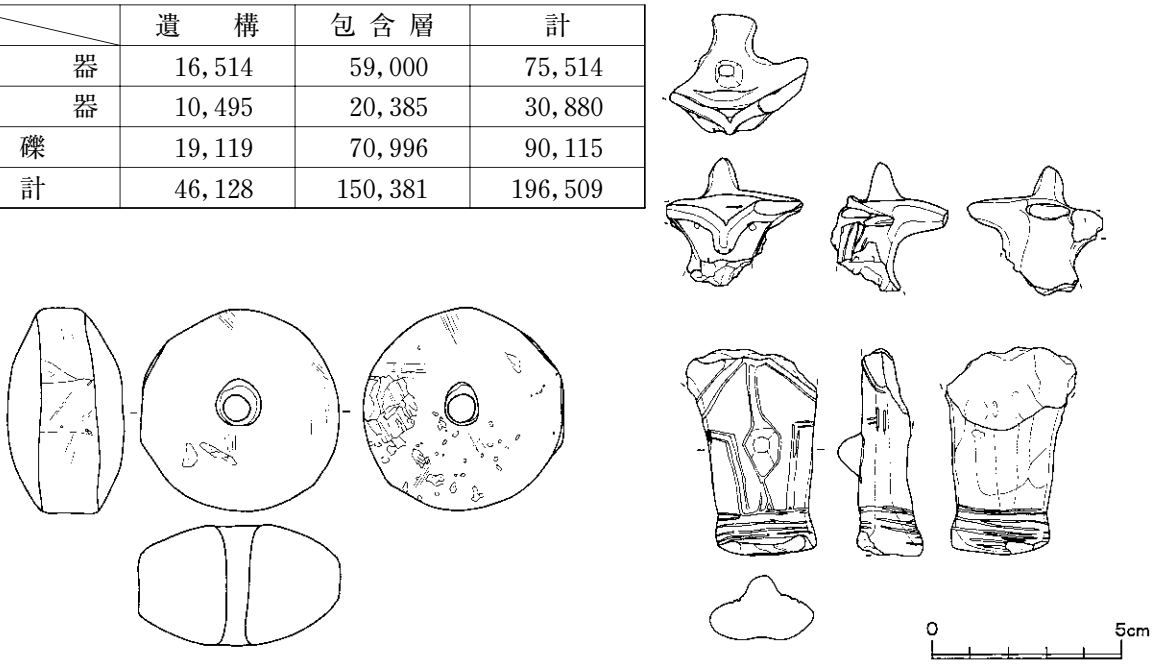
土坑は径60～100㎝の円形で、深さが50㎝前後の定形的なものが多い。覆土の上位に焼土を伴うものが数多く見られる。また北海道式石冠などの礫石器や大型の礫を内包するものも複数ある。土坑の時期は縄文時代前期～晩期であるが、中期後半が主体とみられる。埋設土器は、円筒土器下層ｄ式の個体、榎林式の半個体、同式の胴部があり、いずれも単独で検出された。遺物集中は、土器・石器・礫の小片が多量に混在するもので、特に北西部斜面のふもとにあたる帯状の範囲に多く見られる。

遺物は土器・石器・礫等約20万点が出土した。遺物は調査区のほぼ全域に分布するが、西側～中央部が濃密である。

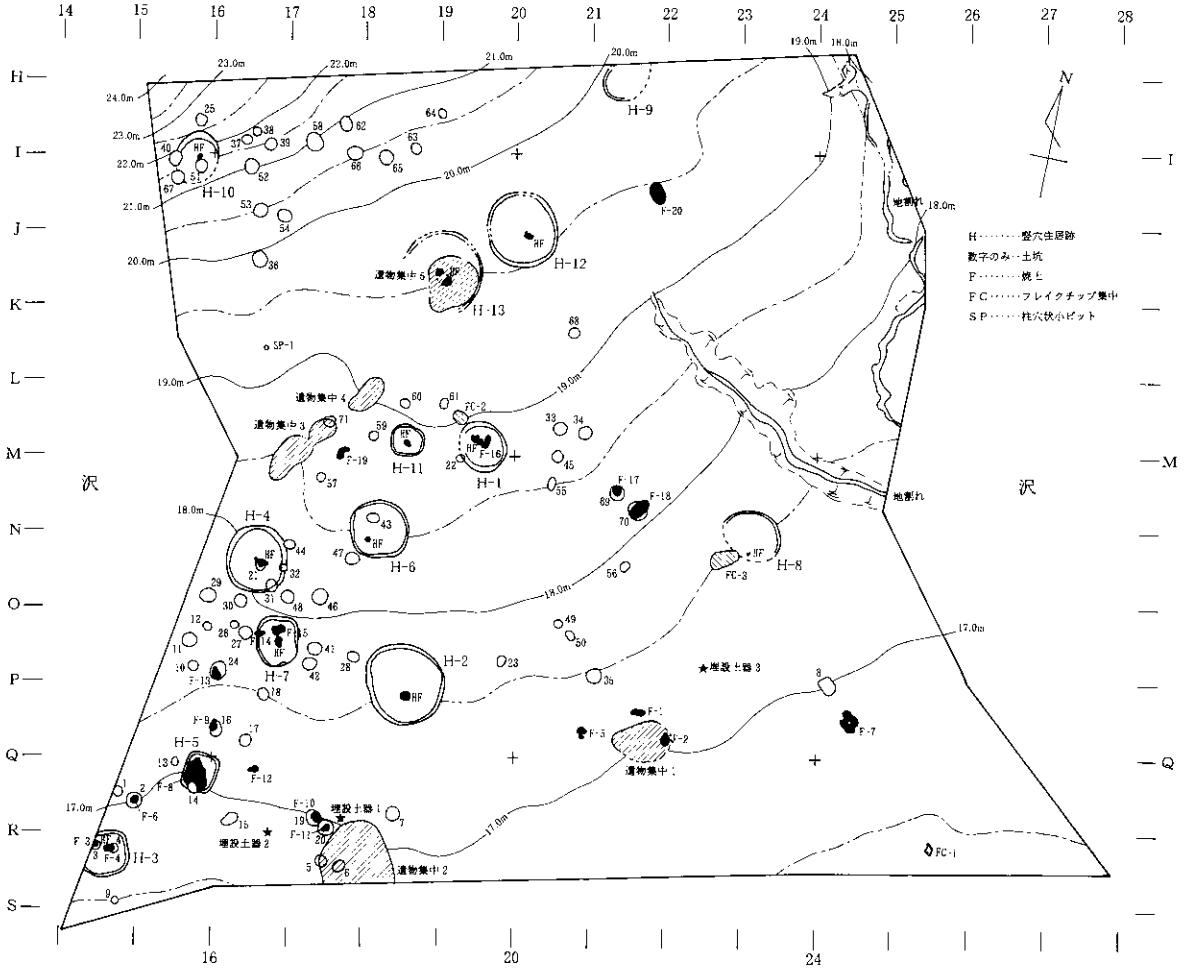
土器は縄文時代前期～晩期、特に中期半ばと後期前葉のものが多く出土した。主な型式は、前期が円筒土器下層ｄ式、中期がサイベ沢Ⅶ式・見晴町式・榎林式、後期がトリサキ式・大津式・手稲式・鮏澗式・堂林式、晩期が聖山式などである。石器は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、石斧、北海道式石冠、すり石、たたき石などがあり、特に扁平打製石器が数多く出土した。また土製品では縄文時代中期の土偶片が複数みられ、石製品では三角形石製品のほか、蛇紋岩に類する石材の大珠が１点出土している。

表　札苅６遺跡遺物集計

	遺　構	包含層	計
土　器	16,514	59,000	75,514
石　器	10,495	20,385	30,880
礫	19,119	70,996	90,115
計	46,128	150,381	196,509



大珠・土偶



遺構位置図

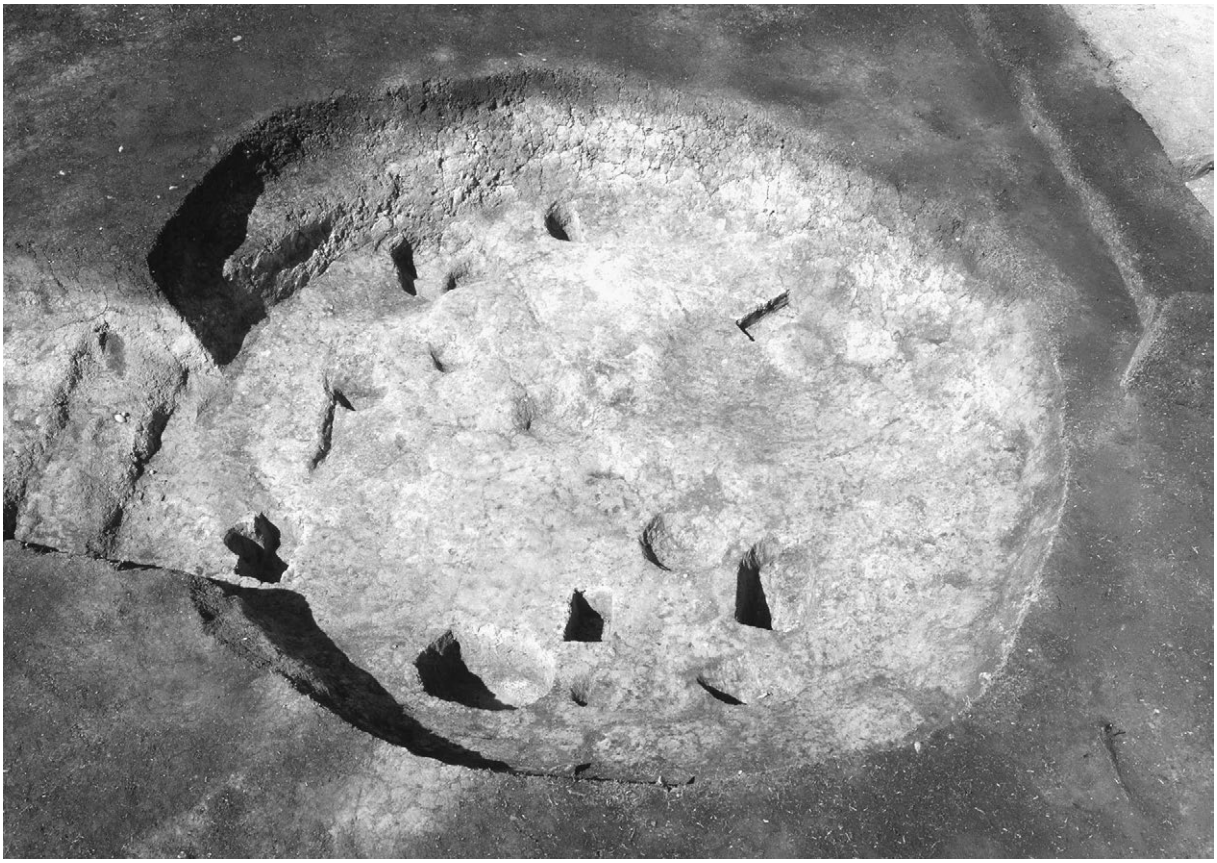
調査状況

土坑群

断層

埋設土器（縄文前期）

遺物集中



竪穴住居跡（縄文中期）

竪穴住居跡（縄文後期）

木古内町（きこない）　大平（おおひら）遺跡（Ｂ-05-7）

事 業 名：北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：上磯郡木古内町字大平63-30ほか

調査面積：2,230㎡

調査期間：平成23年５月９日～11月11日

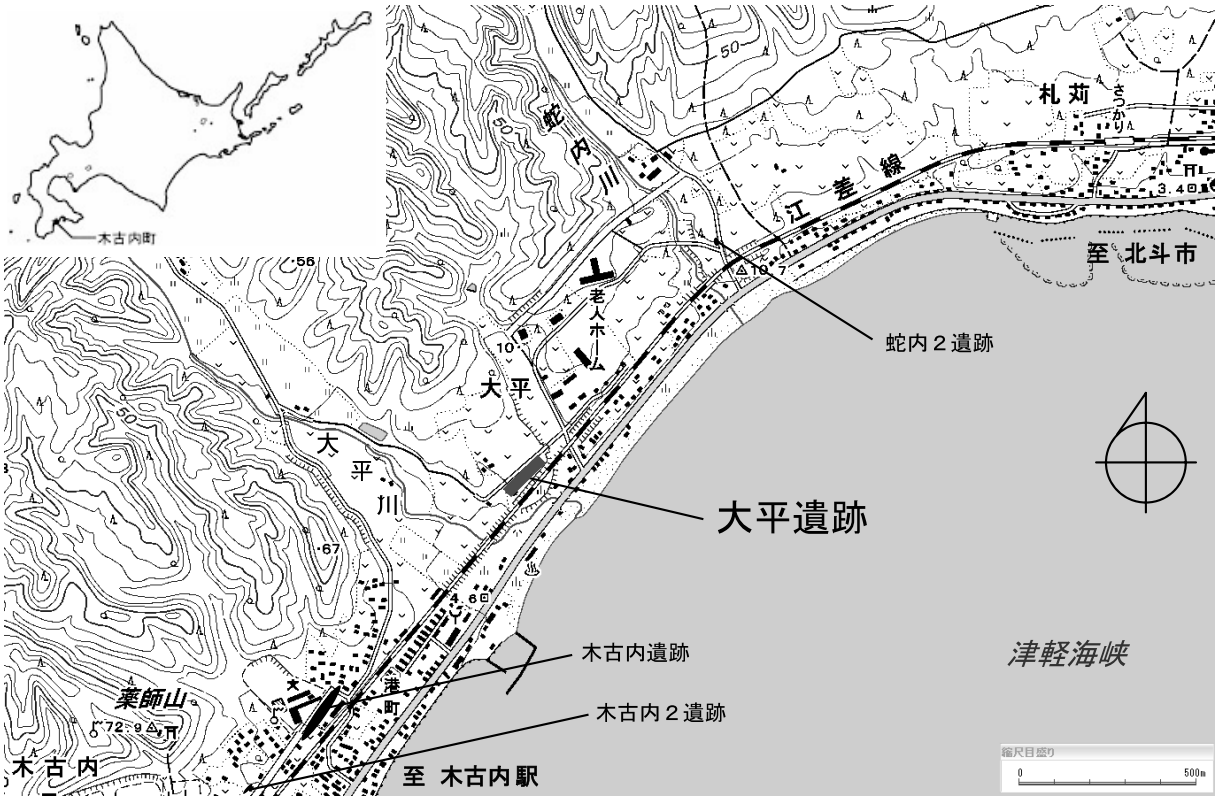
調 査 員：熊谷仁志、立川トマス、鈴木宏行、芝田直人、酒井秀治、佐藤和雄

調査の概要

大平遺跡の調査は、北海道新幹線の建設工事に伴うもので、平成21・22年度に引き続き３年目の調査となる。平成21年度の調査では、丘陵尾根・斜面に位置する411㎡の調査を行い、縄文時代前期後半(円筒土器下層ｃ～ｄ式期）の竪穴住居跡８軒や土坑３基などを検出し、22,794点の遺物が出土した。平成22年度は、町道大平２線を挟んだ南西側を調査し、縄文時代前期後半、中期初頭、晩期後葉、擦文文化期の遺構・遺物を検出した。竪穴住居跡17軒・土坑26基などや縄文時代前期後半を主体とする盛土遺構を検出した。

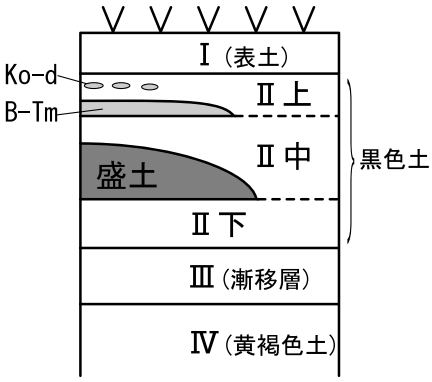
今年度は昨年度調査範囲の北東側を調査した。３か年の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡55軒・土坑230基(うち柱穴状のもの106基、フラスコ状土坑83基)・Ｔピット２基・焼土94か所・礫集中２か所・剥片集中130か所および縄文時代前期後半を中心とした盛土遺構である。

遺跡はＪＲ木古内駅から北東へ約２㎞、大平川と孫七川（まごしち）に挟まれた海岸段丘上に立地している。地形はほぼ平坦で、標高は８～12ｍである。調査範囲の南西端は沢へ落ち込んでおり、標高差は５ｍ程ある。また、調査範囲の東端部および北東端は削平されている。遺構・遺物は町道側に拡がる様子が伺え、町道下にまで及ぶものとみられる。



遺跡位置図（国土地理院刊行の数値地図25000（地図画像）「木古内」を使用）

基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土である。Ⅱ層が主な遺物包含層である。調査前は住宅・豚舎・鶏舎があったことから、遺跡の上面は攪乱・削平を受けている。Ⅱ層からは白頭山－苫小牧降下火山灰（B－Tｍ：10世紀前半降下）・駒ヶ岳ｄ降下火山灰（Ｋｏ－ｄ：1640年降下）が散見される。B－Tｍの上をⅡ上層、B－Tｍと盛土遺構の間をⅡ中層、盛土遺構の下をⅡ下層とした。Ⅱ中層からは、縄文時代前期・中期初頭・後期前半・晩期後葉・擦文文化期のものが出土している。Ⅱ下層・Ⅲ層からは縄文時代早期の遺物が少量出土している。

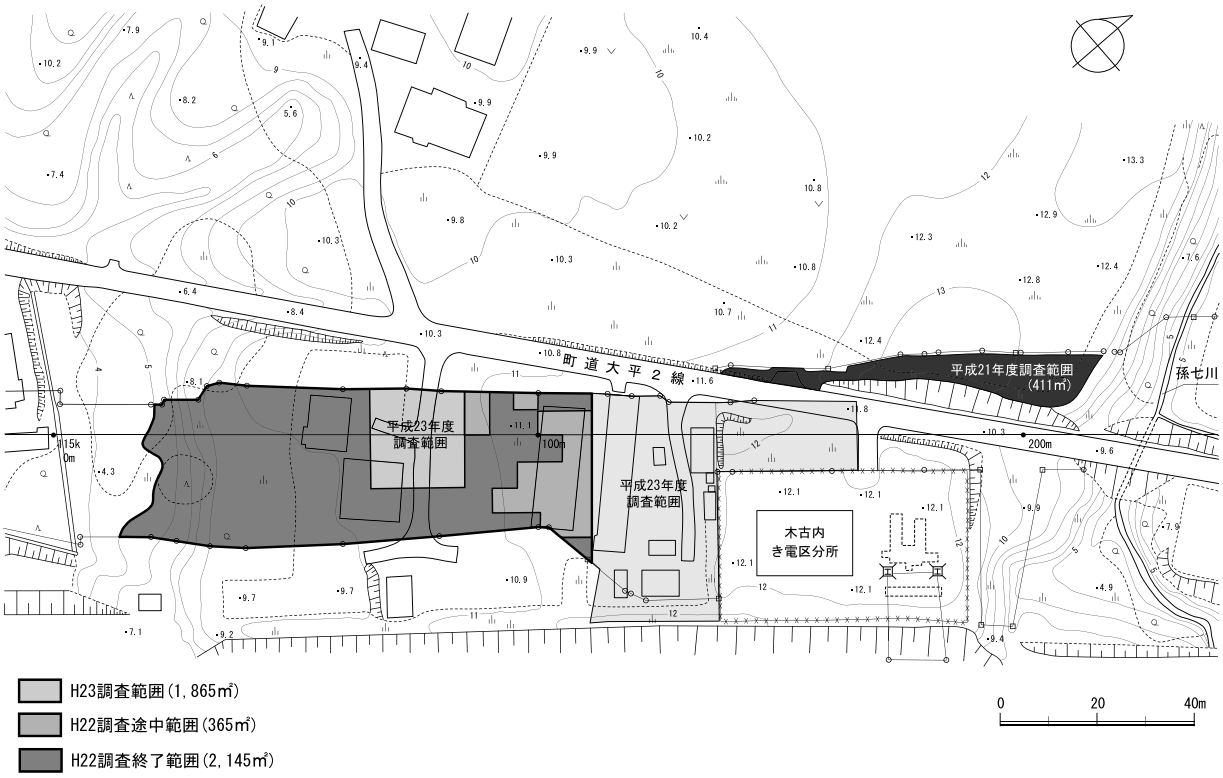


土層柱状模式図

遺構と遺物

今年度は縄文時代早期、前期、中期初頭、後期、晩期後葉、擦文文化期の遺構・遺物を検出した。今年度調査を行った遺構は、竪穴住居跡31軒・土坑201基（うち柱穴状のもの106基、フラスコ状土坑82基）・焼土34か所・礫集中１か所・剥片集中54か所および縄文時代前期後半～中期初頭の盛土遺構である。竪穴住居跡１軒が擦文文化期である他は、縄文時代前期後半の遺構である。時期別に分布を見てみると、遺構・遺物は縄文時代前期後半が多く、調査範囲の全体から検出されている。縄文時代晩期後葉と擦文文化期は、調査範囲の南西側から確認されている。縄文時代早期・後期は遺物のみ出土している。

擦文文化期の遺構は、竪穴住居跡１軒（H-31）を標高9.0ｍの平坦面から検出している。表土除去後にB－Tｍの落ち込みにより確認した。平面形は隅丸方形で、一辺が4.0ｍほどのものである。９世紀後半～10世紀初頭と考えられる。北壁にカマドがあり、トンネル式の煙道がある。柱穴は住居内、住居外とも検出されなかった。



周辺の地形と発掘調査範囲

縄文時代前期後半の遺構は、前記のとおりである。竪穴住居跡は、平面形が円形・楕円形・隅丸方形である。これまでで最も大きな竪穴住居跡（H-16）では、長軸13.6m・短軸10.0mの楕円形となる。そのほかの竪穴住居跡も、長径が４～11mほどの規模がある。主柱穴は４本もしくは６本、壁柱穴が検出されるものもある。主柱穴は直径約0.6m、深さ1.2mに達するものが確認されている。ベンチ構造があるものもあり、形態に違いが見られる。覆土には盛土からの流れ込みを確認できる遺構がある。H-23の覆土からは120個体の土器が層位的に出土している。

土坑は、平面形が円形・楕円形が多く、規模は長径が0.5～1.0mほどである。柱穴状のものは径0.2～0.4m・深さ0.2～0.6mのものと径0.5m・深さ0.7mのものがあり、竪穴住居跡の柱穴と形状・規模が似ていることと配列が認められるものがあることから、柱穴の可能性が考えられる。フラスコ状土坑は坑底径2.0mほど・深さ2.0mほどの規模があり、坑底面の中央に径0.4m・深さ0.05～0.1mの小ピットが確認されるものが多い。調査範囲の北側に密集して検出している。

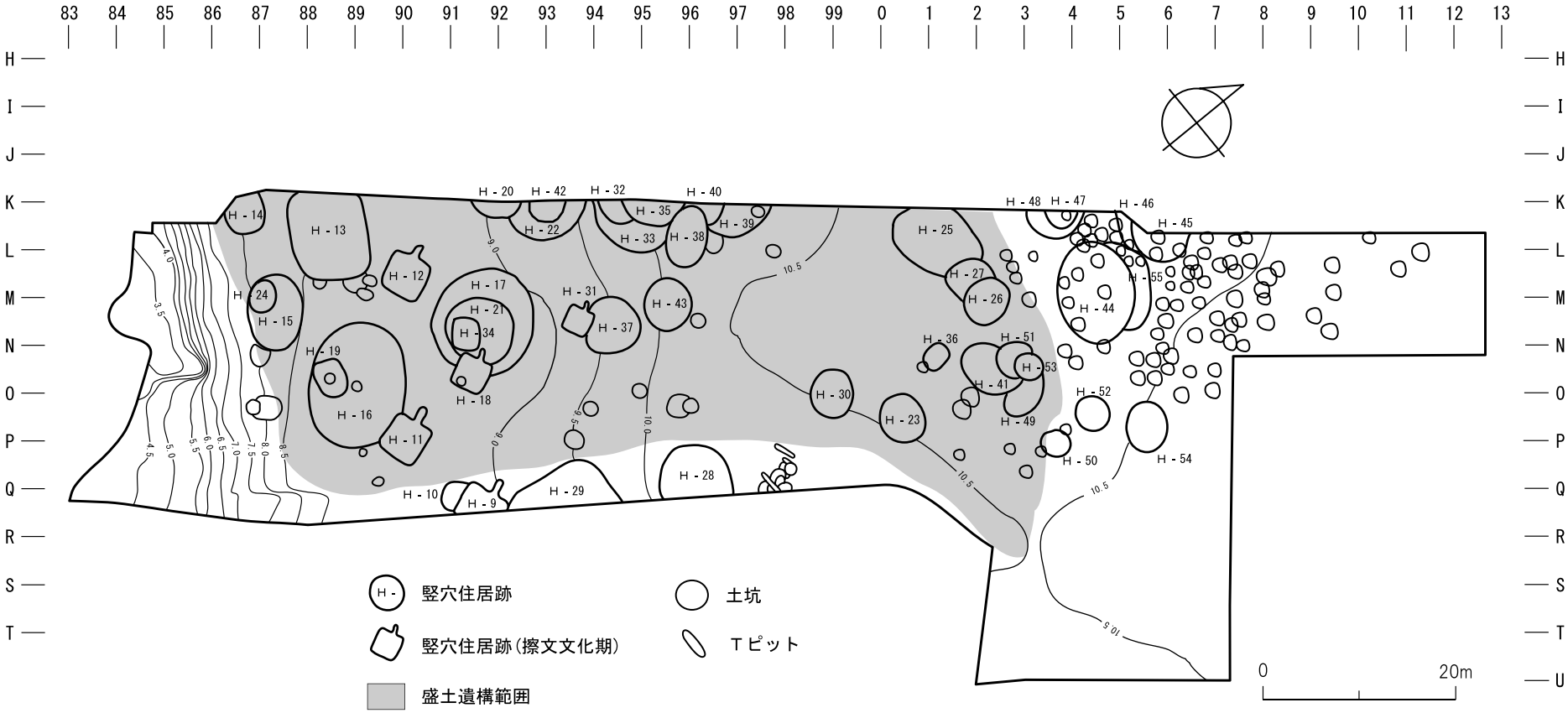
盛土遺構は、調査範囲の約60％に広がっている。町道大平２線側は住居等によって上部が攪乱を受けているが、最も厚さがある所では約0.6mを確認している。盛土の土層断面は、町道側から中央部にかけてほぼ水平な堆積をしており、線路側の盛土遺構端部へ向かって落ち込む土層をしている。盛土遺構中からは多量の土器・石器等の遺物が出土している。土器は、横倒しで潰れた状態のものが多く、なかには入れ子状になって確認されたものもある。また盛土遺構の端部では、正立や倒立した状態で出土したものが確認されている。盛土遺構中からは、廃棄されたと考えられる焼土粒や炭化物の範囲、頁岩の剥片集中が多数確認されている。盛土遺構が形成された時期は、出土する遺物から縄文時代前期後半～中期初頭（円筒土器下層ａ式～円筒土器上層ａ式）であり、円筒土器下層ｃ・ｄ式期のものが最も多く出土している。

今年度調査で出土した遺物は、36ⅡＢコンテナで約700箱である。昨年度出土分1,008箱と合わせると、２か年で出土した遺物は約1,700箱になる。

土器は、縄文時代早期（物見台式・中茶路（なかちゃろ）式・東釧路Ⅳ式）、前期（石川野（いしかわの）式・円筒土器下層ａ～ｄ式）、中期（円筒土器上層ａ式）、後期（余市式・トリサキ式・大津式）、晩期（大洞Ａ式併行）、擦文土器が出土している。前期後半の円筒土器下層ｃ・ｄ式ものが最も多い。擦文土器は８世紀後半と９世紀後半～10世紀初頭の坏（つき）や甕（かめ）が出土している。縄文時代晩期後葉の遺物は、大洞Ａ式併行の浅鉢や深鉢・壺が出土している。縄文時代前期後半～中期前葉の遺物は、盛土遺構を中心として調査範囲の全体から出土している。

石器等は、剥片石器が石鏃・石錐・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー・両面調整石器など、礫石器では石斧・石のみ・たたき石・すり石（北海道式石冠が多い）・石鋸（いしのこ）・扁平打製石器などが出土している。剥片石器では頁岩製がほとんどを占め、黒曜石を利用したものはわずかである。

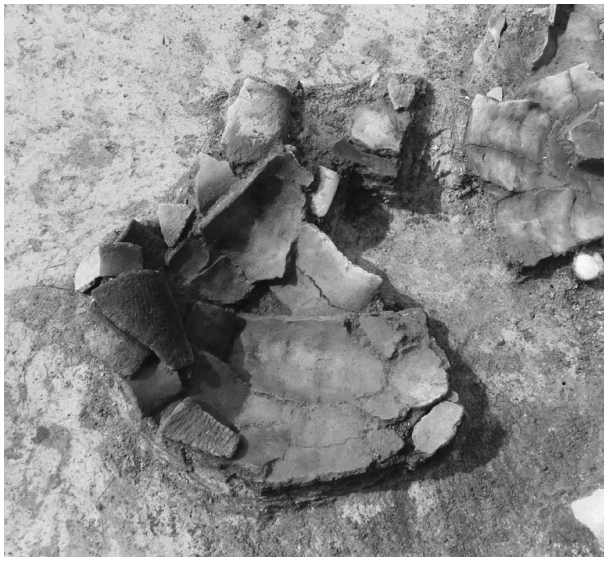
土・石製品では、再生土製円盤、土製耳栓、玦状耳飾り、垂飾、玉類、黒曜石製の異形石器、頁岩製の異形石器、異形デザインの尖頭器（せんとうき）、線刻礫、軽石製品、有孔石（ゆうこういし）などが出土している。玦状耳飾りは平面形が三角形のもので、破片が17点出土している。石材は滑石（かっせき）製15点、蛇紋岩製２点である。垂飾では滑石製の棒状垂飾が３点出土している。線刻礫では小判形の礫に線刻によって模様をつけたものや長軸に深い線刻があるものが出土している。軽石製品では北海道式石冠を小型化したような形状のものが出土している。このような特徴的な石器類が出土している。


83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
H I J K L M N O P Q R S T
H - 竪穴住居跡
竪穴住居跡（擦文文化期）
盛土遺構範囲
土坑
Ｔピット
0 20m

大平遺跡遺構位置図

H-23　調査状況

H-30　覆土１・２層遺物出土状況



H-43　覆土遺物出土状況（Ｐｏ-14）

H-43　覆土遺物出土状況（Ｐｏ-15・16）

P-78　フラスコ状土坑土層断面

N95区盛土土器出土状況（Ｐｏ-９）

P-60　フラスコ状土坑坑底面遺物出土状況

N95区盛土土器出土状況（Ｐｏ-14）

木古内町（きこない）　蛇内（へびない）２遺跡（Ｂ-05-19）

事 業 名：北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：上磯郡木古内町字札苅518-3

調査面積：77㎡

調査期間：平成23年８月22日～８月30日

調 査 員：熊谷仁志、佐藤和雄

調査の概要

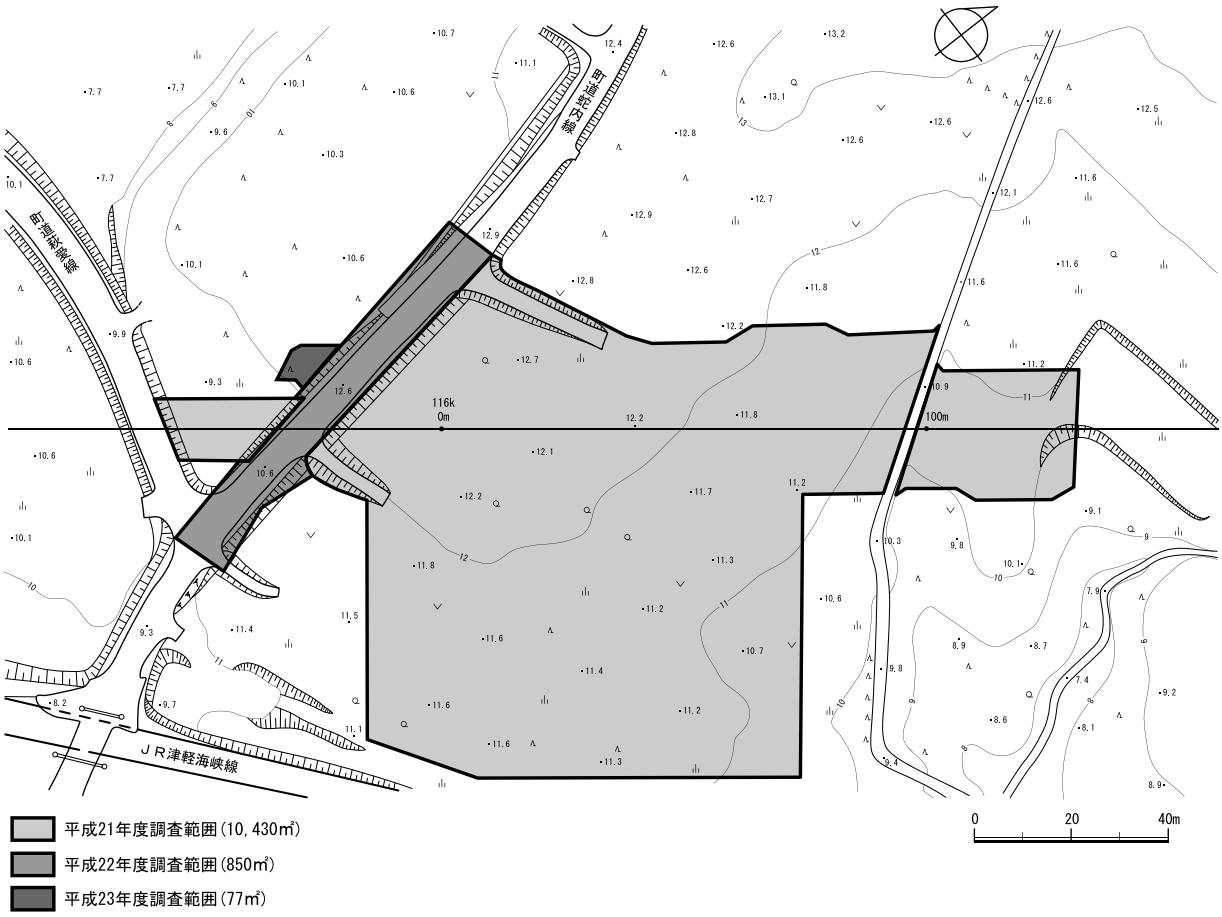
遺跡は、ＪＲ木古内駅から北東へ約2.8㎞に位置する。蛇内川左岸の標高約８～10ｍの海岸段丘上に立地する。基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土である。Ⅱ層が主な遺物包含層である。

調査は、平成21・22年度に11,280㎡を実施している。主に縄文時代前期の竪穴住居跡や土坑などを検出し、これらに伴う土器・石器等が出土した。今年度は昨年度調査範囲に隣接する、工事用道路の迂回路部分を調査した。

遺構と遺物

遺構は、平成22年度に検出された竪穴住居跡（H-11）の未調査部分の調査を行った。新たに柱穴を確認している。

遺物は、土器116点、石器59点が出土した。土器は、昨年度と同じく円筒土器下層式がもっとも多い。



蛇内２遺跡調査範囲

蛇内２遺跡抜根後全景

住居跡（H−11）確認状況

H−11完掘

木古内町　木古内遺跡（Ｂ-05-3）

事 業 名：北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：上磯郡木古内町字木古内56-19ほか

調査面積：4,304㎡

調査期間：平成23年５月９日～７月15日

調 査 員：村田　大、新家水奈、愛場和人、広田良成、大泰司統

調査の概要

遺跡はＪＲ木古内駅から北東へ約１㎞の海岸段丘上に位置する。今年度調査区の標高は約８～12ｍで、北から南へ緩やかに傾斜する地形となる。昨年度調査区の南西側では沢に挟まれた舌状台地地形が確認されている。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土層で、Ⅱ層が主な遺物包含層である。遺構覆土中には白頭山－苫小牧降下火山灰（Ｂ-Ｔｍ）や焼土様の赤色土壌がレンズ状に堆積する部分がある。遺跡の現況は宅地で、調査区は広く削平・攪乱を受けていた。

今年度は平成22年度に続く２次調査となり、平成22年度は縄文時代早期・前期・後期および擦文文化期の竪穴住居跡26軒、土坑135基、Ｔピット9基、焼土４か所、フレイク集中４か所、集石２か所を検出した。

遺構と遺物

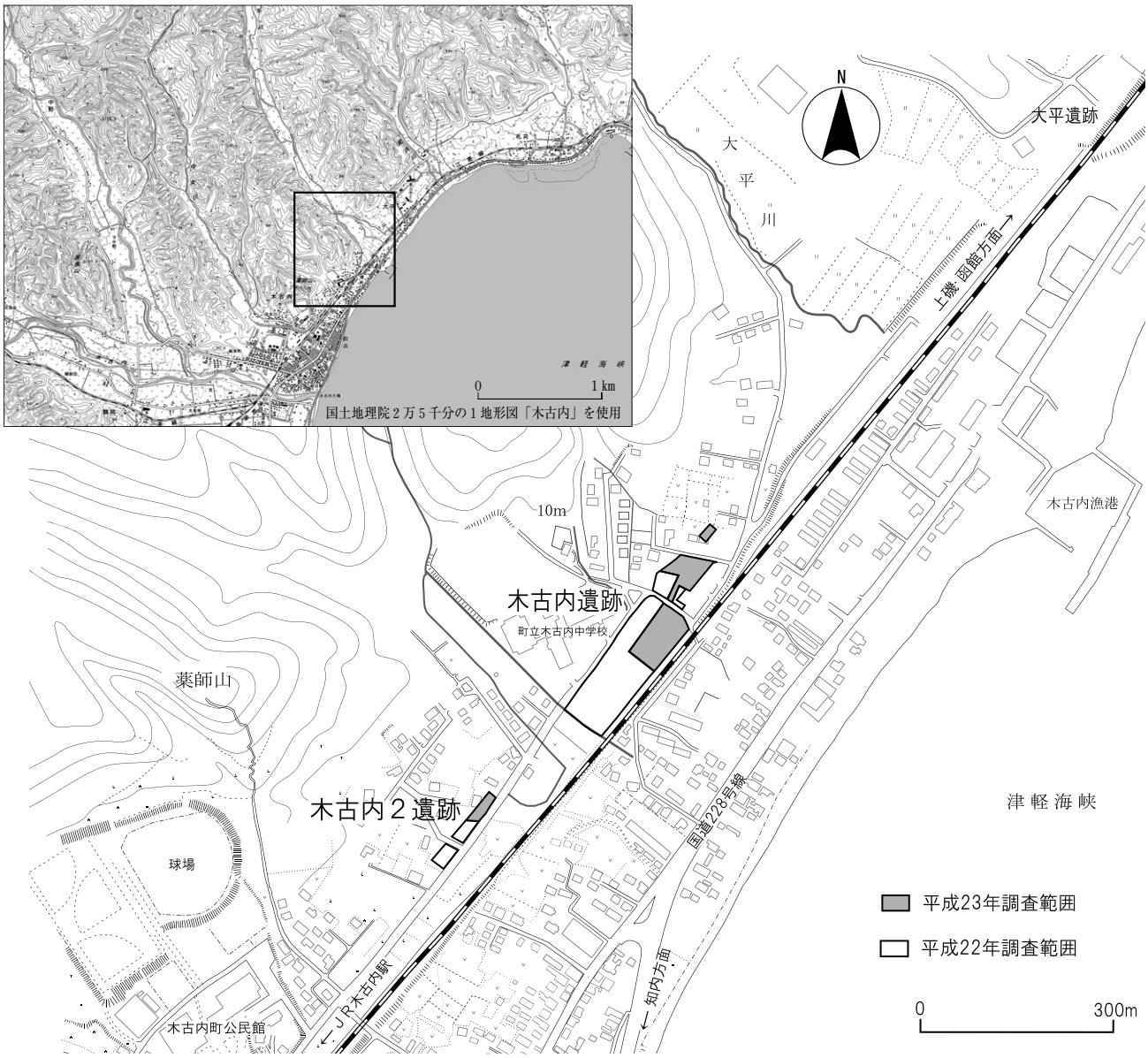
検出した遺構は、竪穴住居跡6軒（内継続１軒）、土坑17基、溝状遺構１か所、焼土１か所である。

竪穴住居跡はすべて縄文時代前期後半のもので、前回の調査で同期の竪穴住居跡がまとまってみられた区域の周縁にあたる部分で検出した。竪穴住居跡は攪乱を受け、全体を把握できないものが多いが、ベンチ構造を有するもの（H-25）や炭化材が比較的良好に残存する焼失住居（H-29）がある。

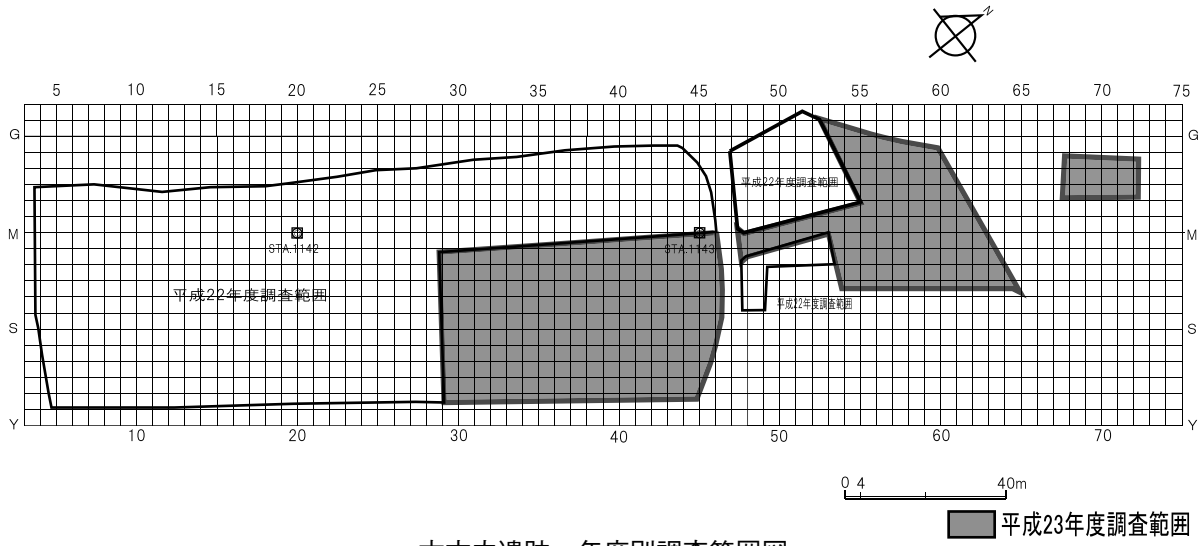
土坑は平面形が直径50㎝～１ｍ程の円形で、断面形は皿状もしくはフラスコ状となるものが多い。時期は覆土中の遺物から縄文時代早期・前期の可能性がある。

溝状遺構は幅約30㎝、深さ約30～35㎝の掘り込みが、段丘縁に沿って約27ｍ続くものである。溝の底面で掘削時の鋤先痕が明瞭に確認され、南西端６ｍ程の範囲では、底面に柱穴列が検出された。柱穴列は掘り方を持つ10～40㎝程の柱穴跡が1.3～1.7ｍの間隔で４か所みられ、その間に深さ５㎝程の浅い柱穴跡が連続する。時期は溝の覆土上部全面にＢ-Ｔｍ火山灰が堆積しているため、擦文文化期と考えられる。形状から同期に東北地方でみられる、集落を区画する板塀跡の可能性がある。

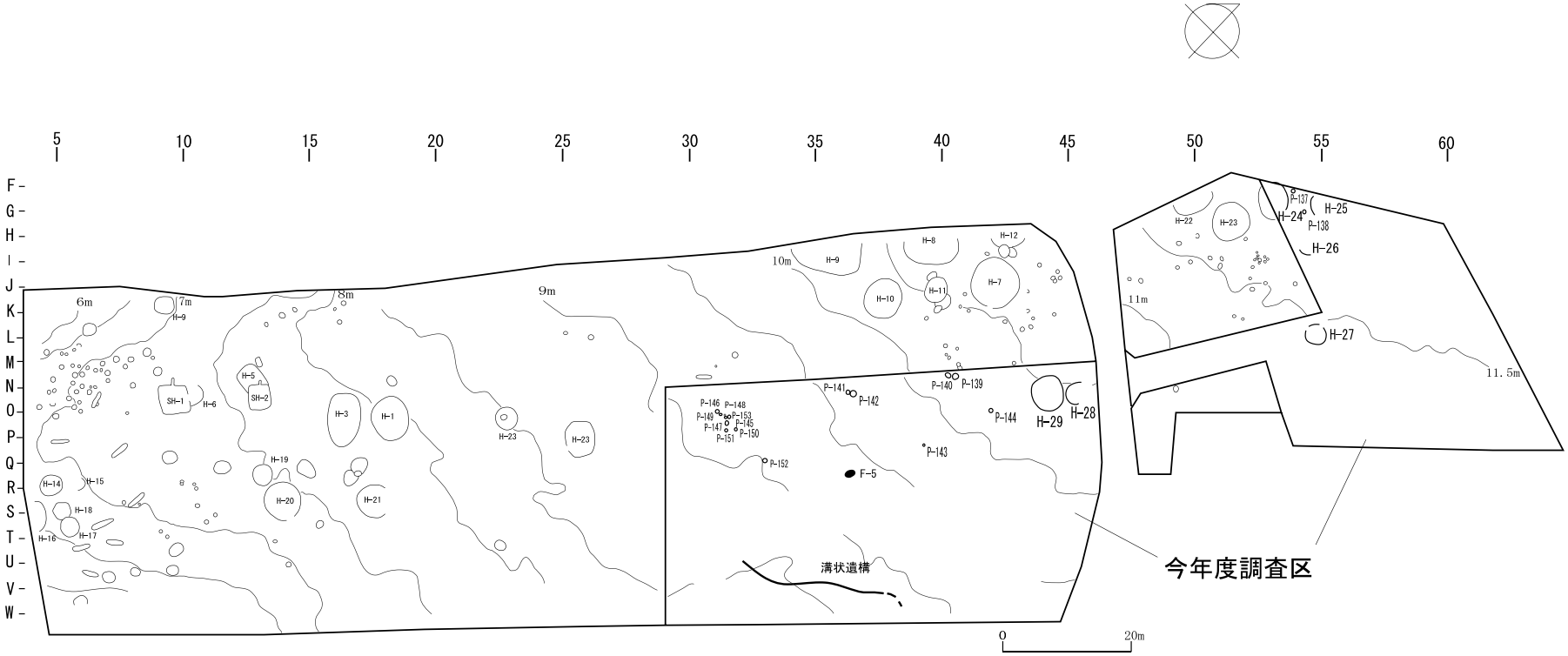
遺物は、土器が約8,000点、石器等が約14,000点出土した。土器は縄文時代早期後半の土器・前期後半の円筒土器下層式が多い。石器はつまみ付きナイフ、スクレイパー、扁平打製石器が比較的多いほか、頁岩製の石核やフレイク、礫なども多くみられる。



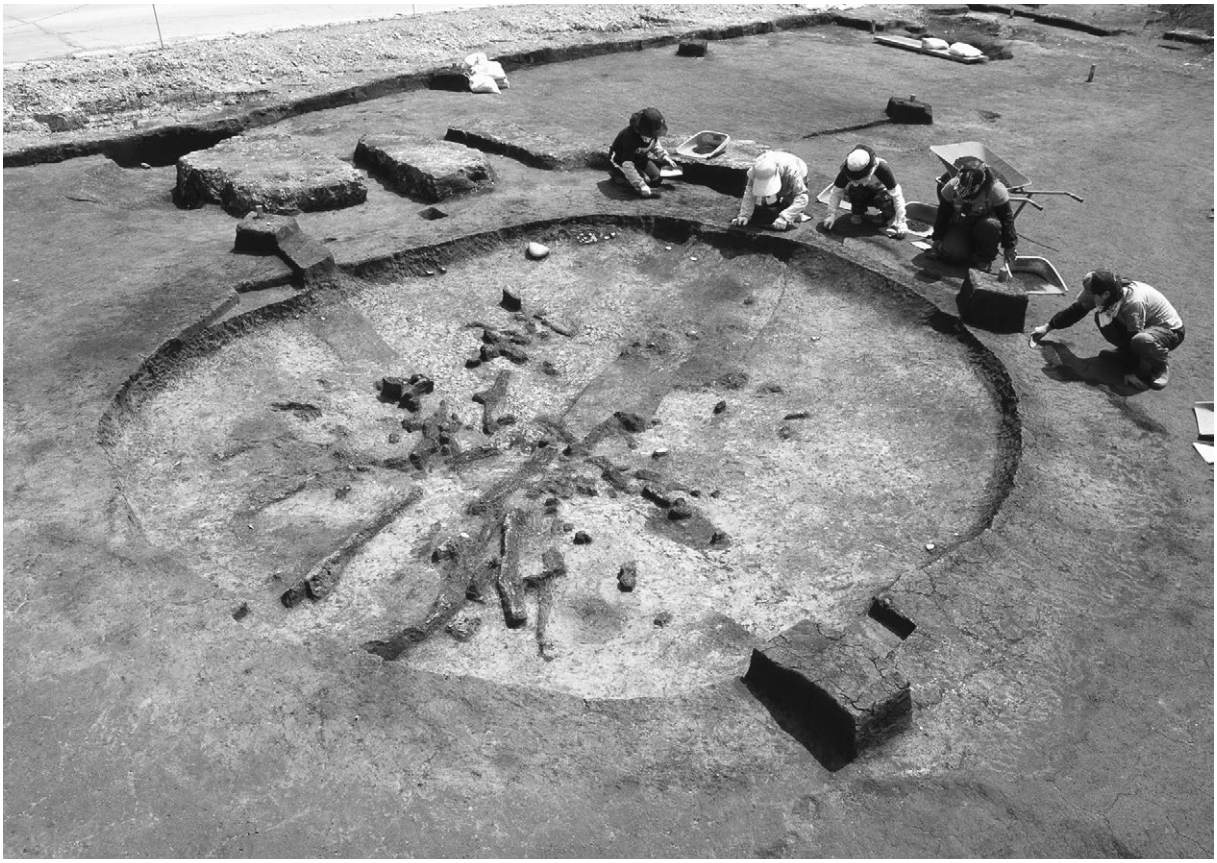
遺跡の位置



木古内遺跡　年度別調査範囲図


5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
60
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
6m
7m
8m
9m
10m
11m
11.5m
H-9
SH-1
H-6
H-5
SH-2
H-3
H-1
H-23
H-19
H-20
H-21
H-14
H-15
H-18
H-16
H-17
H-8
H-12
H-10
H-11
H-7
H-22
H-24
H-25
H-26
H-27
H-28
H-29
P-137
P-138
P-139
P-140
P-141
P-142
P-143
P-144
P-146
P-148
P-149
P-153
P-147
P-145
P-150
P-151
P-152
F-5
溝状遺構
今年度調査区
0
20m

遺構位置図



縄文時代前期の竪穴住居跡（H−29）

溝状遺構

木古内町　木古内２遺跡（Ｂ−05−28）

事 業 名：北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：上磯郡木古内町字本町435−14

調査面積：330㎡

調査期間：平成23年５月９日～７月20日

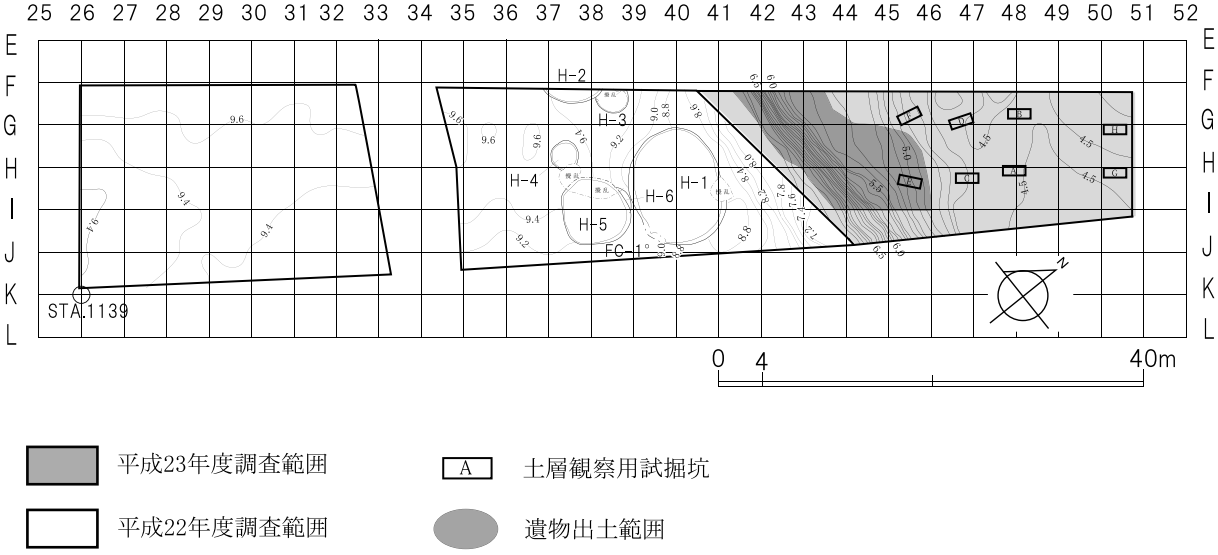
調 査 員：新家水奈、広田良成

調査の概要

木古内２遺跡の調査は昨年に引き続き２年目となる。今年度の調査区は、木古内遺跡から南西約150ｍの昨年度調査区北東側の低地部分（標高３～７ｍ）330㎡である。遺物が出土するもっとも低い面は、現地表面から３ｍ以上深く、調査前に矢板の打設、土留め用鉄骨材設置等の準備工を行ってから、ベルトコンベアを搬入して調査した。低地部の土層は、部分的に駒ヶ岳ｄ降下火山灰（Ｋｏ−ｄ：1640年降下）や白頭山－苫小牧降下火山灰（Ｂ−Ｔｍ：10世紀前半降下）が確認され、その下にはピートモス状の繊維質を多量に含んだ泥炭層が１ｍ以上堆積しており、遺物は泥炭層下の黒色および灰色粘土層から出土している。

遺構と遺物

昨年度は台地（標高約10ｍ）上から縄文時代前期後半の竪穴住居跡６軒、フレイク集中１か所を検出した。今年度、この台地の段丘崖から低地部を調査した結果、斜面上および斜面下から縄文時代前期の土器片が7,887点、石器類が2,146点、計10,033点の遺物が出土した。遺物は段丘崖直下の、層厚１ｍ以上の泥炭層下の遺物包含層から集中して出土し、遺構は確認されなかった。遺物包含層の堆積状況に人為的な様相は見られず、自然堆積により形成されたものと思われる。



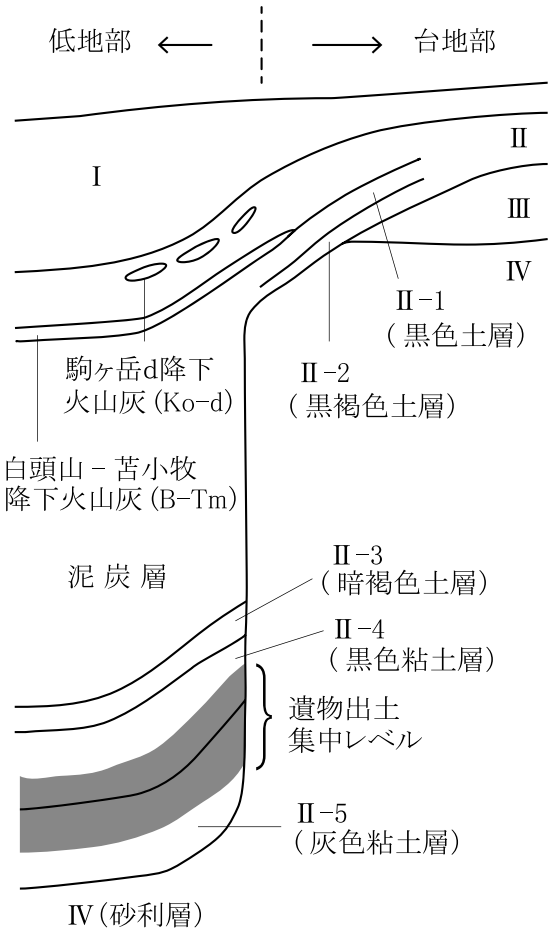
調査区地形図

調査状況

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況



基本土層模式図

福島町（ふくしま）　館崎（たてさき）遺跡（Ｂ−03−2）

事 業 名：北海道新幹線建設事業のうち吉岡信通機器室の増設工事埋蔵文化財調査

委 託 者：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局

所 在 地：松前郡福島町字館崎337−11ほか

調査面積：438㎡（平成21年度839㎡・平成22年度894㎡　３か年合計2,171㎡）

調査期間：平成23年５月９日～平成23年８月31日

調 査 員：遠藤香澄、中山昭大、影浦　覚

調査の概要

遺跡は、北海道最南端白神（しらかみ）岬の北東約６㎞、吉岡川河口右岸の海岸段丘上（標高約24m）にある。海岸線からの直線距離は約250mである。

過去には４次にわたって計2,590㎡の発掘が福島町教育委員会によって行われている。このうち今回の調査区の東に隣接する地点（現信通機器室外周）を対象とした昭和59年の調査では、約200㎡の範囲の４つの文化層から55,000点以上の土器が出土し、「土器塚」と称された。今回の調査で確認した盛土遺構（以下、盛土と略称）とこの土器塚とは南東－北西方向で帯状に２条が並行しており、一連のものである可能性が高い。便宜的に前者を西盛土、後者の「土器塚」を東盛土と呼称する。

北海道新幹線建設事業に関する信通機器室の増設工事に伴い、平成21・22年度に1,733㎡を調査した。今年度は周回道路の敷設工事に関する調査である。調査区は２か年の調査範囲の西側338㎡（Ａ地区）と北側100㎡（Ｂ地区）である。構内道路敷設という工事の性格から、発掘調査は工事により影響を受ける深さまでで止めた。このため盛土堆積が薄いＢ地区は主に遺構検出層までの調査となった。また、Ａ地区は一部遺物包含層を残した状態で養生、埋め戻しをしている。

遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１地形図「渡島吉岡」を使用）

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：盛土層、Ⅲ層：黒色土層、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：黄褐色土層である。調査区内全域で盛土ないし掘削といった人為的な地形改変がなされていた。Ⅱ層の盛土層は、形成された時期によりその色調、堆積物の内容が異なるが、主体は縄文時代前期末～中期初頭(約4,600～4,500年前）の円筒土器文化期の形成であり、大きく３つ（Ａ～Ｃ）に分けられる。

Ａ盛土：色調は暗褐色で遺物量は少ない（m3層)。Ｂ盛土：黒褐色と黄褐色の土層が互層となっている。遺物量が多く、個体の形状を保った土器を多量に包含するほか、礫や炭化物、焼骨が含まれる（m2中～下層)。Ｃ盛土：色調は黄褐色でＢ盛土同様個体の形状を保った土器を中心に多量の遺物を包含する。部分的に炭化物層をはさむ。貝層もあり海獣骨も含まれる(m2上層)。Ａ盛土は、当時の地表面(Ⅲ層上面）に盛土したもので、Ｂ盛土とＣ盛土は遺構のくぼみに埋積している例が顕著である。

また、調査区の一部（円筒土器文化期の道路跡周辺）で縄文時代後期前葉（約3,700年前）の盛土も確認された（Ｄ盛土＝m1層)。

遺構と遺物

新たに確認された遺構は、竪穴住居跡３軒(ＴＨ60・61・65)、大型廃棄土坑３基(ＴＨ57・58・63)、土坑５基、集石４か所、焼土26か所、フレイク集中８か所である。大型廃棄土坑は便宜的に竪穴住居跡と同じＴＨの略称を冠して調査を行った。平面形を確認したのみの遺構については、仮番号を付して範囲図を実測するにとどめた。先に挙げた遺構数は、トレンチ調査で明らかに遺構と判断したものである。

Ａ地区は西盛土の主体部から沢地形に向けての傾斜部である。大型廃棄土坑３基、土坑３基、集石３か所、焼土15か所、フレイク集中８か所を確認した。このほか平成21年度に一部調査したＴＨ54とＴＰ15の残りを調査した。ＴＨ51、56の続きは確認されなかった。大型廃棄土坑の掘削にともない、失われた可能性がある。大型廃棄土坑（ＴＨ57・58・63）は盛土の傾斜部から確認された。床面、壁面はやわらかく不規則である。いずれも三角堆積があり、その上に黒色土と共に土器を主体とした大量の遺物が遺棄され、その上部は黒褐色土と黄褐色土の互層で人為的に埋められていた。調査区外に広がるが、一部は沢の営力で消失していた。こうしたことから、これら大型廃棄土坑は沢地形のくぼみを利用して掘った竪穴である可能性も考えられる。黒色廃棄層の土器はいずれも円筒土器下層ｄ式であった。

Ｂ地区は主に遺構検出面までの調査となった。遺構は竪穴住居跡３軒、土坑２基、集石１か所、焼土11か所である。ほかに住居の可能性があるもの11軒、土坑の可能性があるもの17基の平面形を確認している。縄文時代中期の道路跡の続きや配石列３の続きもあり、過去２年の調査結果から予想されるとおりの遺構密度であったといえる。調査した竪穴住居跡のうち２軒（ＴＨ61・65）についてはＤ盛土中に構築した縄文時代後期前半のものである。掘り込みは浅く不明瞭だが炉を持ち、十腰内系の赤彩壺形土器が出土している。

Ｂ地区東側の調査区外において、法面工事によって東盛土の一部が消失していた。２か所の法面に東盛土の断面が現れていたことから、この部分の写真撮影と図化を行った。東盛土の地山面と西盛土の地山面を比較した結果、東側が少なくとも1.5m高いことが判明した。元地形は調査区東側から西側の沢地形に向けて緩やかに傾斜していたことになる。そして、東西盛土間の道路跡周辺では黄褐色土層（地山）が、少なくとも１m近く掘削されていたこともわかった。黄褐色土を主体とするＣ盛土の起源は、この中央部の地山掘削にともなうものであろう。

遺物は36ⅡＢコンテナ換算で868箱分が出土した（うち657箱が土器)。これは過去２か年の出土量と比べておよそ1.6倍の出土率である。形状をほぼ保ったまま出土した一括土器も228個体以上を数えた。このような出土状況は大型廃棄土坑の存在をはじめとし、Ａ地区全体が廃棄場的な性格を持っていたためと考えられる。土器は縄文時代前期末の円筒土器下層ｄ式から中期前半の円筒土器上層ａ式・ｂ式が

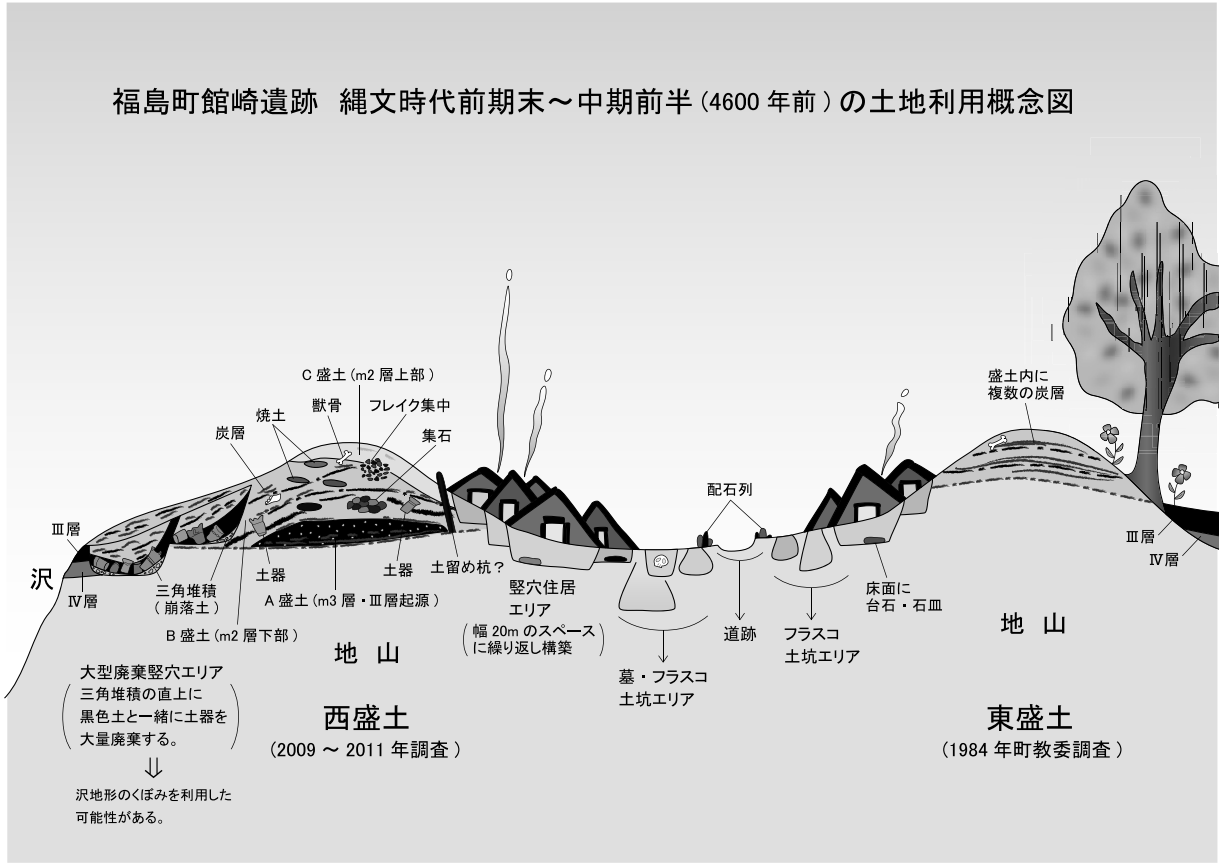
主体である。ほかにＢ地区で縄文時代後期前葉の土器が出土している。

石器は、剥片石器では石鏃が目立ち、礫石器では北海道式石冠、半円状扁平打製石器が多い。剥片石器はほとんどが頁岩製である。なお、石鏃は基部にアスファルトの付着したものが顕著である。

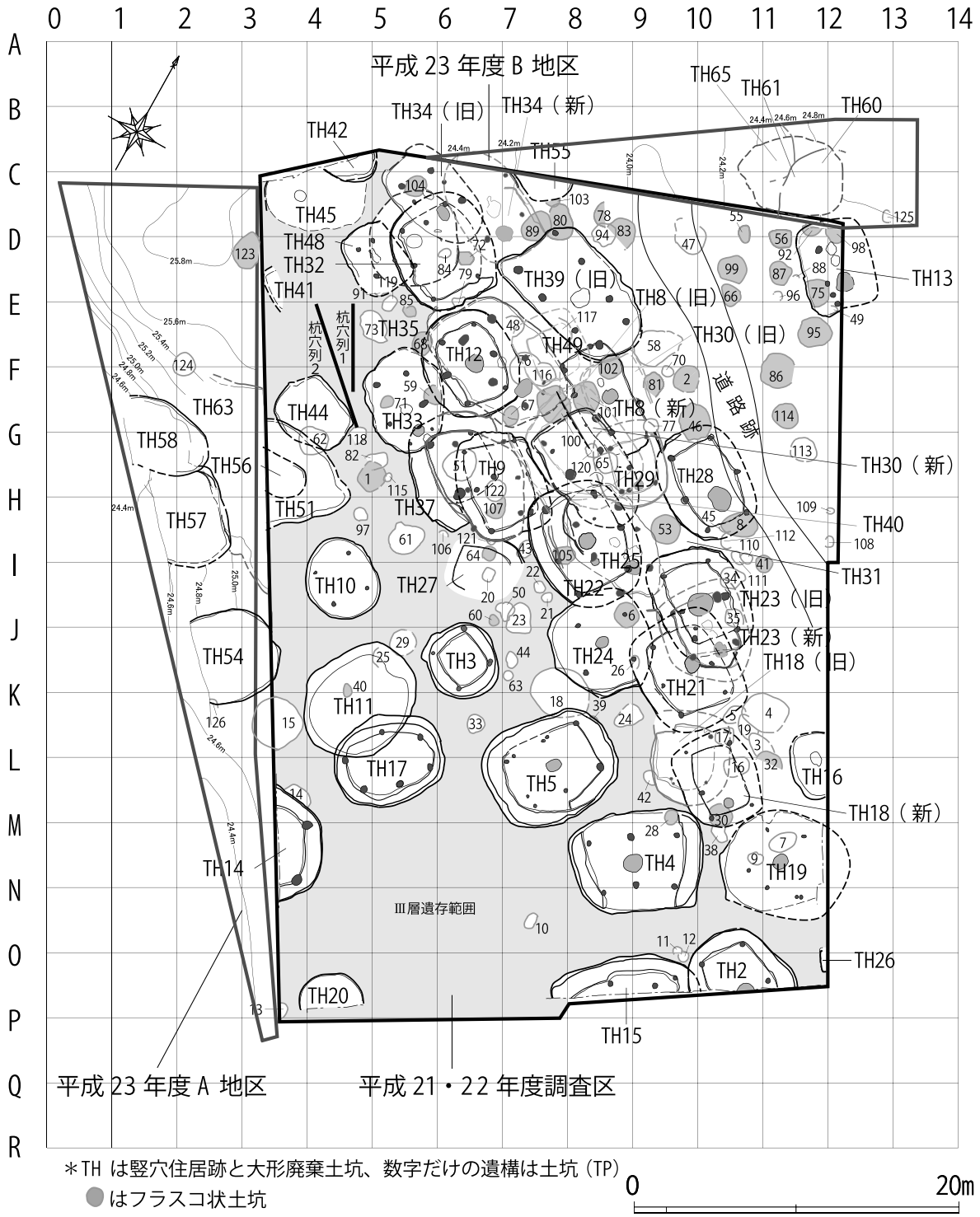
特筆事項としては、ＴＨ54の覆土中から頭部を欠く大型の岩偶（長さ37㎝）が出土した。国内最大級のものである可能性がある。

また、ＴＨ63の廃棄層から頭部と手足を欠く板状土偶、ＴＨ57の廃棄層からは径４㎝のヒスイ製の玉が、さらに滑石製の玦状耳飾は破片を含め15点出土した。このほか黒曜石製異形石器や石棒なども出土している。

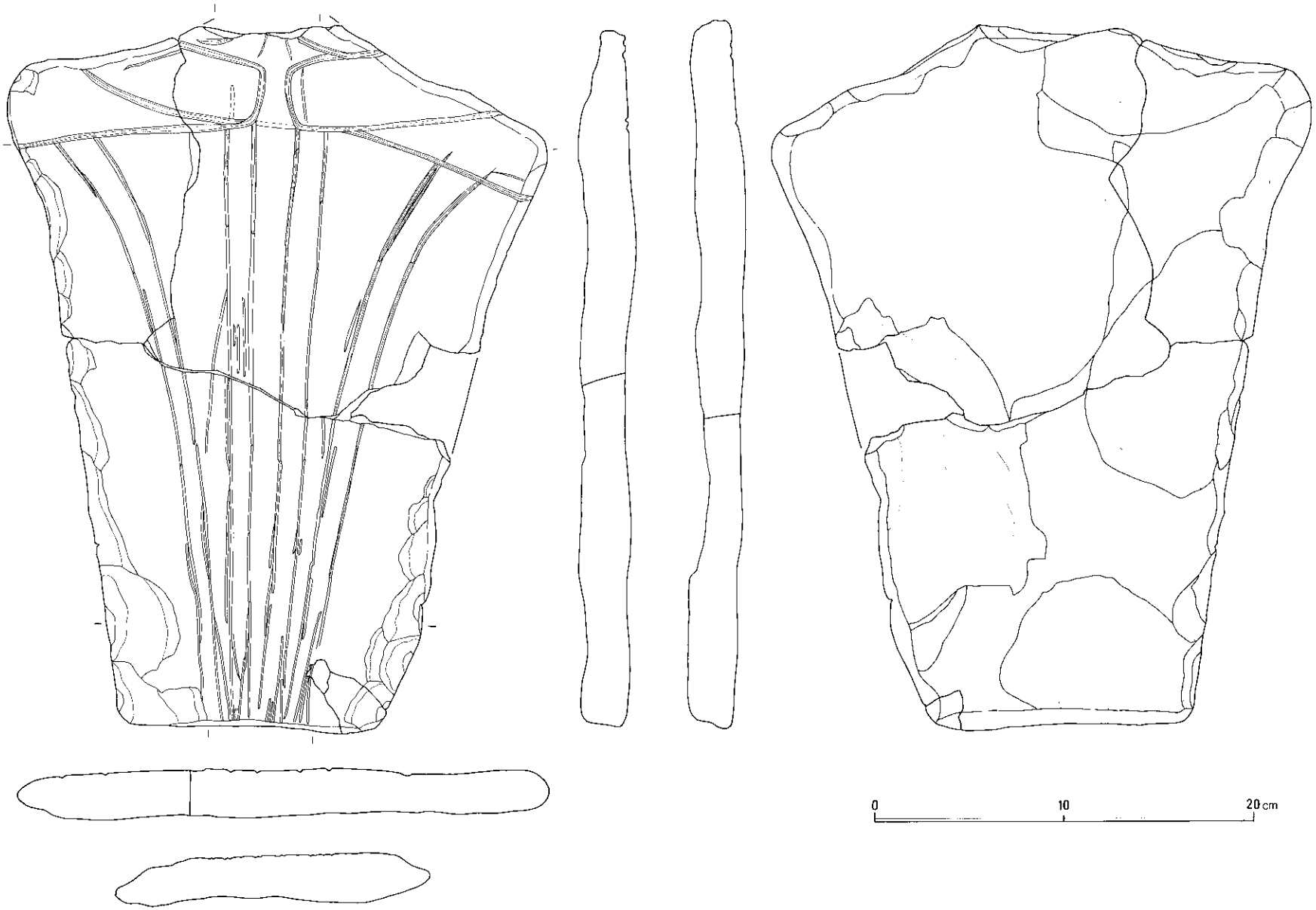
盛土中からは残存状態が良好な動物遺存体が多数出土した。分類整理の詳細はこれからであるが、海獣類を中心とした哺乳類や魚類である。



館崎遺跡土地利用概念図


平成 23 年度 B 地区
平成 23 年度 A 地区
平成 21・22 年度調査区
Ⅲ層遺存範囲
道路跡
杭穴列 1
杭穴列 2
TH34（旧）
TH34（新）
TH65
TH61
TH60
TH42
TH55
TH45
TH48
TH32
TH41
TH39（旧）
TH8（旧）
TH30（旧）
TH13
TH35
TH12
TH49
TH8（新）
TH63
TH44
TH33
TH58
TH56
TH9
TH29
TH28
TH30（新）
TH51
TH37
TH57
TH40
TH31
TH10
TH27
TH25
TH22
TH23（旧）
TH23（新）
TH18（旧）
TH54
TH3
TH24
TH21
TH11
TH17
TH5
TH16
TH18（新）
TH14
TH4
TH19
TH26
TH2
TH20
TH15
＊TH は竪穴住居跡と大形廃棄土坑、数字だけの遺構は土坑（TP）
はフラスコ状土坑
0
20m

遺構位置図



岩偶実測図

A地区盛土調査状況

A地区終了面

土偶出土状況

B地区終了面

富良野市　中五区１遺跡（Ｆ-04-24）・中五区２遺跡（Ｆ-04-25）・中五区３遺跡（Ｆ-04-141）

事 業 名：旭川十勝道路富良野道路建設工事埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局旭川開発建設部

遺 跡 名	所 在 地	調査面積	調査期間
中五区１遺跡	富良野市2880-1ほか	97㎡	平成23年８月１日～８月31日
中五区２遺跡	富良野市7411ほか	64㎡	平成23年８月１日～８月31日
中五区３遺跡	富良野市7439ほか	180㎡	平成23年８月１日～８月31日

調 査 員：笠原　興、谷島由貴

調査の概要

今年度調査した３か所の遺跡は、いずれも富良野市を北から南に貫流する空知川左岸に位置する。ＪＲ富良野駅の約３㎞南側の「天満宮」境内に中五区１遺跡、そこから約１㎞南の低位段丘面上に中五区２遺跡、さらに約0.7㎞南の低位段丘面上に中五区３遺跡がある。３遺跡とも出土遺物のほとんどが縄文時代晩期の遺物である。

中五区１遺跡　昨年度に条件不調から未着手となった97㎡が調査対象である。「天満宮」境内と市道との比高差５ｍの段丘崖付近にあり、奥の社との間にさらに上位の段丘がある。

基本層序はⅠ層（表土）：礫混じりの黒色土、Ⅱ層（包含層）：拳～人頭大の礫の間に黒色土が混じる、Ⅲ層（最終面）：暗褐色の礫層（拳～人頭大の礫）からなる。

中五区２遺跡　昨年度送電線鉄塔があったため未着手であった鉄塔基礎部分の64㎡が調査対象である。標高180ｍ、空知川から200ｍの地点にあり、周囲で盛土工事が行われている中での調査であった。遺構は検出されなかったが、昨年度焼土が検出された層の上部で一括土器を検出した。

基本層序はⅠ層（耕作土・客土）：黒色粘質土、Ⅱ層：褐色粘質土、Ⅲ層（包含層）：粘土質黒色土、Ⅲb層：暗褐色の砂礫層、Ⅳ層：礫層からなる。河川堆積でありⅡ層とⅢ層は列状に平面的な広がりをみせる。そのため、表土を除去した下にⅢ層またはⅢb層がある。

中五区３遺跡　送電線鉄塔と防火用水路があり、未調査だった鉄塔基礎部分42㎡と水路部分138㎡の合わせて180㎡の調査を行った。防火用水路部分では下位の黒色土層62㎡についても調査を行っている。

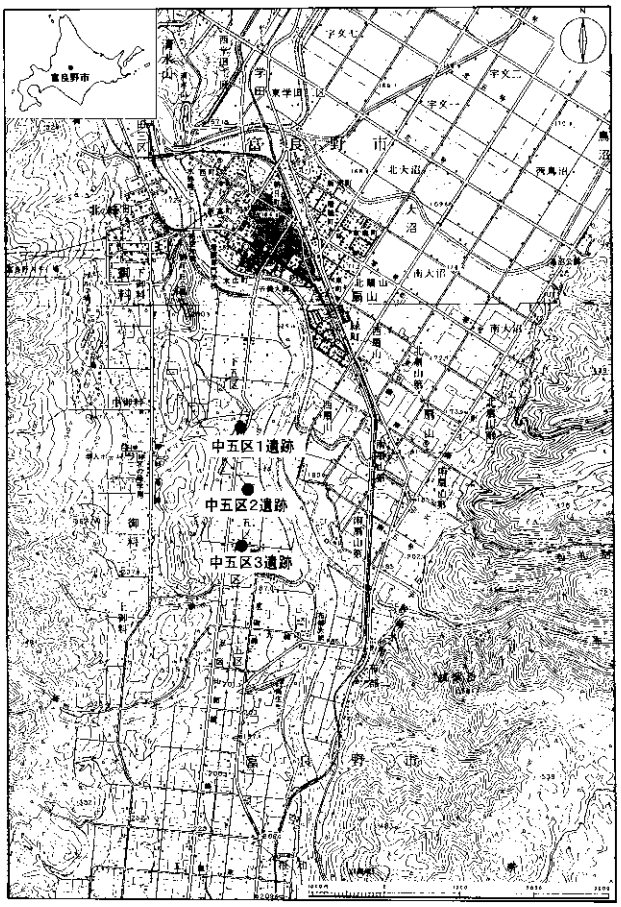
基本層序はⅠ層（耕作土）：黒色土、Ⅱ層（包含層）：黒色の粘質土、Ⅲ層：明褐色～褐色の粘土層、Ⅳ層：明褐色～褐色の粘土層、Ⅴ層（包含層）：黒色の粘質土、Ⅵ層：明褐色～褐色の粘土層、Ⅶ層（無遺物層）：黒色の粘土からなる。

遺構と遺物

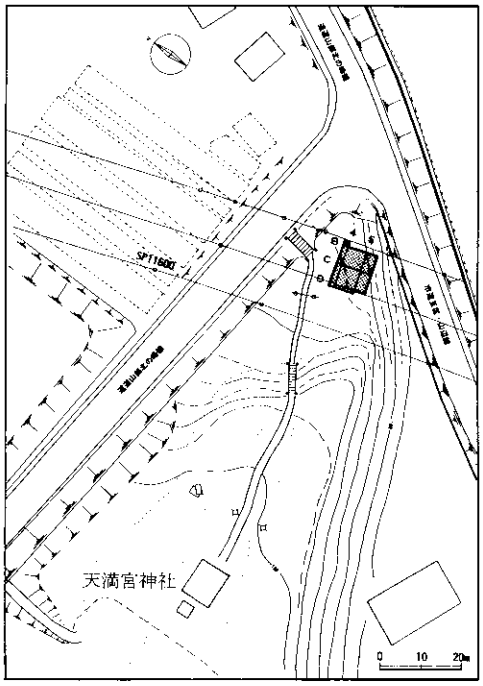
中五区１遺跡　縄文時代後期末～晩期初頭の土坑が１基、調査区南側の壁から検出された。出土遺物は土器約1,100点、石器約4,000点である。土器の大半は縄文時代晩期のもので、中期・後期末～晩期初頭のものが少量出土している。石器は他の２遺跡に比べ、つまみ付きナイフがやや多く出土したほか、他の２か所の遺跡同様に石鏃が多く出土している。

中五区２遺跡　遺構は検出されていない。出土遺物点数は約1,350点で、土器約1,150点、石器約200点である。土器は大半が縄文時代晩期前葉～中葉のもので、後期末～晩期初頭のものも少量出土している。

中五区３遺跡　防火用水路部分で土坑２基が検出された。これらは昨年度検出された土坑と同様の径50㎝程度の小さな土坑である。出土遺物は土器約300点、石器約700点である。土器の大半は縄文時代晩期のもので、特に中葉のものが多いと考えられる。

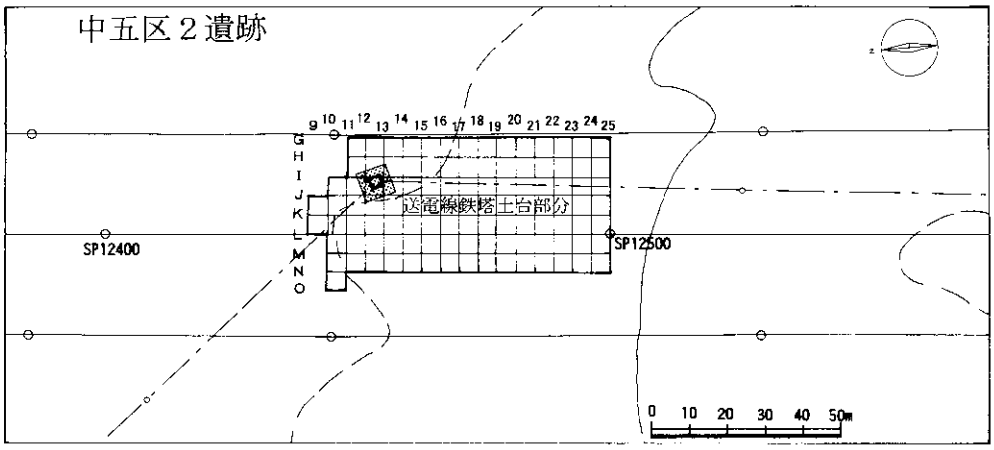


中五区１遺跡

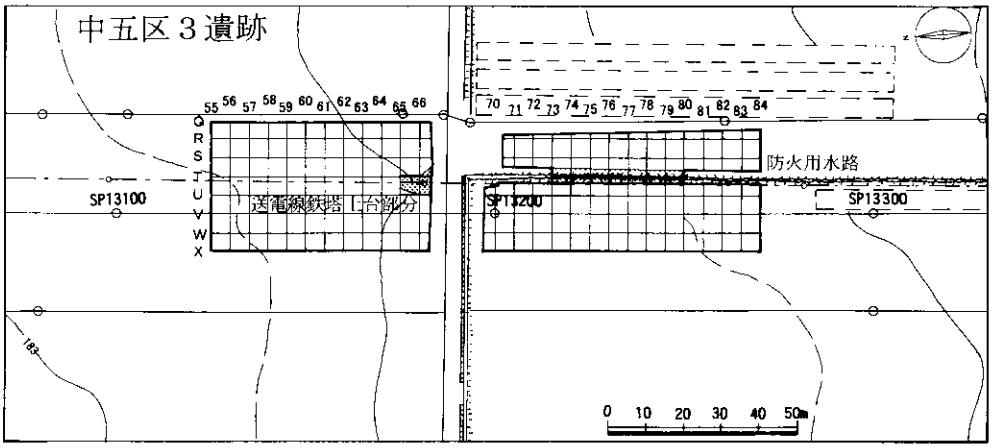


（国土地理院５万分の１地形図「富良野」「山部」を使用）

中五区２遺跡



中五区３遺跡



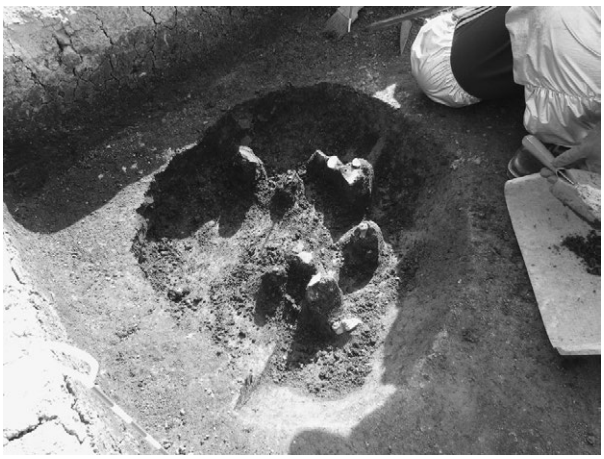
遺跡の位置と調査範囲

中五区１遺跡　調査風景

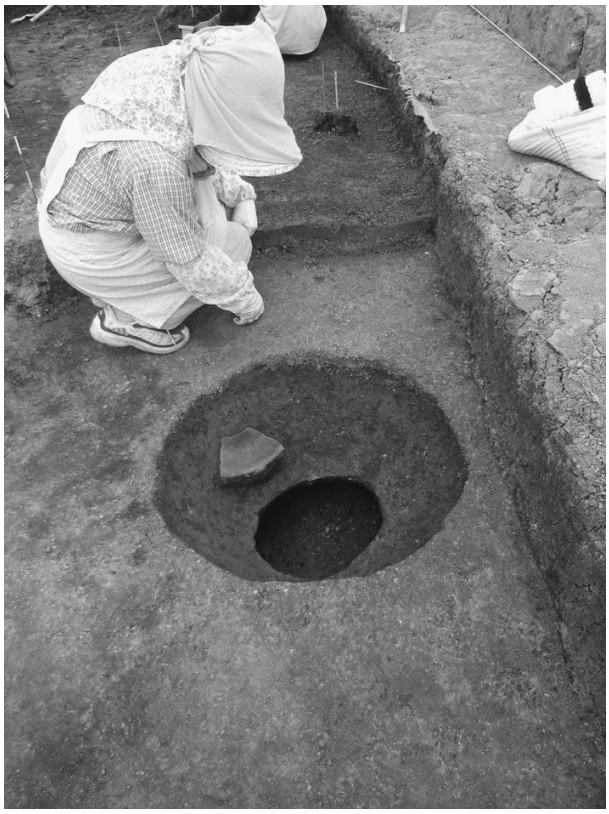
中五区１遺跡　Ｐ－１土層断面

中五区２遺跡　調査風景

中五区３遺跡　調査風景



中五区３遺跡　Ｐ−17



中五区３遺跡　Ｐ−16

下川町　北町Ｊ遺跡（Ｆ-21-69）

事 業 名：天塩川サンルダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局旭川開発建設部

所 在 地：上川郡下川町字北町1129ほか

調査面積：2,750㎡

調査期間：平成23年９月１日～10月26日

調 査 員：笠原　興、直江康雄

調査の概要

北町Ｊ遺跡は下川町の市街地から北北東へ約５㎞、サンル川と無名沢が合流する丘陵斜面の縁辺部に立地する。標高は約160ｍで、サンル川との比高は約10ｍである。

サンル川に注ぐ遺跡周辺の沢では珪化岩が採取可能で、背後の丘陵の珊瑠から一の橋付近にかけて珪化岩の岩帯が含まれている事が知られている。そのような石材環境を反映し、本遺跡も含め下川町内の遺跡からは、珪化岩製の石器が多く出土している。

基本土層はⅠ層表土：腐植土＋笹根、Ⅱ層：暗褐色～褐灰色植壌土、Ⅲ層：明褐色～橙色植壌土（漸移層）、Ⅳ層：橙色土砂礫混じり粘質土である。遺物包含層はⅡ～Ⅲ層である。

一昨年から引き続く調査で、今年度は遺跡のある台地の先端側にあたる北側2,750㎡について調査を行った。遺跡全体の出土遺物の濃淡は、一昨年度のトレンチ調査によって細かく確認されているため、その結果に基づき今年度は、主に調査区の南側を人力による調査、北側では重機を併用した確認調査を実施した。

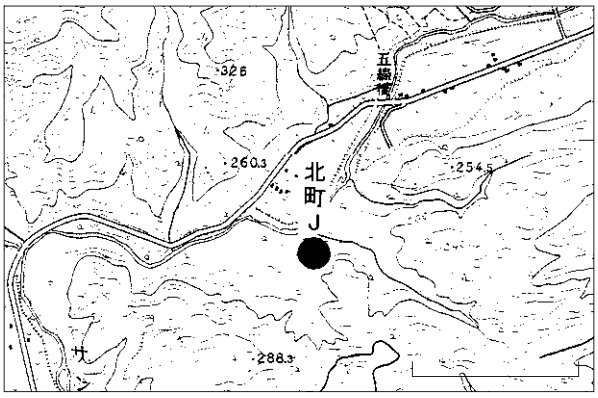
遺構と遺物

遺構は、剥片集中が５か所確認された。いずれもⅡ層から出土したもので、縄文時代に帰属すると考えられる。

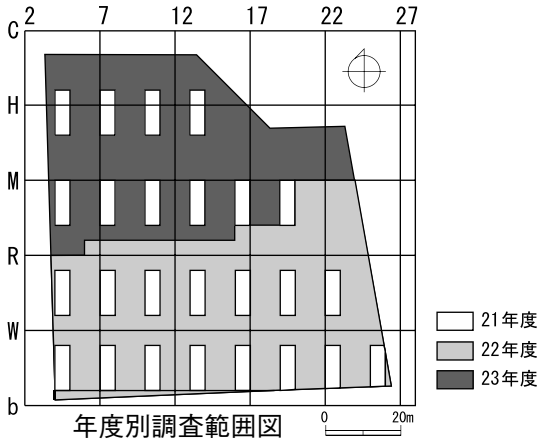
遺物は、石器等が2,511点、土器片27点出土した。土器片はいずれもＬ17区からまとまって出土しており、同一の試料と考えられる。胎土には砂粒が多く入り、一部に角形の口唇部が見られる。しかし、いずれも小破片で風化が著しく摩滅しているため、表面の文様を細かく認識できる状況ではない。平成21年度にM10区からⅢ群a類と考えられる矢羽状の押型文や半截竹管による押型文ないし押引文の土器片が出土している。一昨年の土器と今年度出土した土器を比較すると、器壁の厚みや胎土の状況が類似しており、今年度出土した土器片も一昨年の土器と同様の時期の可能性がある。

石器の器種ではフレイクが最も多く2,348点出土し、次いで石核（57点）、縦長剥片（46点）、Ｒフレイク（18点）、台石（13点）と続く。その他に石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石鏃、エンドスクレイパー、両面調整石器、石斧、石製品が出土しているが、いずれも５点以下と少量である。上位の出土遺物の比率は昨年の出土状況とほぼ同様である。

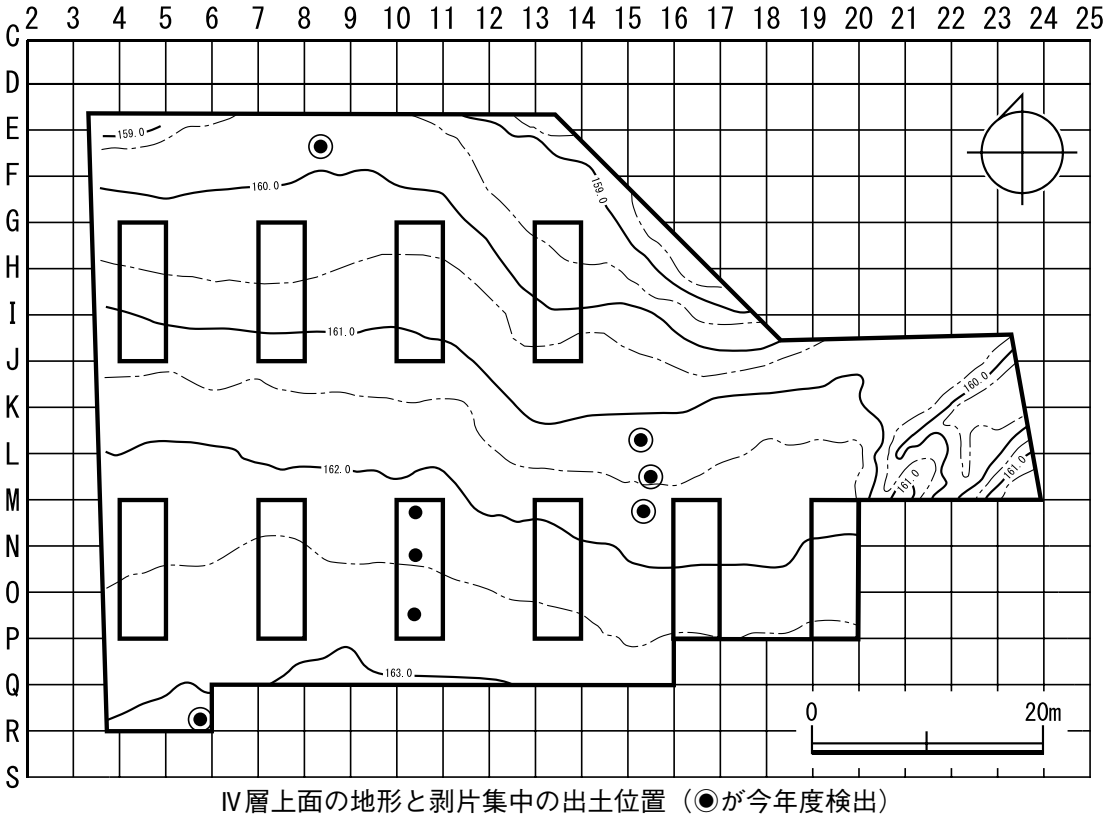
石器類の石材を出土点数で見ると、珪化岩が最も多く全体の77％（1,904点）出土し、次いで黒曜石が19％となっており、この二種類の石材で全体の九割以上を占めている。しかし、重量比で見ると珪化岩の割合は変化しないが、黒曜石は極端に減少する。このことは珪化岩に大型の石器が多く、原産地付近で採取できる石材の利用頻度の高さと形状の大きさを良く示している。対照的に黒曜石は小型のフレイク、チップが多く、素材や製品の持ち込みとその二次加工ないし再加工を主な作業としていたと考えられる。また、原礫面の残る黒曜石の一部には多数の痘痕状の窪みが観察でき、名寄産の黒曜石の特徴と一致している。また、比較的大型の黒曜石製石器の中には白滝産黒曜石によく見られる茶褐色の網目模様が入り込んでいるものもある。



遺跡位置図（国土地理院５万分の１地形図「下川」「サンル」を使用）

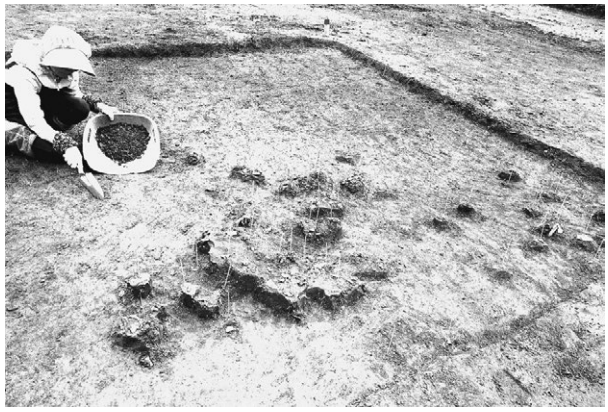


年度別調査範囲図



Ⅳ層上面の地形と剥片集中の出土位置（◉が今年度検出）

調査区全景



M15区剥片集中出土状況

更別村　香川遺跡（Ｌ-10-16）

事 業 名：帯広広尾自動車道中札内大樹道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

委 託 者：国土交通省北海道開発局帯広開発建設部

所 在 地：河西郡更別村字上更別南9線85-5、85-7

調査面積：対象面積2,400㎡ のうち600㎡

調査期間：平成23年９月５日～10月28日

調 査 員：中山昭大、新家水奈

調査の概要

更別村市街地から南東約５㎞の丘陵上に位置する。最も高いところの標高は198ｍで、下からの比高差は５ｍほどになる。17ラインを境に北西側斜面と南東側緩斜面に分かれる。基本土層はⅠ層：表土(耕作土)、層厚20～40㎝。Ⅱ層：黒色土、北側の斜面下に見られる。上面には薄っすらと樽前ｂ火山灰(Ｔａ-ｂ)、下部には、樽前ｃ火山灰（Ｔａ-ｃ）層が確認される。層厚５～20㎝。Ⅲ層：黒褐色～暗褐色土、漸移層、層厚約10㎝。Ⅳ層：黄褐色土、層厚20～40㎝。上部はⅣａ（ソフトローム)、下部をⅣｂ（ボール状ローム）とした。Ⅴ層：支笏第１火山灰（Ｓｐｆａ-1)、層厚10～40㎝である。

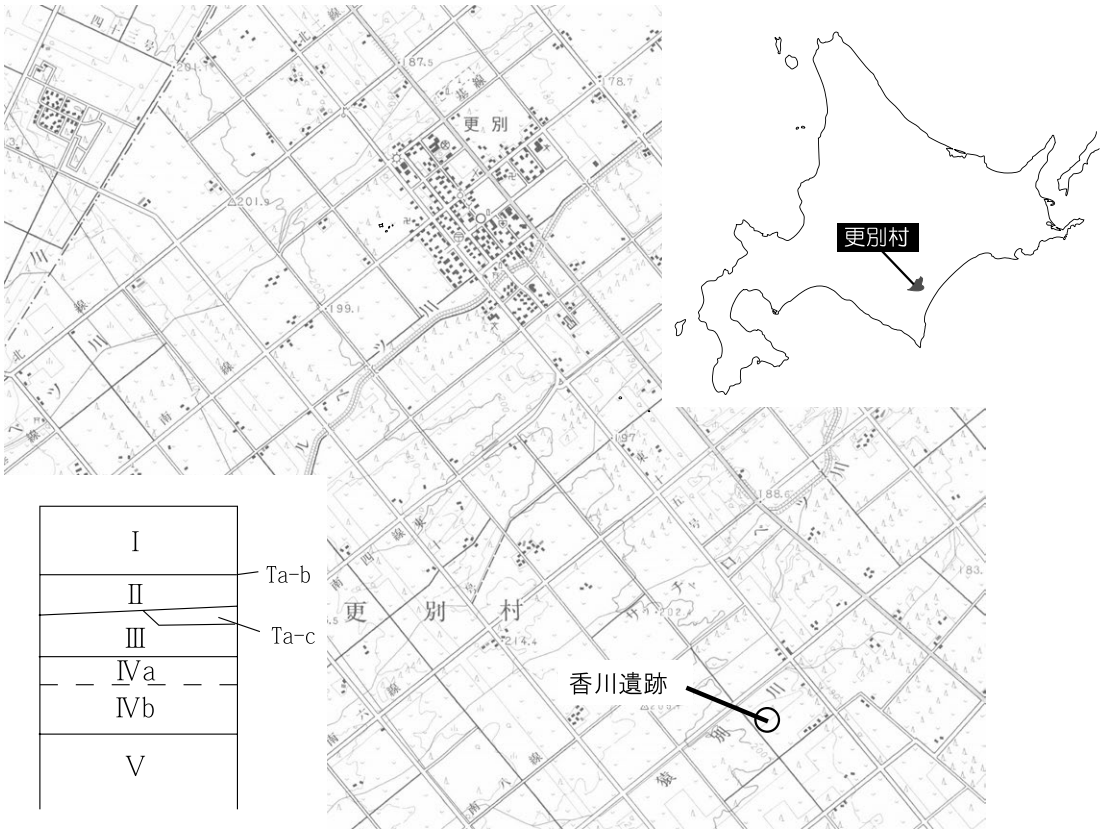
遺構と遺物

遺物はすべて石器で、北西側斜面からは極めて少なく、南東側緩斜面で忍路子型細石刃核を含む石器スポットを１か所検出した。遺物出土総数は約3,100点。ほとんどがⅣ層出土のもので、Ⅲ層から石鏃、掻器及び細石刃核が出土している。Ⅳ層からは細石刃、細石刃核、彫器、削器、掻器等が出土した。

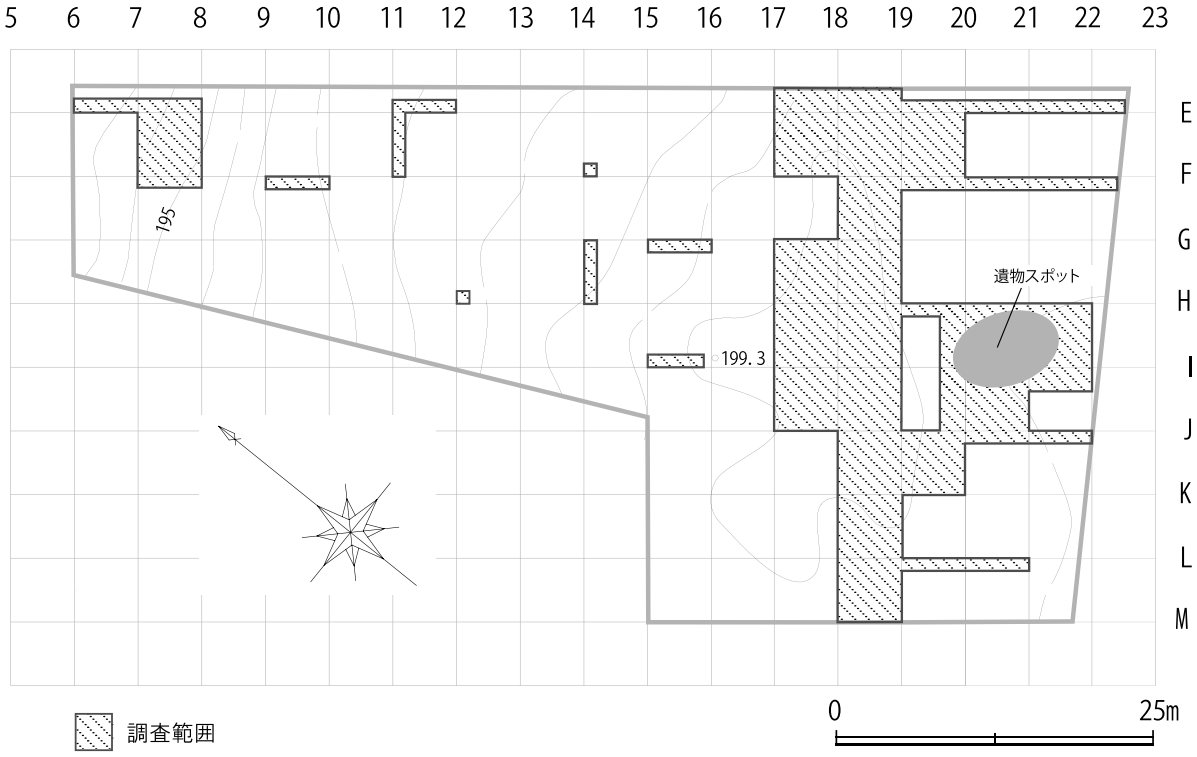
遺跡遠景

調査状況

細石刃核出土状況



土層模式図　　遺跡位置図（国土地理院５万分の１地形図「上札内」使用）



発掘調査範囲図

遠軽町　金山６遺跡（Ⅰ-17-94）

事 業 名：旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

所 在 地：紋別郡遠軽町丸瀬布金山255地先河川敷内

調査面積：520㎡

調査期間：平成23年10月11日～11月１日

調 査 員：坂本尚史、吉田裕吏洋

調査の概要

遺跡は丸瀬布市街の北東側約２kmに位置し、湧別川右岸の段丘面上、標高175m前後に立地している。今年度は主に高規格道路の橋脚部範囲に対し調査をおこなった。次年度以降も調査が継続される予定である。

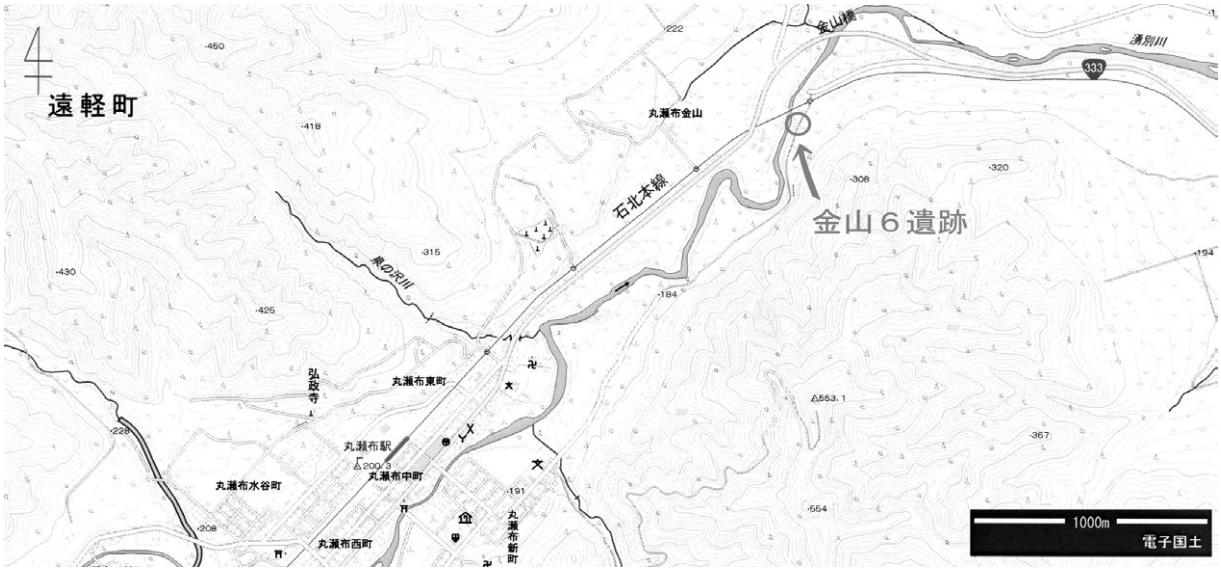
基本層序はⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：にぶい黄色土(シルト質)、Ⅲ層：黄褐色土(シルト～砂質)、Ⅳ層：砂礫層（長径１～50cm程度、円磨度の高い礫が密集）で認められた。Ⅳ層は河川堆積物と判断される。

遺構はＬ９区に遺物集中範囲２か所を確認した。遺物集中１では石槍、細片・剥片類、分割原石などが密集して出土した。遺物集中２は細片を主体としていた。

調査区全体の遺物出土状況は、Ｎラインの北側に概ねのまとまりが認められたが、その多くはⅠ層からの出土である。

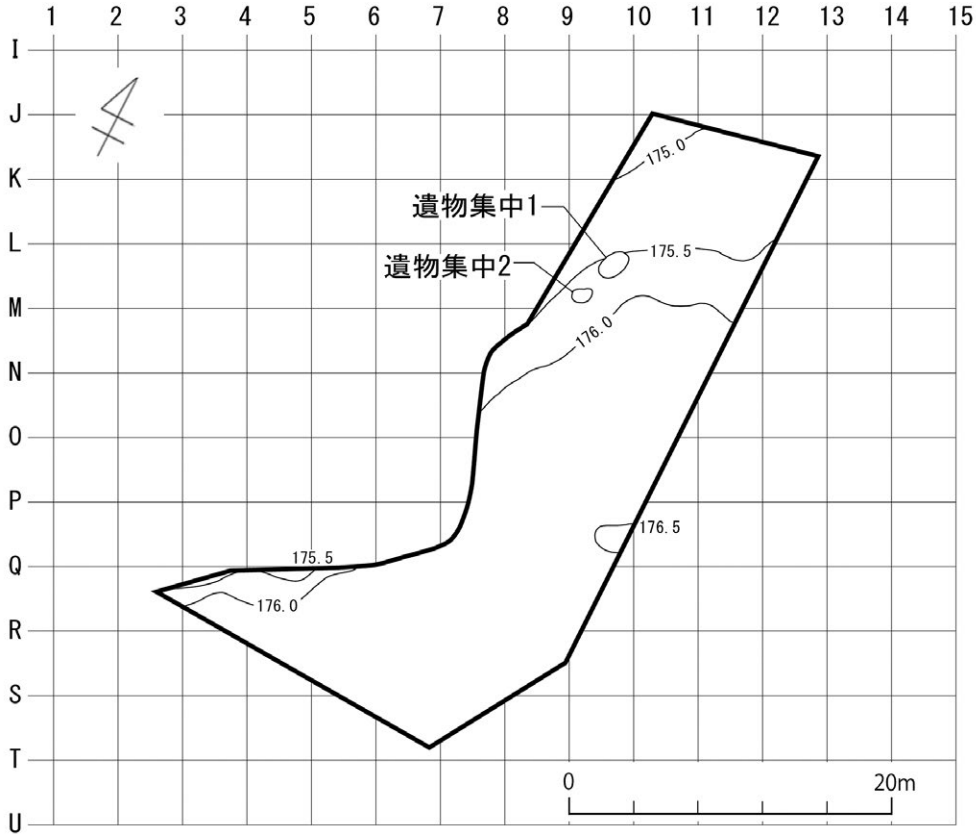
遺物は黒曜石製の石器が主体を占める。器種は石鏃、石槍、両面調整石器、スクレイパー、Ｒフレイク、剥片類、石核、原石がみられる。石槍は幅広で張出しの強いカエシ部を有するものや、茎部が全身の２分の１以上を占めるものがある。石核には連続的な縦長剥片剥離をおこなったものが認められる。遺物の形状等から、遺跡の主な時期は縄文時代中期後半から後期前葉と考えられる。

ほとんどの遺物の自然面は転礫面で、拳大の礫を半割後、剥片剥離に移行したものもみられる。剥片は石槍製作時に生じたと考えられるものが大半を占め、石槍は剥片素材のものが多い。遺跡の眼下を流れる湧別川から石材となる黒曜石原石を採取し、石槍製作を主体とした作業がおこなわれたことが考えられる。



遺跡位置図（国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものに加筆して使用）

周辺の地形と調査範囲図



遺構位置図

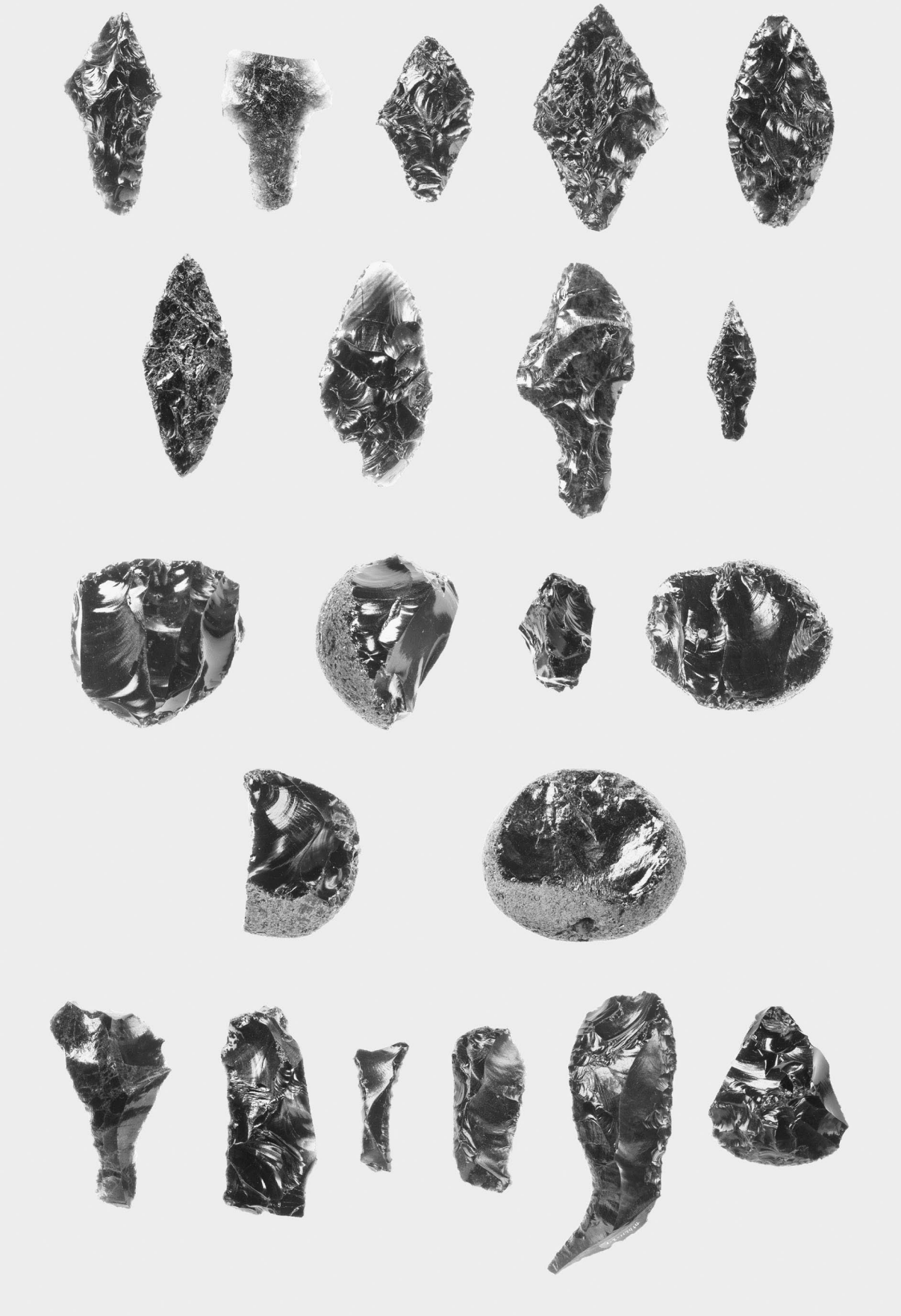
遺跡遠景（橋脚右、河岸段丘面上に調査区）

調査状況

遺物集中１検出状況

遺物集中１検出状況

遺物集中１検出状況



出土遺物

遠軽町　白滝遺跡群

事 業 名：旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

整理期間：平成23年４月１日～平成24年３月30日

調 査 員：坂本尚史、直江康雄

整理の概要

白滝遺跡群では、平成18年度以降に調査した各遺跡について二次整理作業をおこなっている。作業内容は予定報告年度によって異なり、下記のとおりである。

平成23年度刊行予定【旧白滝15遺跡・・・報告書校正作業】

平成24年度刊行予定【旧白滝５遺跡・・・図版作成作業】

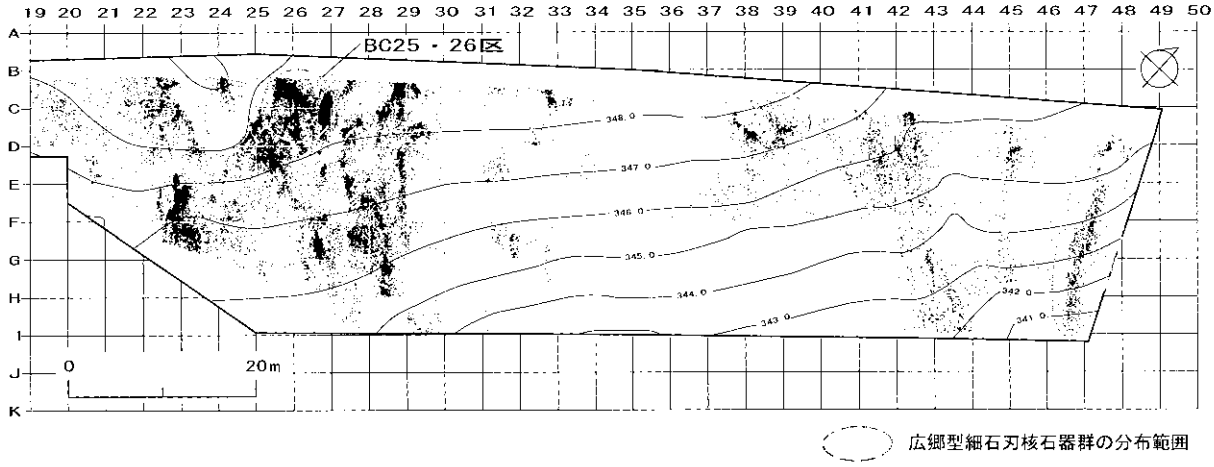
平成25年度刊行予定【旧白滝３遺跡・・・接合作業、図化作業】

ここでは旧白滝３遺跡で確認された広郷型細石刃核石器群について述べる。旧白滝３遺跡は黒曜石の原石山である赤石山から流れ出る幌加湧別川と湧別川の合流点から約１㎞下流に位置する。調査面積は3,300㎡、遺物出土点数は146万8,513点（地点計測67,242点）に及ぶ。遺跡からは台形様石器、細石刃核（広郷型・札滑型・峠下型）、有舌尖頭器、小型舟底形石器などを特徴とする複数の石器群が確認され、一部の範囲では石器群の重層的な出土状況もみられた。

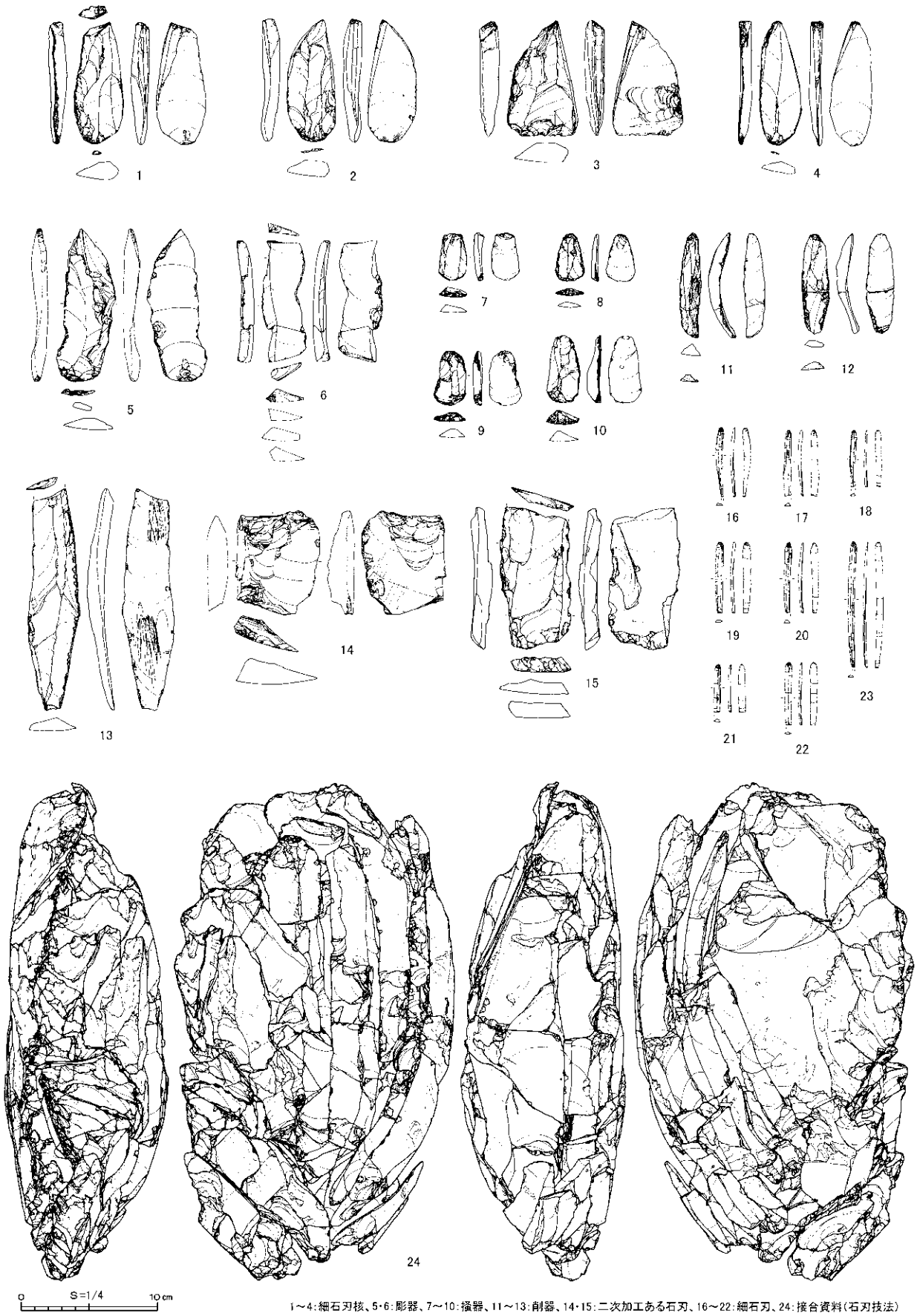
広郷型細石刃核石器群は大きく３か所の遺物の集中域が認められた。とりわけＢＣ25・26区を中心とした範囲からは細石刃・細石刃核・彫器・掻器・削器・石刃・石刃核・削片・剥片などの多量の遺物が密集状態で出土した。同範囲に対し接合作業をおこなったところ、30個体程度の石刃技法に関連する母岩別資料が復元され、一部の資料には広郷型細石刃核の接合を認めることができた。各母岩は大きさが30～50㎝、重量は８～15kg程で全て角礫素材である。

上記の内容からは、全体で300kgを超える角礫が一か所に搬入され、石刃剥離から細石刃剥離までの一連の製作作業が集中的におこなわれたことが推測できる。原石は赤石山山頂付近の露頭から運び出され、大型母型の状態で遺跡に搬入されたと考えられる。また、接合資料を観察すると石刃・石刃核の欠落が認められ、一定量の石器の搬出行為も考えることができる。

今後接合資料の分析によって技術的特徴や石材消費に関する傾向などを明らかにし、同石器群を遺した集団の行動形態について検討していきたい。



旧白滝３遺跡の遺物分布



1～4:細石刃核、5･6:彫器、7～10:掻器、11～13:削器、14･15:二次加工ある石刃、16～22:細石刃、24:接合資料(石刃技法)

旧白滝３遺跡　ＢＣ25・26区出土資料

根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群（N-01-1）

事 業 名：根室半島線（B改-637）交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道釧路総合振興局（釧路建設管理部）

所 在 地：根室市豊里43-3、44-4、101、96-11

調査面積：2,364㎡

調査期間：平成23年８月23日～10月28日

調 査 員：村田　大、愛場和人、広田良成

調査の概要

遺跡は根室半島突端の納沙布岬から西に５km程、オホーツク海に面するトーサムポロ湖周辺に位置する竪穴群である。トーサムポロ湖は北側に湖口がある周囲延長3.3kmの汽水湖で、周囲の標高約５～30ｍの台地には縄文時代早期からオホーツク文化期、擦文文化期の竪穴が2,000か所以上存在するとみられる。本遺跡は古くから知られており、昭和39年以降北構保男氏、東京教育大学（現筑波大学）、北地文化研究会などにより竪穴分布調査や縄文時代前期・縄文時代晩期・オホーツク文化期の竪穴住居跡などの発掘調査が行われている。今回の調査は道道根室半島線の改良工事に伴うもので、３年目の調査となる。

今年度の調査区はトーサムポロ湖口に東西から突き出た半島状の段丘上に立地し、西岸部分のＡ地区と東岸部分のＢ地区の２か所に分かれている。調査面積はＡ地区954㎡、Ｂ地区1,410㎡である。調査区はＡ・Ｂ地区共に道路の改良工事に伴う調査のため、長さに比べて幅の狭い細長い形状になっている。Ａ地区は標高約10ｍのほぼ平坦な地形で、Ｂ地区は標高約19～21ｍで高位と低位の平坦面とその間の緩斜面からなる地形である。なお、今年度の調査は両地区とも昨年度からの継続調査であり、Ａ地区は昨年度Ⅲ層上面まで調査を行った部分のⅢ層以下の調査、加えて東側部分の調査を新規に行った。Ｂ地区は昨年度調査区に隣接する東側部分の調査を行った。

基本層序は０層：表土、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：灰白色火山灰を含む黒褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：摩周テフラ（Ｍａ－ｇもしくはｉとｊ）、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：黄褐色ロームである。Ⅱ層中の灰白色火山灰は上下２枚に分かれ、上位は樽前ａテフラ（1739年降下）、下位は駒ヶ岳c_2テフラ（1694年降下）とみられる。遺構・遺物はＡ地区ではⅠ～Ⅲ・Ⅴ層、Ｂ地区ではⅢ層から検出している。

遺構と遺物

〔Ａ地区〕検出した遺構は貝塚５か所（ＳＭ-13～17）、竪穴住居跡６軒（ＯＨ-1,2,6,7、Ｈ-4、ＬＨ-3）、土坑墓5基（ＧＰ-1～5）、土坑136基（Ｐ-1～136）、柱穴・杭穴165基、焼土９か所（Ｆ-2～10）、配石８か所（Ｓ-1～8）、フレイク集中８か所（ＦＣ-2～9）、骨片集中３か所（ＬＢ－１、ＦＢ－１・２）である。遺構の時期は縄文時代早期・前期、オホーツク文化期、アイヌ文化期のものがあり、オホーツク文化期、アイヌ文化期の遺構が多く、縄文時代の遺構は少ない。また、フレイク集中の時期は不明である。

縄文時代早期では竪穴住居跡を１軒（ＬＨ-3）、前期では竪穴住居跡１軒（Ｈ-4）と土坑を検出した。オホーツク文化期の遺構は最も多く、竪穴住居跡、土坑墓、土坑、焼土、集石、骨片集中を調査区のほぼ全面で検出した。時期は多くが貼付文期と推定される。竪穴住居跡４軒（ＯＨ-1,2,6,7）は調査の結果、昭和51・52年に東京教育大学（現筑波大学）と北地文化研究会が共同で調査を行った、1,2,6,7号竪穴であることが判明した。土坑墓５基はいずれも上面に配石（Ｓ-1～4）を伴うもので、配石下から土坑墓を５基検出した。土坑墓は平面形が隅丸長方形で、規模は長軸１ｍ前後、短軸は0.7ｍ前後のものが多い。人骨が遺存するものは２基みられたが、遺存状態は悪く糊状に残る程度である。副葬品は配

石直下の覆土上位でオホーツク式土器が倒立ないし横倒し状態で出土するものや、坑底付近で石鏃や鉄製品が副葬されるものがみられた。土坑の多くはこの時期のものであり、その多くは掘り方を有する柱穴と考えられる。焼土の中には石組みを伴うものもみられた。骨片集中３か所の内２か所は被熱した骨片の集中で、小規模な焼土を伴う。

アイヌ文化期の遺構は貝塚、柱穴・杭穴、焼土があり、柱穴・杭穴は調査区のほぼ全面に分布している。時期は、Ⅱ層中の樽前ａ降下テフラと推定される灰白色火山灰より上位で検出されているため、18世紀中葉以降の近世アイヌ文化期と考えられる。

遺物は土器が約5,200点、石器等約8,600点、金属製品約60点、他に骨角器（こっかくき）などが少量出土した。骨角製装身具（クツクルケシ状製品）１点も出土している。他にフレイク集中等の土壌水洗選別によりフレイク・チップ等を約28,500点回収した。また、貝塚・骨片集中に伴い、貝殻・獣骨・魚骨などの動物遺存体が出土している。

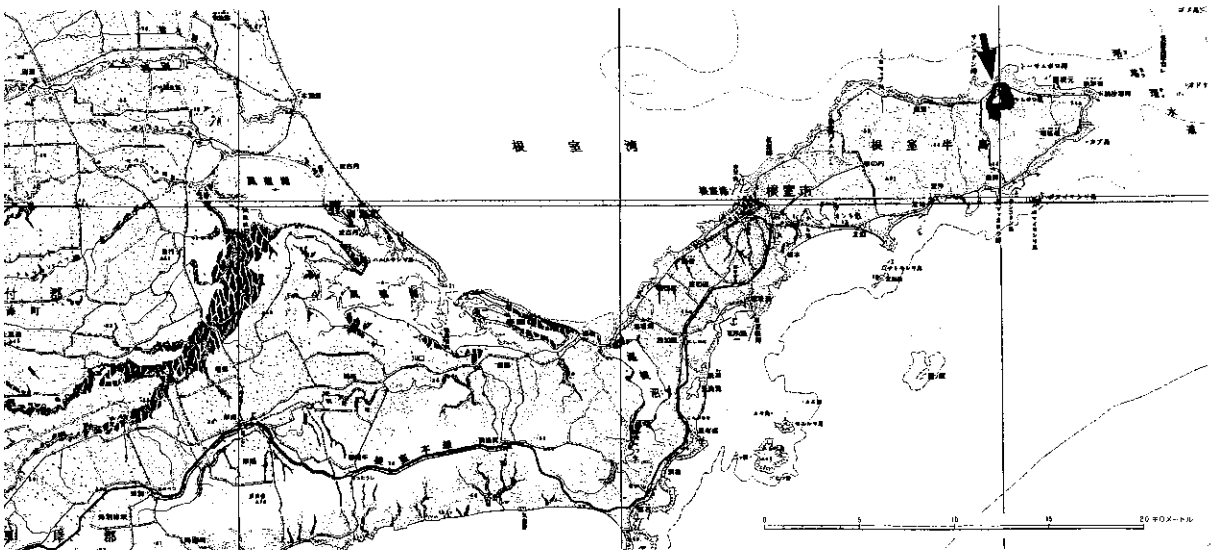
土器では、縄文時代早期～後期、オホーツク式土器、擦文土器、須恵器（すえき）などが出土し、この中では貼付文が施されたオホーツク式土器が最も多い。石器等は黒曜石製のフレイクが多く、道具類では石鏃、砥石が比較的多い。また、Ｖ層から石刃鏃（せきじんぞく）石器群に伴う彫器、石刃などが少量出土している。

〔Ｂ地区〕検出した遺構は竪穴住居跡９軒（H-10～18）、土坑17基（Ｐ-9～25）、集石１か所（Ｓ-1）・フレイク集中１か所（ＦＣ-2）である。時期はいずれも縄文時代前期と考えられる。

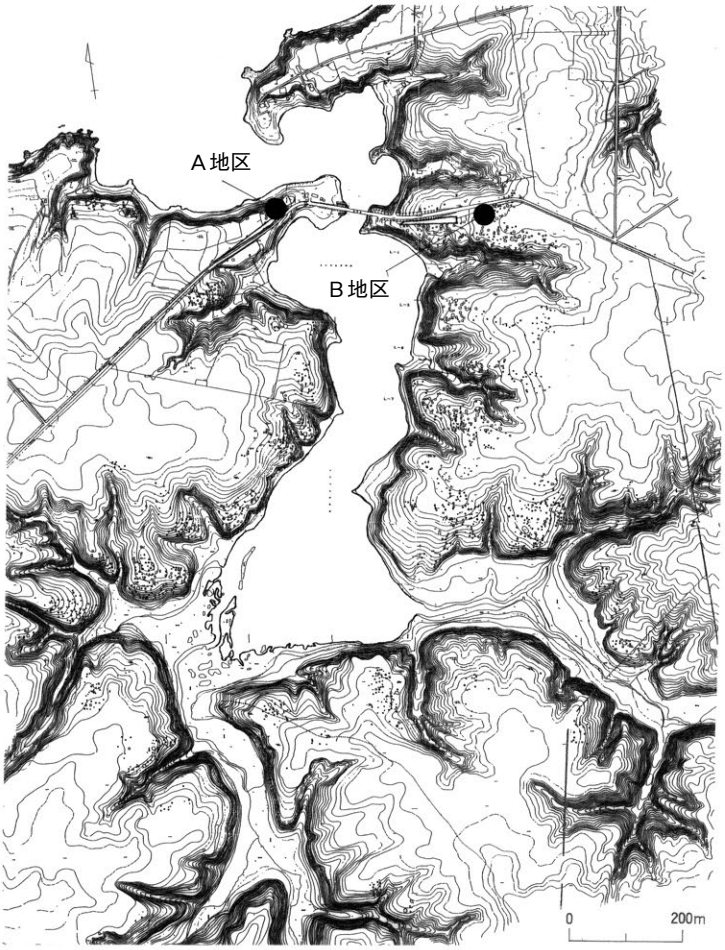
竪穴住居跡は標高約20～21ｍの高位平坦面に分布している。平面形は楕円形で、規模は径４～５ｍ程のものが多く、掘り込みが非常に浅いもの（H-11・18）がある。また短軸径が８ｍを超える大型の焼失住居跡（H-13）も１軒検出し、半分のみの調査だが、柱穴が60か所以上確認された。

土坑は竪穴住居跡と同様の分布を示し、平面形は円形・楕円形で、規模は0.7～3ｍと幅広い。覆土中に土器（Ｐ-13・20）や礫（Ｐ-19・24）がまとまってみられるものがある。

遺物は土器が約4,100点、石器等が約9,000点出土した。他にフレイク集中等の土壌水洗選別によりフレイク・チップ等を約8,000点回収した。土器は縄文時代前期の押型文尖底土器（おしがたもんせんていどき）が多く、縄文時代早期や後期の土器も少量みられた。石器は黒曜石製のフレイクが多く、他に石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー・砥石などがある。

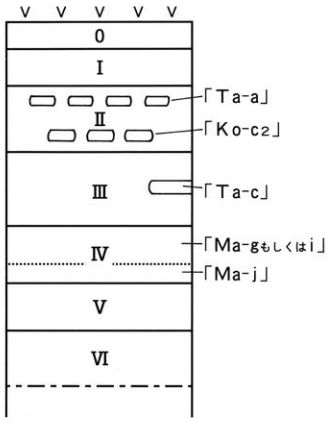


遺跡の位置（国土地理院20万分の１地勢図「標津」「根室」を使用）



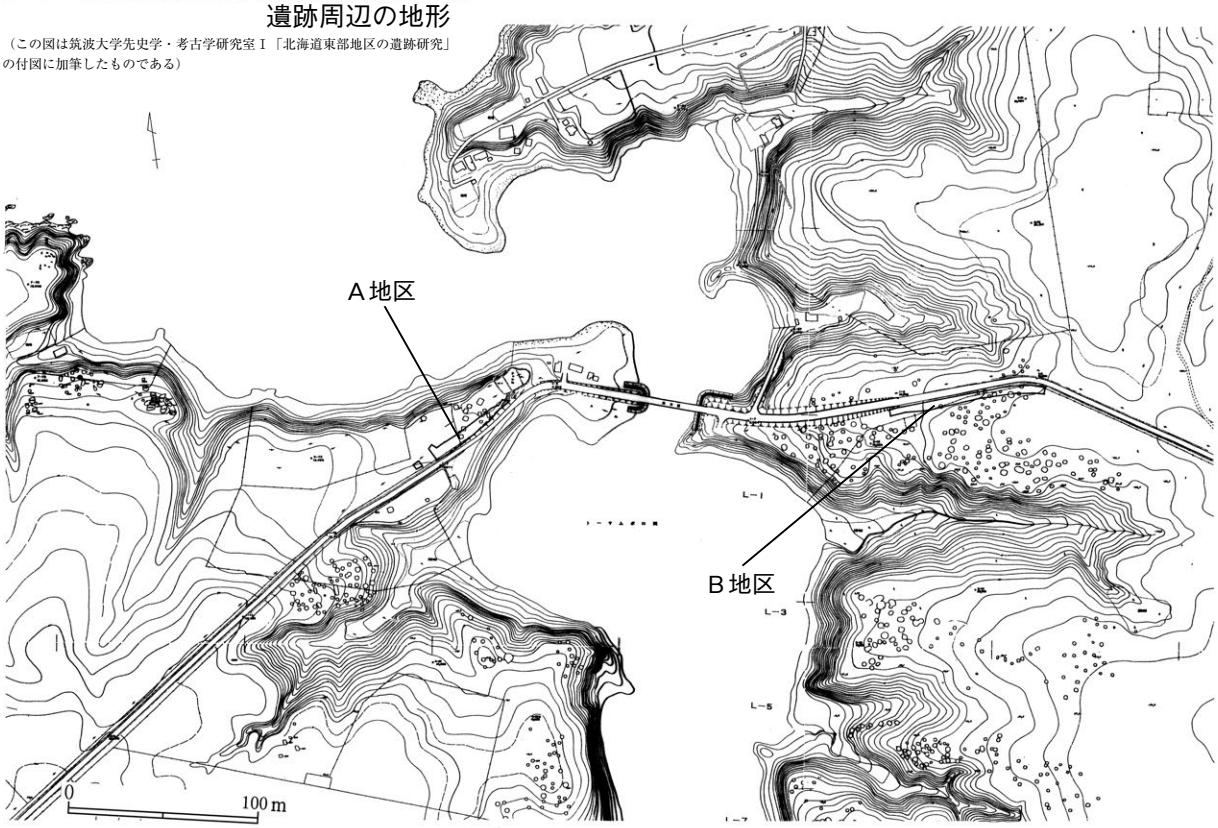
遺跡周辺の地形

（この図は筑波大学先史学・考古学研究室Ⅰ「北海道東部地区の遺跡研究」の付図に加筆したものである）



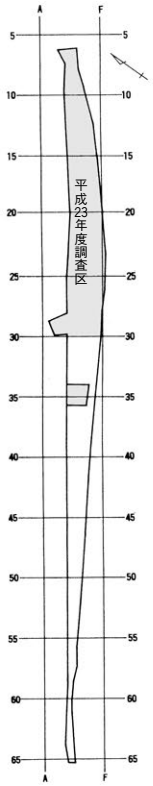
基本層序模式図

0層：表土
Ⅰ層：黒色土（アイヌ文化期）
Ⅱ層：灰白色火山灰を含む黒褐色土
上位 「Ta-a」（樽前山起源の降下火山灰：1739年降下）？
下位 「Ko-c2」（駒ケ岳起源の降下火山灰：1694年降下）？
Ⅲ層：黒色土（縄文時代前期～擦文文化期）
※Ⅲ層中に「Ta-c」（樽前山起源の降下火山灰）？が部分的に含まれる
Ⅳ層：摩周テフラ（約7,000年前降下）
上位 「Ma-gもしくはi」（摩周カルデラ起源の降下軽石）
下位 「Ma-j」（摩周カルデラ起源の降下火山灰）
Ⅴ層：黒色土（縄文時代早期）

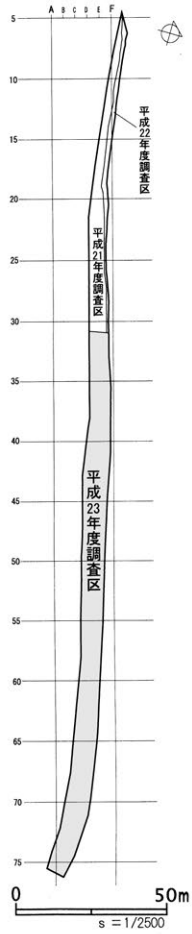


調査範囲図

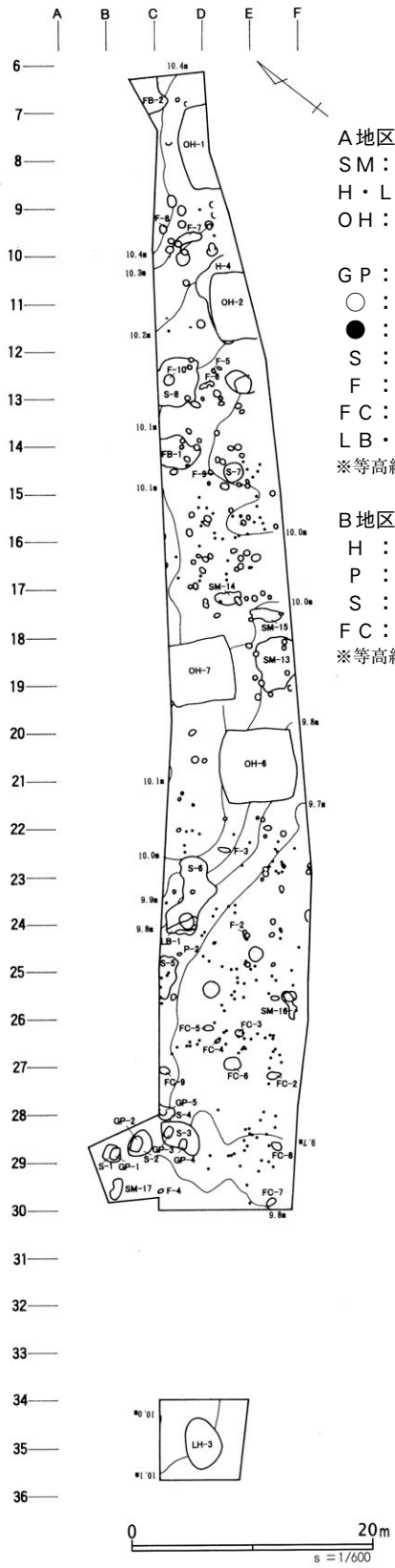
（この図は筑波大学先史学・考古学研究室Ⅰ「北海道東部地区の遺跡研究」の付図に加筆したものである）



Ａ地区年度別調査範囲



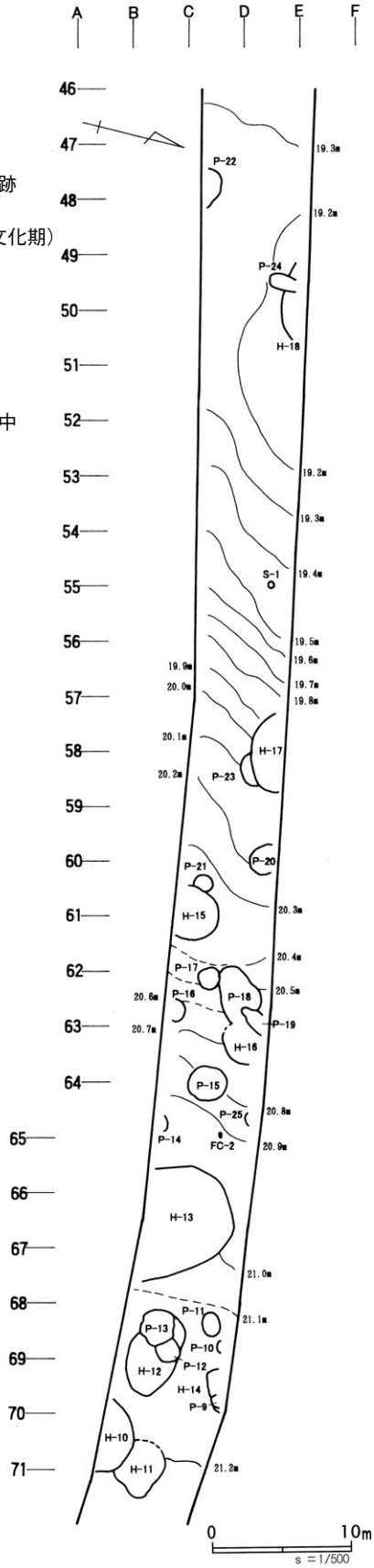
Ｂ地区年度別調査範囲



Ａ地区遺構位置図

Ａ地区
ＳＭ：貝塚
Ｈ・ＬＨ：竪穴住居跡
ＯＨ：竪穴住居跡
（オホーツク文化期）
ＧＰ：土坑墓
○：土坑
●：杭穴・柱穴
Ｓ：集石
Ｆ：焼土
ＦＣ：フレイク集中
ＬＢ・ＦＢ：骨片集中
※等高線はⅣ層上面

Ｂ地区
Ｈ：竪穴住居跡
Ｐ：土坑
Ｓ：集石
ＦＣ：フレイク集中
※等高線はⅣ層上面



Ｂ地区遺構位置図（46～71ライン）

Ａ地区調査状況

土坑墓（ＧＰ－１）遺物出土状況

土坑墓（ＧＰ－３）遺物出土状況

オホーツク文化期の土坑

骨片集中（ＬＢ－１）

B地区調査状況

B地区縄文時代前期竪穴住居跡（H−13）

3　現地研修会の記録

平成23年９月29・30日（木・金）の両日、遠軽町・下川町・名寄市において、現地研修会を行った。29日は北海道立埋蔵文化財センターの指定管理業務「市町村担当職員出前研修会」との合同開催である。

今回のテーマは、「道東北における旧石器遺跡の調査と出土資料の公開活用―遠軽町白滝遺跡群と下川町内の遺跡―」とし、講義・資料館見学・調査遺跡見学などで構成した。講義は開館したばかりの遠軽町埋蔵文化財センターに会場を設けて行った。

最初の講義は当センター直江主任による「白滝遺跡群の調査と整理」で、調査概要と現時点の調査成果が示された。次に遠軽町教育委員会の学芸員松村愉文氏による「国指定史跡「白滝遺跡群」と出土資料の公開活用」では、白滝地区の発掘調査の歴史や史跡指定までの経過、ジオパークとの関連などの話があり、遠軽町埋蔵文化財センターの概要が説明された。継いで埋蔵文化財センターの見学にあたり、町教育委員会の学芸員瀬下直人氏から、展示の主旨や構成を含めた解説があった。多忙な中にもかかわらず、会場設定や講義・解説の対応をしていただいた遠軽町の松村・瀬下の両氏に深く感謝いたします。

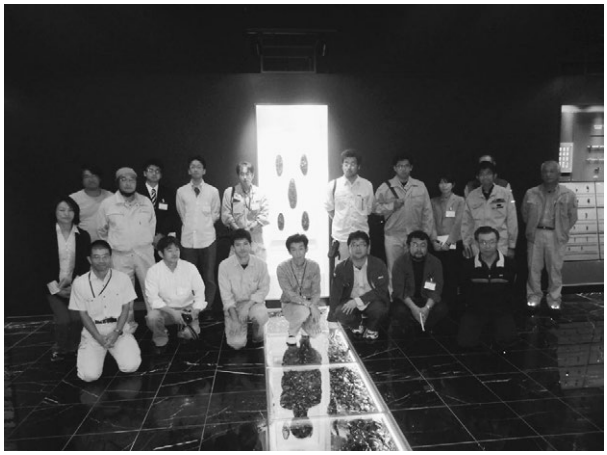
遠軽町埋蔵文化財センターを出てすぐ、白滝ＩＣからの移動バス内では、調査を終えた遺跡の位置・立地等や「赤石山」が、直江主任から紹介された。

30日は下川町北町Ｊ遺跡を担当の笠原課長・直江主任の解説で見学した。遺跡の鍵となる珪化岩のあり方や現場への渡河進入路・ヒグマ対策などの説明があった。その後、下川町ふるさと交流館（解説：直江主任）、名寄市北国博物館（解説：吉田清人学芸員）と移動し、埋蔵文化財や地質関係資料を中心に見学をした。以下、研修会の日程を示す。

９月29日（木）　ＪＲ旭川駅前　集合
　　遠軽町埋蔵文化財センター　講義・見学
　　遠軽町　白滝遺跡群　車窓から見学
　　下川町　五味温泉　情報交換会・宿泊
９月30日（金）　下川町　北町Ｊ遺跡　見学
　　下川町　ふるさと交流館　見学
　　名寄市　北国博物館　見学
　　ＪＲ旭川駅前　解散

遠軽町埋蔵文化財センターでの講義

遠軽町埋蔵文化財センター見学



遠軽町埋蔵文化財センター展示室にて

名寄市　北国博物館見学

下川町　サンル４線遺跡見学

下川町　北町Ｊ遺跡にて

4　協力活動及び研修

⑴　協力活動（日付は平成23年のもの）

ア　発掘現場見学

＊江別市　対雁２遺跡

10月５日　江別市立対雁小学校　遺跡見学

10月10日　石狩川と縄文人の漁業を学ぶツアー　遺跡見学

＊長沼町　南六号川左岸遺跡

８月29日　北広島市民大学ＯＢ会　体験発掘

９月１日　千歳高星大学第11期生　遺跡見学

９月６日　長沼町立北長沼小学校　遺跡見学

９月10日　恵庭カリンバの会　遺跡見学

９月15日　NHK文化センター新さっぽろ教室　遺跡見学

９月21日　長沼町立南長沼小学校　体験発掘

10月７日　長沼町教育委員会　遺跡見学

＊長沼町　幌内Ｄ遺跡

10月７日　長沼町教育委員会　遺跡見学

＊福島町　館崎遺跡

７月３日　福島町教育委員会　遺跡見学

７月21日　福島町立吉岡小学校　遺跡見学

９月９日　福島町立福島小学校　遺跡見学

＊木古内町　札苅５遺跡

６月14日　木古内町文化財審議委員　遺跡見学

＊木古内町　札苅６遺跡

６月14日　木古内町文化財審議委員　遺跡見学

７月28日　七飯町歴史館ジュニア探検クラブ　体験発掘

９月23日　北の縄文パネル展　体験発掘

９月29日　木古内町立木古内小学校　体験発掘

＊木古内町　木古内遺跡

６月２日　札幌市立定山渓中学校　遺跡見学

６月９日　木古内町教育委員会新人研修　遺跡見学

＊北斗市　当別川左岸遺跡

８月31日　北斗市文化財保護審議会　遺跡見学

＊北斗市　押上１遺跡

７月27日　子どもチャレンジ講座「夏休み体験発掘講座」　体験発掘

８月19日　弘前大学　遺跡見学

８月31日　北斗市文化財保護審議会　遺跡見学

＊下川町　北町Ｊ遺跡

10月18日　下川町文化財保護審議員　遺跡見学

＊根室市　トーサムポロ湖周辺竪穴群

９月17日　根室市歴史と自然の資料館史跡見学会「根室の史跡を訪ねて」　遺跡見学

10月22日　釧路考古学研究会　遺跡見学

イ　委員会等の会議

＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会

５月17日　第１回役員会（東京都　坂本（均）・中田）

６月16・17日　平成23年度総会（高知県高知市ほか　坂本（均）・中田・花岡・小杉）

10月13・14日　北海道・東北地区会議ならびに北海道・東北地区コンピューター等研究委員会（江別市　松本・畑・中田・千葉・三浦・葛西・菅野・礒田・鎌田・小杉・小笠原・倉橋）

10月14日　陳情・要望活動（東京都　坂本（均））

12月１・２日　第２回役員会（東京都　坂本（均）・中田）

＊網走市史跡最寄貝塚保存整備委員会

２月９日　平成22年度第２回委員会（網走市　畑）

＊財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

４月12・13日　平成23年度助成事業審査委員第１回役員会（札幌市　畑）

＊恵庭市史跡カリンバ遺跡整備計画策定委員会

２月３日　第５回委員会（恵庭市　畑）

＊洞爺湖町国指定史跡入江・高砂貝塚整備検討委員会

２月28日・３月１日　第12回史跡入江・高砂貝塚整備検討委員会（洞爺湖町　畑）

＊北海道アイヌ協会

８月５日　北海道大学アイヌ納骨堂におけるイチャルパ（札幌市　三浦）

10月４日　札幌医科大学収蔵アイヌ人骨・遺跡出土人骨イチャルパ（札幌市　三浦）

＊NPO法人三内丸山縄文発信の会

縄文の漆複製プロジェクト

５月28日　第４回検討委員会（青森県青森市　田口）

８月５日　第５回検討委員会（函館市　田口）

＊北海道文化財保護協会

６月22日　第２回役員会（札幌市　千葉）

ウ　調査指導および講演会等の講師

＊北海道大学埋蔵文化財調査室

２月13日　第４回調査成果報告会（札幌市　田口）

＊札幌大学埋蔵文化財展示室

平成23年３月～平成24年３月　金属製品保存処理の指導・助言（札幌市　田口）

＊札幌国際大学

４月22日　遺物保存処理の指導（札幌市　田口）

＊札幌幌南ロータリークラブ

６月３日「北海道の遺跡発掘」（札幌市　畑）

＊千歳市教育委員会埋蔵文化財センター

７月５日　チャシ跡等調査の指導・助言（千歳市　三浦・鈴木（信））

＊上ノ国町教育委員会

９月７～９日　町内出土遺物保存処理事業の指導・助言（上ノ国町　田口）

＊木古内町教育委員会

10月５日　平成23年度公民館講座　木古内郷土学習講座

「木古内ゼミナール～中世の木古内を探る」（木古内町　酒井）

＊知内町教育委員会

10月23日「考古学物語-日本最古の墓出土品の歴史的意義-」講演会（知内町　畑）

＊中川町教育委員会

11月７・８日　中川町佐久オフイチャシ跡火山灰の確認およびサンプリング（中川町　花岡）

＊森町教育委員会

11月22・23日「北海道南西部の縄文遺跡について」講演会（森町　冨永）

＊NPOネットプロジェクトオホーツククラスター湧別川流域研究部会

11月23日「ジオパークと埋蔵文化財を活かした地域活性化について」（遠軽町　畑）

＊石狩市教育委員会

12月３日「石狩市の遺跡と世界遺産」（石狩市　畑）

＊南北海道考古学情報交換会

12月３・４日　平成23年度発掘調査報告会（函館市　遠藤・愛場・冨永・阿部・福井・酒井）

＊恵庭市教育委員会

12月６日　恵庭市ユカンボシＥ11遺跡出土炭化材樹種同定（札幌市　田口）

＊弘前学院大学地域総合文化研究所

12月10・11日「北日本・民族文化の考古学・考現学講座－北日本の縄文文化とアイヌ文化の大きい住居の考古学・考現学」（青森県弘前市　三浦）

＊北海道考古学会

12月17日　平成23年度遺跡調査報告会（札幌市　佐川・阿部・福井・酒井）

＊北海道大学埋蔵文化財調査室

12月27日　遺物の保存処理に関する技術指導および協力（札幌市　田口）

⑵　研修（日付は平成23年のもの）

ア　外部研修

＊文化庁

２月８～10日　平成22年度第２回埋蔵文化財担当職員等講習会（埼玉県さいたま市　袖岡）

９月７～９日　平成23年度第１回埋蔵文化財担当職員等講習会（新潟県新潟市　菅野・今本）

＊国立文化財機構奈良文化財研究所

12月20～22日　保存科学研究集会2011

「被災文化財のレスキュー　―保存科学の果たすべき役割と課題―」

（奈良県奈良市　田口）

＊日本第四紀学会

８月26～28日　2011大会（徳島県鳴門市　花岡）

＊北海道教育委員会

10月20日　平成23年度アイヌ文化財専門職員等研修会

「アイヌ文化に関する文化財の現状と課題」（札幌市　田口）

＊全国埋蔵文化財法人連絡協議会

10月27・28日　平成23年度研修会（福島県白河市　皆川・湯田）

12月9～14日　海外研修（中華人民共和国四川省　笠原・新家）

イ　内部研修

＊平成23年度現地研修会

９月29・30日（遠軽町・下川町　10名）

＊平成23年度発掘調査報告会

11月30日（センター研修室）

5　平成23年度刊行報告書

第281集『木古内町　蛇内２遺跡』

北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

第282集『北斗市　館野遺跡（２）』

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第283集『北斗市　館野２遺跡　Ａ地区・Ｂ地区』

高規格幹線道路函館江差自動車道建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第284集『千歳市　キウス５遺跡（９）』

道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第285集『千歳市　祝梅川小野遺跡（１）・梅川１遺跡（１）』

道央圏連絡道路工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第286集『遠軽町　白滝遺跡群ＸⅡ』

旭川紋別自動車道遠軽町遠軽地区埋蔵文化財発掘調査報告書

第287集『鶴居村　下幌呂１遺跡』

釧路鶴居弟子屈線（Ａ交－57）交付金工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第288集『富良野市　中五区１遺跡・中五区２遺跡・中五区３遺跡』

旭川十勝道路富良野市富良野道路建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書

第289集『下川町　北町Ｊ遺跡（２）』

天塩川サンルダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第290集『松前町　福山城下町遺跡』

町道朝日豊岡線代行事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第291集『更別村　香川遺跡』

帯広広尾自動車道中札内大樹道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第292集『木古内町　大平４遺跡（２）・蛇内２遺跡（２）』

北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

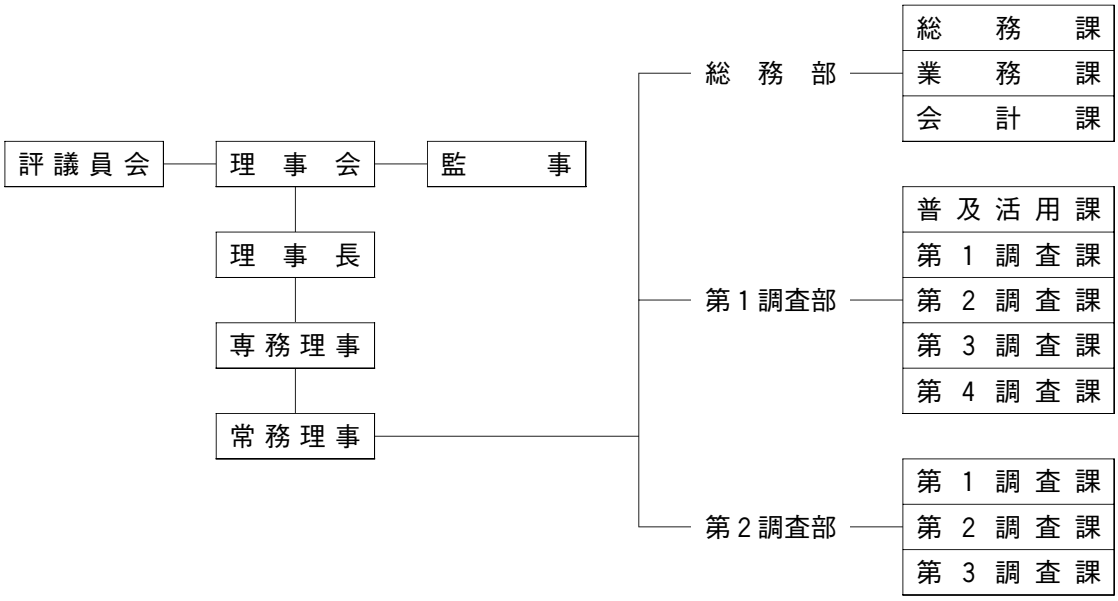
6　組織・機構

役　　員（平成23年６月１日現在）

理事長	坂本　均	常勤
専務理事	松本昭一	常勤
常務理事	畑　宏明	常勤
理事	臼杵　勲	非常勤
理事	菊池俊彦	非常勤
理事	越田賢一郎	非常勤
理事	田端　宏	非常勤
理事	平川善祥	非常勤
理事	本田優子	非常勤
理事	森重楯一	非常勤
理事	山本伸弘	非常勤
監事	佐藤一夫	非常勤
監事	村山邦彦	非常勤

評議員（平成23年６月16日現在）

評議員	氏家　等	非常勤
評議員	川上　淳	非常勤
評議員	木村方一	非常勤
評議員	佐藤俊和	非常勤
評議員	昌子守彦	非常勤
評議員	白崎三千年	非常勤
評議員	谷　直人	非常勤
評議員	鶴丸俊明	非常勤
評議員	戸塚　隆	非常勤
評議員	西　幸隆	非常勤
評議員	松田光晥	非常勤
評議員	横山健彦	非常勤



7　職　　員（平成23年４月１日現在）

総務部

総務部長	中田　仁
総務課長	葛西宏昭
主査	小杉　充
参与	北浦　満
参与	前田克己
業務課長	菅野　聡
主査	小笠原　学
主任	今本宏信
参与	湯田俊一
参与	佐藤龍夫
参与	徳田京一
会計課長	磾田千秋
主任	中村貴志

第１調査部

第１調査部長	千葉英一
普及活用課長	鎌田　望
主査	藤本昌子
主査	倉橋直孝
主査	藤井　浩
第１調査課長	田口　尚
主査	花岡正光
主任	吉田裕史洋
第２調査課長	鈴木　信
主査	菊池慈人
主査	鈴木宏行
主査	末光正卓
主任	山中文雄
第３調査課長	土肥研晶
主査	皆川洋一
主査	阿部明義
主査	袖岡淳子
主査	佐藤　剛
主任	冨永勝也
第４調査課長	笠原　興
主査	佐川俊一
主査	谷島由貴
主査	越田雅司
主査	坂本尚史
主任	直江康雄

第２調査部

第２調査部長	三浦正人
第１調査課長	遠藤香澄
主査	中山昭大
主査	影浦　覚
主査	立田　理
主任	福井淳一
主任	柳瀬由佳
第２調査課長	熊谷仁志
主査	立川トマス
主査	芝田直人
主任	酒井秀治
主任	佐藤和雄
第３調査課長	村田　大
主査	新家水奈
主査	愛場和人
主査	広田良成
主査	大泰司　統

調　査　年　報　24

平成23年度

平成24年 3 月19日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL http://www.domaibun.or.jp
E-mail mail@domaibun.or.jp
印　　刷　社会福祉法人 北海道リハビリー
〒061-1195 北広島市西の里507番地1
TEL 011-375-2116㈹・FAX 011-375-2115